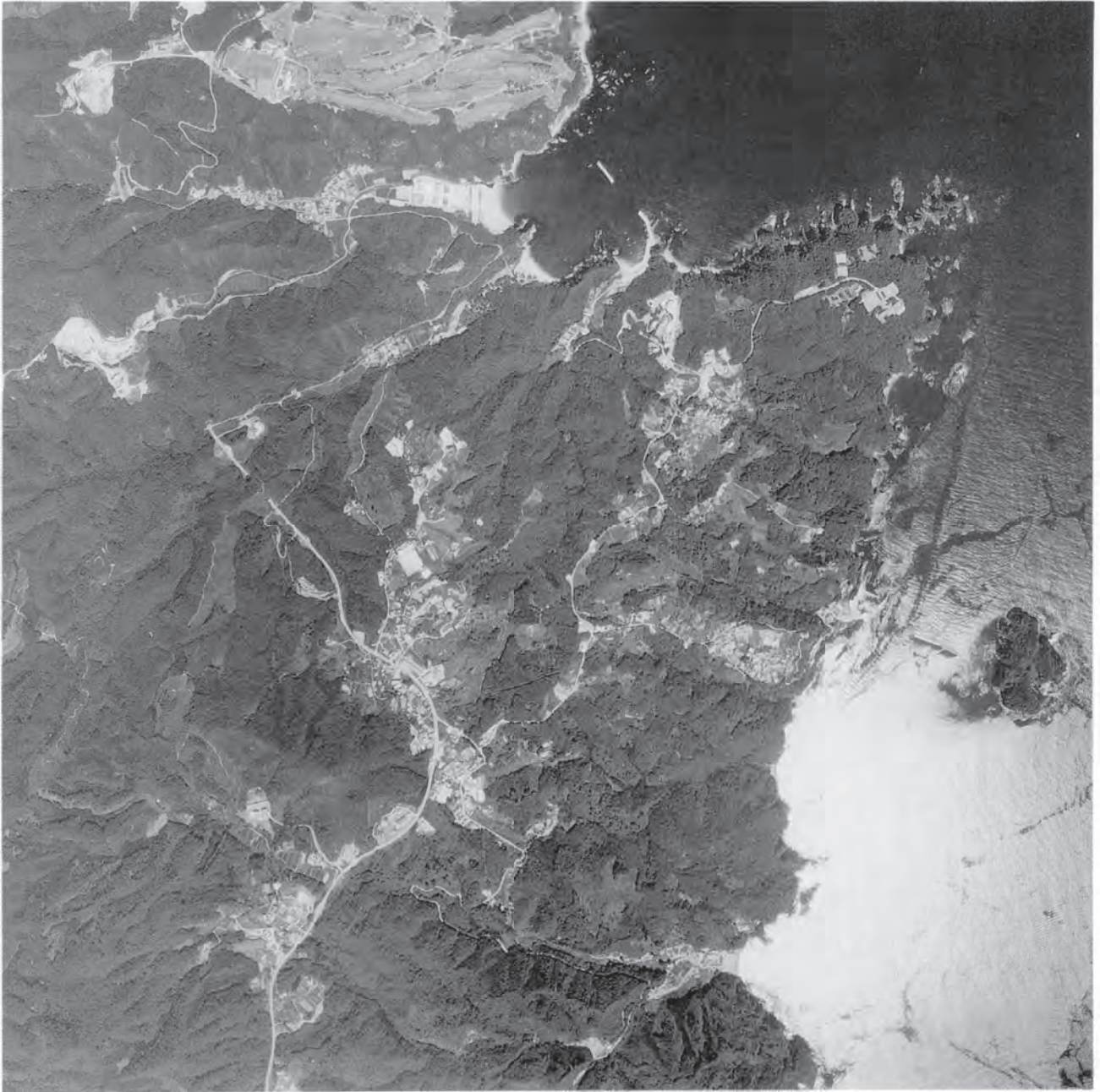


# 崎山遺跡群 II

—昭和62年度発掘調査概報—



| 崎山遺跡群垂直写真

1988.3

岩手県宮古市教育委員会  
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

カラー1 崎山貝塚航空写真

カラー2 崎山貝塚遺物出土状況



(カラー1)



(カラー2)



カラー3 崎山貝塚出土骨角器



カラー4 崎山貝塚出土骨角器  
(中嶋コレクション)



(カラー3)



(カラー4)



## 序 文

宮古市の北郊に位置する崎山遺跡群には、崎山貝塚、大付遺跡、白石遺跡などの重要な遺跡が存在し、古くから注目され、調査研究がなされてきました。

しかし、これらの成果の大半は公表されることなく現在に至っており、その実態は全く不明瞭なままとなっております。

宮古市では、昭和57年度から昭和60年度にかけて実施した第1期市内遺跡分布調査事業の成果をふまえながら、この崎山遺跡群の内容をより詳細に究明するとともに、遺跡群の保護を目的とし、国庫、県費補助を受け、第1期を五ヶ年計画として崎山遺跡群発掘調査事業を策定いたしました。

本書は、崎山遺跡群の2年目の調査成果をまとめた概報ではありますが、調査の結果、白石遺跡からは縄文時代中期末葉の竪穴住居跡や土壇跡などが密集した状態で検出されております。

崎山貝塚からは、貝塚の中心的な貝層のひとつと思われる縄文時代前期前葉～中期初頭に伴う貝層を検出しております。貝層からは多様な骨角器類や、魚骨・獣骨を主体とするおびただしい量の自然遺物が出土いたしました。

崎山貝塚は、三陸沿岸地方では数少ない縄文時代前期の貝塚として非常に貴重な情報を提供し得る遺跡ではありますが、今後発掘調査を継続的に実施し、その内容を把握し、何らかの保存対策を構じてまいりたいと考えております。

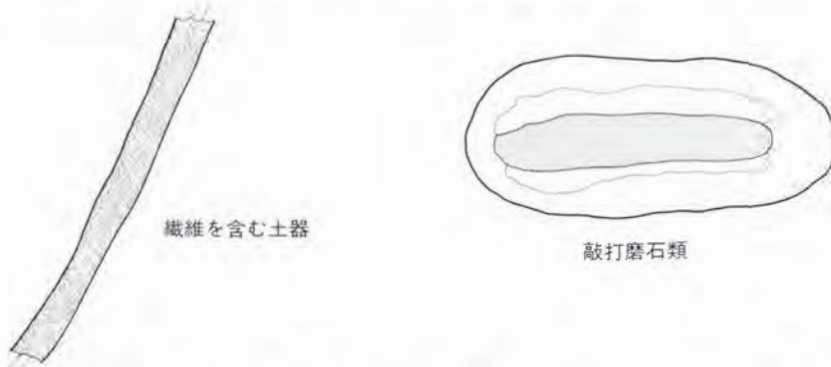
最後に、調査にあたっては北海道大学の林謙作先生、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生、岩手県教育委員会の相原康二・佐々木勝先生をはじめ多くの方々の指導、助言をいただき円滑に作業を進めることができました。心より感謝申し上げます。

宮古市教育委員会

教育長 小野 寺 聡

## 例 言

1. 本書は昭和62年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群白石遺跡第2次調査および崎山貝塚第2次調査の概報である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長・小野寺聰）で、発掘調査および本書の執筆、編集は高橋が担当し、盛谷・鎌田がこれを補佐した。
3. 調査座標は平面直角座標第X系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。  
座標軸方向——第X系に準じる  
調査座標原点——X-35800.000、Y+97000.000
4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 遺物の表現については繊維を含む土器および敲打磨石類の磨面を次のように表示した。



6. 発掘調査および遺物の整理、報告書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

林 謙作（北海道大学）	中村 良幸（大迫町教育委員会）
西本 豊弘（国立歴史民俗博物館）	武田 将男（宮古市教育委員会）
藤沼 邦彦（東北歴史資料館）	佐藤 正彦（陸前高田市立博物館）
瀬川 司男（崎山中学校）	熊谷 賢（東北学院大学学生）
相原 康二（岩手県教育委員会文化課）	中嶋 隆（宮古市在住）
佐々木 勝（「」）	
小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）	
熊谷 常正（岩手県立博物館）	

なお、自然遺物の同定については西本、熊谷（常）、佐藤、熊谷（賢）諸氏の御協力があった。

7. 本文中の引用文献の略称は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会発行）

1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 → 『大付報文79』  
熊谷 常正  
1983～86 『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』 武田将男 → 『分布調査 1～4』  
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』  
1987 『崎山貝塚・トロノ木IV遺跡調査報告書』 上野猛 → 『崎山報文87』  
1987 『崎山遺跡群Ⅰ 昭和61年度発掘調査概報』 高橋憲太郎 → 『崎山遺跡群Ⅰ』



# 目 次

序 文	
側 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査要旨	1
2. 調査体制	1
II 調査内容	4
1. 白石遺跡第2次調査	4
(1) 遺構の検出状況	4
(2) 検出された遺構・遺物	9
2. 崎山貝塚第2次調査	32
(1) 第1次調査の概要	32
(2) 調査の方法と目的	32
(3) 層序	38
(4) 出土遺物	47
(a) 土器	47
(b) 石器	53
(c) 骨角器類	57
(5) 自然遺物	62
(a) 貝類（腹足綱・二枚貝綱）	64
(b) 節足動物・棘皮動物	64
(c) 魚類（軟骨魚綱・硬骨魚綱）	64
(d) 爬虫類	65
(e) 鳥類	65
(f) 哺乳類	65
III 調査のまとめ	75
IV 付章（資料紹介）	78

## 図版目次

- 第1図版 崎山遺跡群航空写真、白石遺跡第2次調査検出遺構
- 第2図版 白石遺跡第2次調査検出遺構、第1号竪穴住居跡炉完掘状況
- 第3図版 第1号竪穴住居跡遺物出土状況(床面)、P-2堆積状況
- 第4図版 第2号竪穴住居跡、炉
- 第5図版 第3号竪穴住居跡炉、土器埋設炉(1部)
- 第6図版 第3号竪穴住居跡石棒出土状況、第4号竪穴住居跡
- 第7図版 第4号竪穴住居跡フレーク・チップ等出土状況、第6号炉跡
- 第8図版 第5号竪穴住居跡石囲炉
- 第9図版 第1号土壇跡、第2号土壇跡、第7号柱穴群
- 第10図版 第1号土壇跡、第2号土壇跡
- 第11図版 第2号土壇跡堆積状況、第4号土壇跡
- 第12図版 崎山貝塚航空写真、崎山貝塚第2次調査区
- 第13図版 B区堆積状況、B区遺物出土状況(B-3層)
- 第14図版 B区遺物出土状況(B-3層・シカ下顎骨L)、出土遺物(骨角器類)
- 第15図版 出土遺物(シカ)
- 第16図版 出土遺物(イノシシ、オットセイ、イルカ科)
- 第17図版 出土遺物(タヌキ、ウサギ、ムササビ、テン、ネズミ科、ヘビ科)
- 第18図版 出土遺物(サル、ツキノワグマ、イヌ、マアナゴ、オキタナゴ、ニシン、イワシ、  
ホッケ、ミズナギドリ科、ツグミ科、ワシ・タカ科、不明)
- 第19図版 出土遺物(マグロ類、マダロ類小、カツオ、ソウダガツオ類)
- 第20図版 出土遺物(ブリ、カンパチ、マダイ)
- 第21図版 出土遺物(カサゴ科、カジカ科、カワハギ科、アイナメ、サバ類、サケ科、  
スズキ、ツノザメ科)
- 第22図版 出土遺物(腹足類、斧足類、節足動物、棘皮動物)  
崎山貝塚出土骨角器(中嶋コレクション)

### カラー口絵

1. 崎山貝塚航空写真
2. 崎山貝塚遺物出土状況
3. 崎山貝塚出土骨角器
4. 崎山貝塚出土骨角器(中嶋コレクション)

### 内表紙写真

1. 崎山遺跡群垂直写真

## 挿 図 目 次

第1図	位置図	2
第2図	崎山遺跡群と周辺の遺跡	3
第3図	白石遺跡周辺地形図	4
第4図	白石遺跡第2次調査区全体図	5・6
第5図	第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第3号土壇跡、 第4号土壇跡	7
第6図	土層断面図	8
第7図	第1号竪穴住居跡炉、第6号土壇跡	11
第8図	第3号竪穴住居跡炉、第6号炉跡	13
第9図	第2号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡	15
第10図	第2号竪穴住居跡炉	16
第11図	第4号竪穴住居跡、第5号土壇跡	18
第12図	第1号土壇跡、第2号土壇跡、第7号柱穴群	20
第13図	白石遺跡第2次調査・出土土器(1)	21
第14図	白石遺跡第2次調査・出土土器(2)	22
第15図	白石遺跡第2次調査・出土土器(3)	23
第16図	白石遺跡第2次調査・出土土器(4)	24
第17図	白石遺跡第2次調査・出土土器(5)	25
第18図	白石遺跡第2次調査・出土土器(6)	26
第19図	白石遺跡第2次調査・出土土器(7)	27
第20図	白石遺跡第2次調査・出土石器(1)	28
第21図	白石遺跡第2次調査・出土石器(2)	29
第22図	白石遺跡第2次調査・出土石器(3)	30
第23図	白石遺跡第2次調査・出土石器(4)、出土土器(8)	31
第24図	崎山貝塚周辺地形図	33・34
第25図	崎山貝塚第2次調査区全体図	35・36
第26図	A区平面図	37
第27図	土層断面図	41
第28図	A2区貝層平面図(1)	43
第29図	A2区貝層平面図(2)	44
第30図	A2区貝層平面図(3)	45
第31図	B2区平面図、土層断面図	46
第32図	崎山貝塚第2次調査・出土土器(1)	49
第33図	崎山貝塚第2次調査・出土土器(2)	50
第34図	崎山貝塚第2次調査・出土土器(3)	51

第35図	崎山貝塚第2次調査・出土土器(4)	52
第36図	崎山貝塚第2次調査・出土石器(1)	54
第37図	崎山貝塚第2次調査・出土石器(2)	55
第38図	崎山貝塚第2次調査・出土石器(3)	56
第39図	崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(1)	59
第40図	崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(2)	60
第41図	崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(3)	61
第42図	崎山貝塚出土骨角器・中嶋コレクション(1)	79
第43図	崎山貝塚出土骨角器・中嶋コレクション(2)	80

## 挿表目次

第1表	崎山貝塚第2次調査土層一覧表(1)	39
第2表	崎山貝塚第2次調査土層一覧表(2)	40
第3表	A2区ブロックサンプル出土魚類(1)	66
第4表	A2区ブロックサンプル出土魚類(2)	67
第5表	A1区ブロックサンプル出土自然遺物(1)	68
第6表	A1区ブロックサンプル出土自然遺物(2)	69
第7表	B区・A区クリーニングブロックサンプル出土自然遺物	70
第8表	A2区・B区出土獣骨	71
第9表	表土出土自然遺物	72
第10表	A2区ブロックサンプル1,000ccあたりの個体数	73
第11表	A1区・B区・A区クリーニングブロックサンプル1,000ccあたりの個体数	74

# I 調査経過

## 1. 調査要旨

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度から昭和65年度までの5ヶ年を第I期として崎山遺跡群発掘調査事業を策定している。

昭和62年度の発掘調査は、白石遺跡第2次調査（個人住宅建築）と崎山貝塚第2次調査（範囲確認調査）の2件である。総事業費は200万円である。

○白石遺跡第2次調査 昭和62年4月20日～6月26日 100㎡

遺跡の中央部に位置し、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡5棟、土器を埋設した炉跡1基、柱穴群1基、土壇跡6基を検出している。

○崎山貝塚第2次調査 昭和62年9月10日～10月30日 90㎡

貝塚の南斜面のほぼ中央部を調査し、縄文時代前期を主体とした貝層を検出している。表土および貝層上部からは多数の土器片、石器、骨角器や獣骨、魚骨、貝殻などの自然遺物が出土している。

## 2. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括	北山 浩	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	佐々木孝夫	宮古市教育委員会社会教育係長
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事（主担当）
	盛合 義信	宮古市教育委員会社会教育係主事
	鎌田 祐二	宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員（臨時職員）

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

〈地権者〉 松田稔、前川啓三、前川孫八

〈発掘調査〉 阿部豊、前川友宏、吉田昭、竹田末人、田崎昭吾、村岡憲一、佐伯裕則

〈整理作業〉 佐々木順子

〈資料借用〉 中嶋隆



第1図 位置図



第2図 崎山遺跡群と周辺の遺跡

## II 調査内容

### 1. 白石遺跡第2次調査

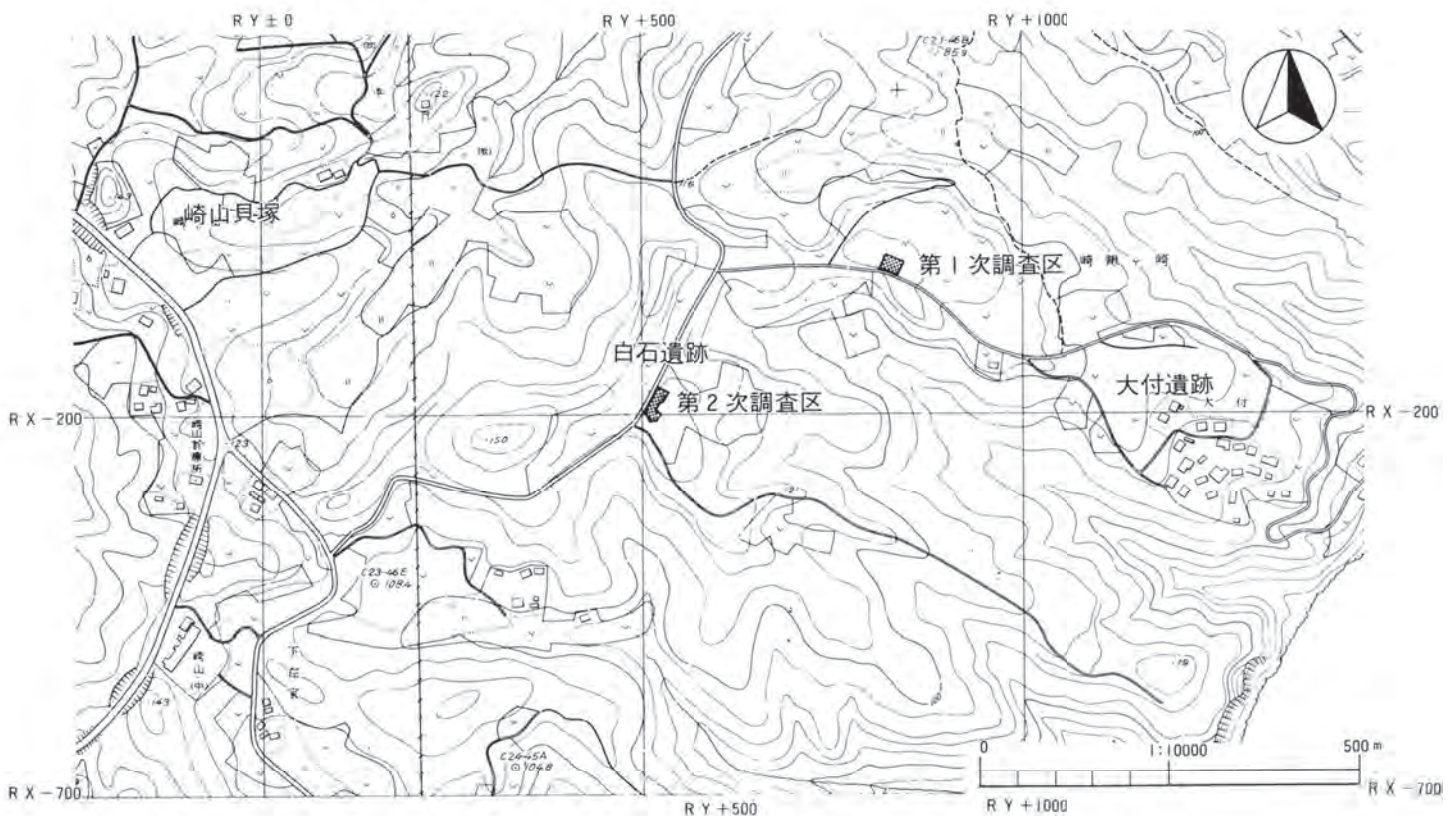
#### (1) 遺構の検出状況（第4図）

白石遺跡は、宮古市の遺跡コードL G 14-2195、岩手県のコードL G 04-2194として登録された周知の遺跡である。本年度の調査は個人住宅（車庫等）の建築に先だつ緊急発掘調査である。調査区は遺跡の中央部に位置し、周辺の畑等からは縄文時代の土器片が多数採集される。

発掘調査は、建物の建築により破壊される部分と車の出入のために削平する部分の全域を対象としたが、調査区全域に竪穴住居跡や土壇跡などが密集した状態で検出された。

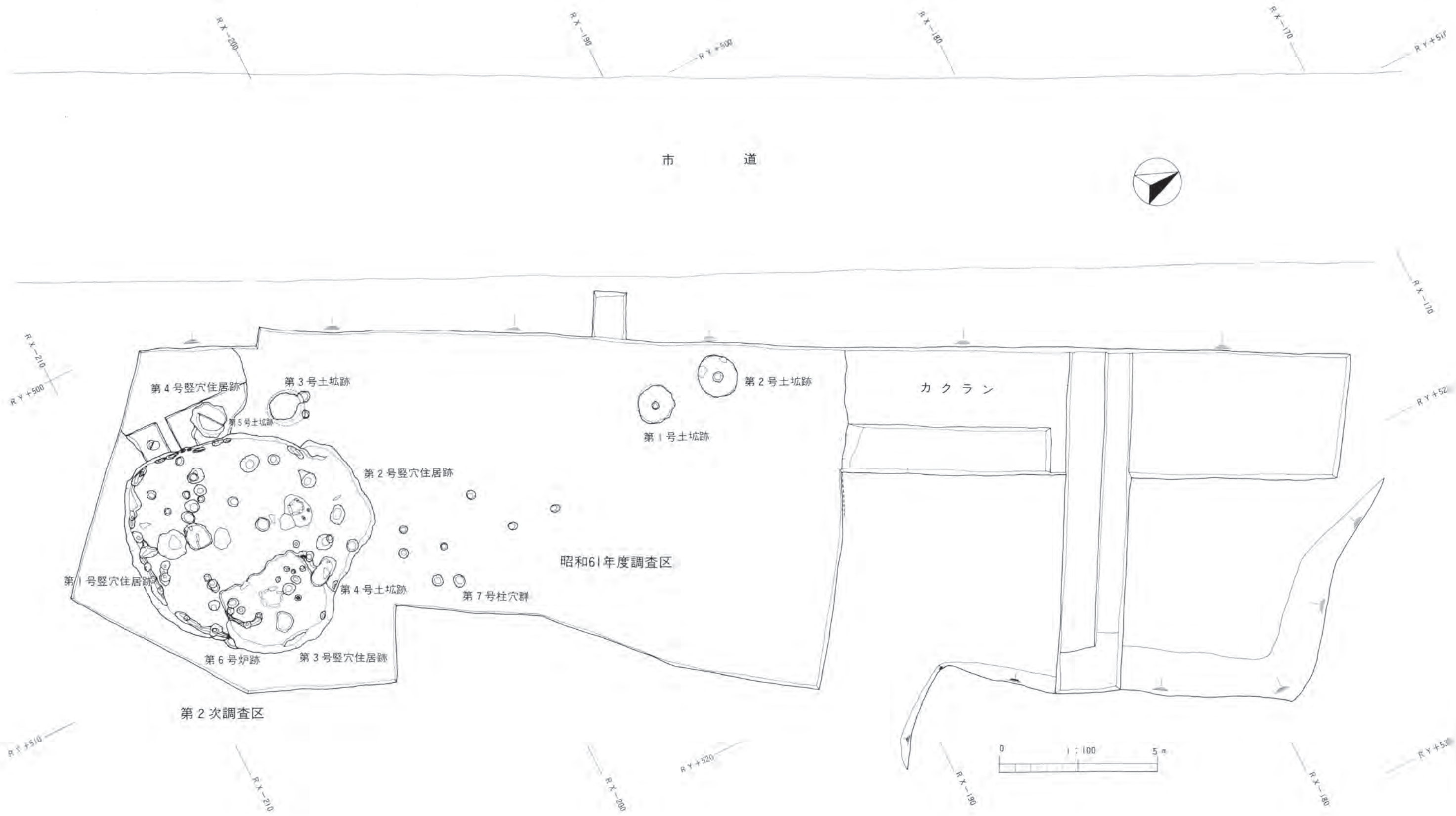
基本層序は、1層が表土で、その直下に地山の粘質土（<sup>はらちやま</sup>原地山層）が存在する。これは、耕作などにより削平されたためであり、第6号炉跡や第7号柱穴群はこの削平により竪穴住居跡の床面以上が破壊されたものと判断した。他の遺構は、掘り込みが深かったために比較的保存状態は良好であった。なお、第1号竪穴住居跡、第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第4号土壇跡の遺構は、暗褐色土を基本とし褐色土塊や炭化物を含むA層に覆われている。

また、昭和61年度に隣接地を調査しており、第1号土壇跡、第2号土壇跡、第7号柱穴群を検出しているが、これも今回の調査と密接な関係を持ち重要であると思われるため合わせて報告してある。



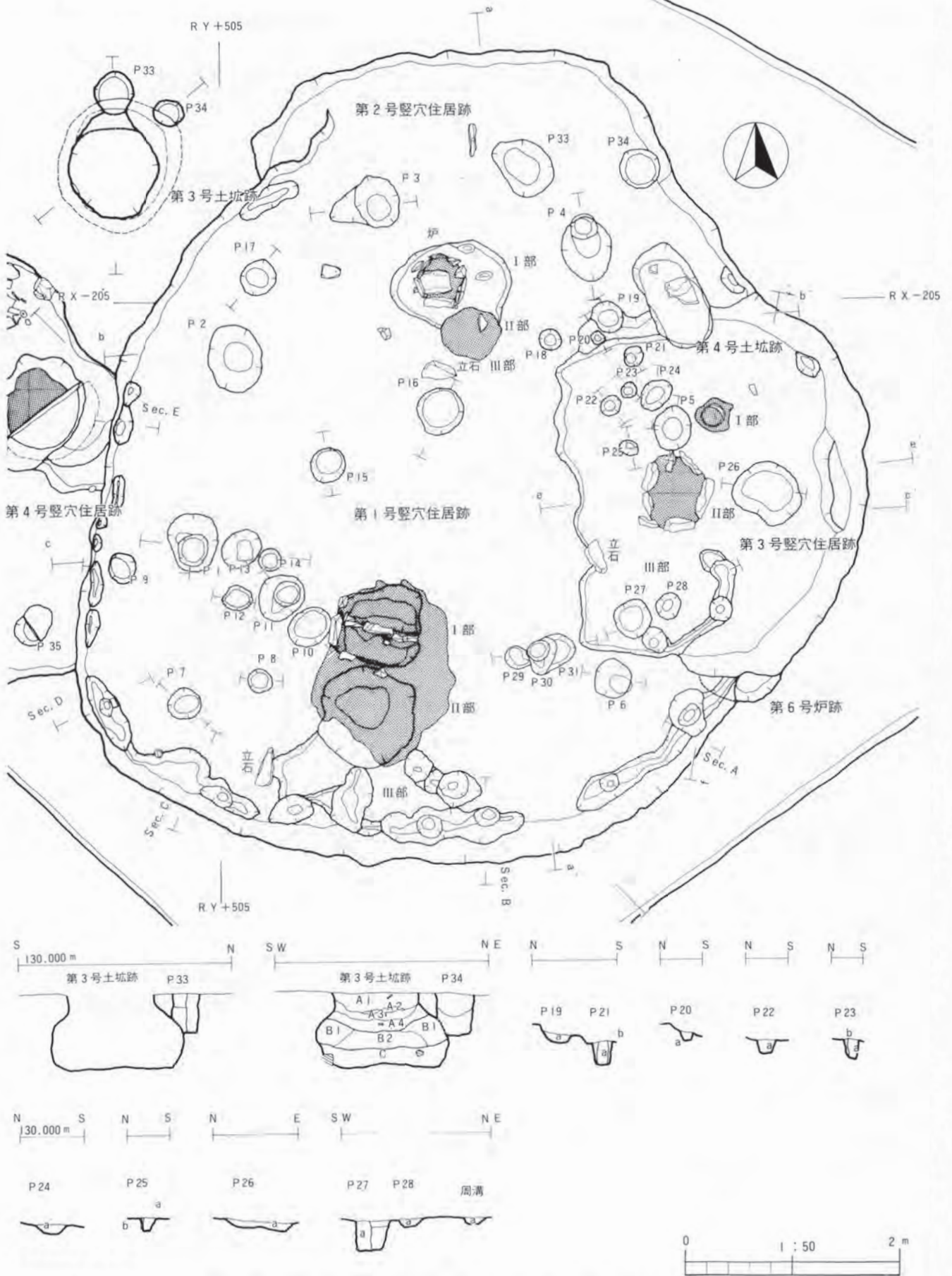
第3図 白石遺跡周辺地形図



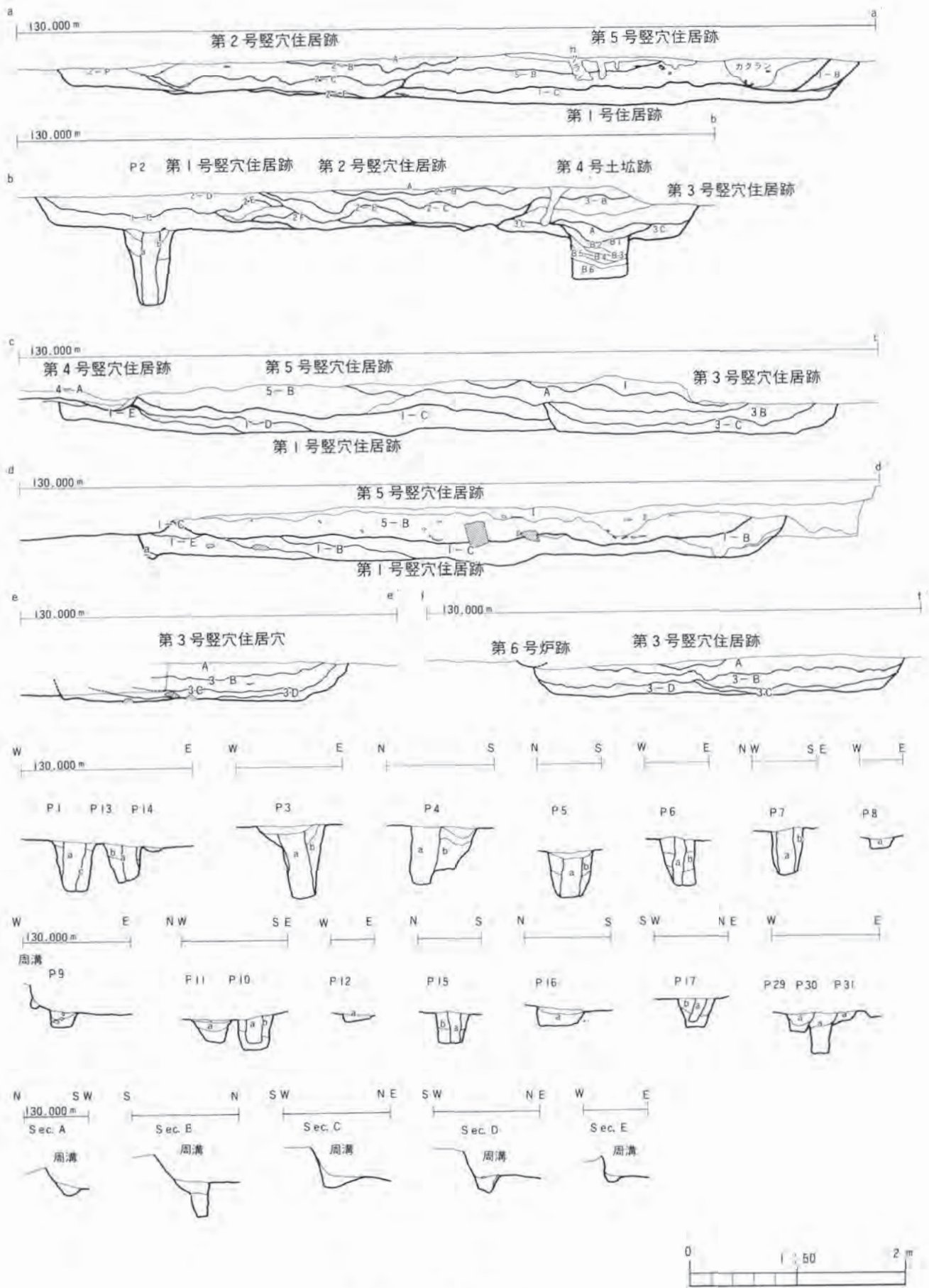


第4図 白石遺跡第2次調査区全体図





第5図 第1号竖穴住居跡・第3号竖穴住居跡・第6号炉跡  
 第3号土壇跡・第4号土壇跡



第6图 土层断面图

## (2) 検出された遺構・遺物

### 第3号土坑跡 (第5図・第6図・第19図)

調査区北西部に位置し、P<sub>33</sub>、P<sub>34</sub>を切る。

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.8m、胴部径1.2m、底部径1.0mを計る。断面形はフラスコ状を呈する。埋土は、A層・B層・C層に大別される。A層は、暗褐色～褐色の粘質土を基本土とし褐色土塊、黄褐色土塊、焼土粒(塊)、炭化物粒を多く含む。B層は、褐色の粘質土を基本土とし黄褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むが炭化物粒の混入は少ない。C層は、褐色の粘質土を基本土とするが、混合土はほとんど含まず炭化物粒も含まない。

遺物は、埋土中からわずかに出土している。第19図167は、注口状の突起を持つもの。第19図168は、口縁部の無文帯に連続刺突を施すもの。第19図169・170は、磨消縄文により曲線的無文帯を施すもの。第19図171は、隆帯上に刺突を施すものである。

### 第4号土坑跡 (第5図・第6図・第23図)

調査区北東部に位置し、第3号竪穴住居跡を切るが第2号竪穴住居跡よりは古い。掘込面は、3-B層下面である。平面形はだ円形を呈し、南北1.0m、東西0.5m、掘込面からの深さ0.5mを計る。主軸方向はN29°30'Wである。埋土は、A層・B層に大別される。A層は、黒褐色土を基本土とし、焼土塊や炭化物粒を多く含む。B層は、褐色粘質土を基本土とする。B<sub>1</sub>層、B<sub>3</sub>層は焼土塊を含む。また、B<sub>4</sub>層は暗褐色土を基本土として褐色土塊を含む。出土遺物は、埋土中からわずかに土器片が出土している。また、中央部東寄りに45cm×25cmの角礫が底部よりわずかに浮いた状態で出土している。第23図177、178は、口縁部に連続刺突を施すもの。第23図179は、磨消縄文により、曲線的な無文帯を施すもの。第23図176は、R-L単節斜縄文を縦方向に回転させるものである。

### 第6号土坑跡 (第7図)

第1号竪穴住居跡の炉わきに検出した。第1号竪穴住居跡の旧期炉に伴うものと思われる。平面形は不整形円形を呈し、開口部径0.95m、底部径0.6m、深さ0.65mを計る。断面形は頸部がくびれるフラスコ状を呈する。埋土は、いずれも人為的に埋め戻されており、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や褐色土塊を多量に含む。A<sub>3</sub>、A<sub>4</sub>層は、焼土塊や炭化物粒を多く含む。A<sub>5</sub>層には、人頭大の角礫が多く含まれる。A<sub>6</sub>層は、焼土の投げ込み層である。

### 第1号竪穴住居跡 (第5図～第7図・第13図・第14図・第20図)(註1)

調査区のほぼ中央に位置し、第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡・第4号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第6号炉跡に切られる。

平面形は不整形円形もしくは多角形で、規模は東西で約6.2m(推定)、南北で約7.0m(推定)を計る。壁高は南壁で0.4mと比較的深い掘り込みであり、東壁では直に、南壁ではややゆるやかに立ち上がる。東壁から南壁にかけて周溝が認められる。主軸方向はN7°30'Eである。

埋土は1-B層、1-C層、1-D層、1-E層に大別される。1-B層は、南壁付近にのみ堆積する暗褐色土層である。1-C層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし黄褐色土塊や炭化物粒を含む。

重複関係

註1 住居跡の層名はアルファベットにより大別層名とし、これに遺構番号を冠した。

1-D層は、暗褐色土を基本土としやや暗い暗褐色土塊や黄褐色土塊、炭化物粒、焼土粒を含む。  
1-E層は、褐色土を基本土とし黄褐色土塊や暗褐色土塊を含む。

床面は平坦で固くしまっているが貼床は認められない。

#### 複式炉

炉は新旧2時期あるが、**新期炉**は、石組複式炉で南壁のほぼ中央部に位置する。炉の各部をI～III部とし説明する。

I部は、日字形石組炉で東西0.8m、南北0.75mの不整形を呈する。炉床および炉外の床面は良く焼成を受け固くしまっている。**炉床**を覆うe5層からは炭化したクルミの破片が多量に出土している。II部は、東西0.85m、南北0.97mの不整形を呈する掘込炉で、床面からの深さは0.32mを計る。I部との境には大きな礫を埋設し区画している。炉床および炉外の床面は焼成を受け固くしまっている（I部よりも焼けている）。III部は、東西1.95m、南北0.9mの大略三角形を呈し、II部と壁・周溝をつなぐ。東側は小ピットを連続させた溝で、西側は掘り込みでそれぞれ区画し、中央部にも溝を配す。西側の壁には三角柱状の立石が埋設される。

#### 立石

炉の構築方法を確認するため構築面まで掘り下げたところ、炉床の下に旧期の炉床と第6号土拵跡を検出した。

**旧期炉**は、炉掘り方を掘り上げた後にi<sub>1</sub>層（黄褐色の粘質土）、h<sub>3</sub>層（黄褐色土を含む褐色の粘質土）をつめ、f<sub>2</sub>層を**炉床**としている。旧期炉は、新期炉のI部南半からII部を含む長方形の掘り込みとIII部により構成される。また、第6号土拵跡はi<sub>1</sub>層を切り新期炉I部f<sub>1</sub>層と構築土g<sub>3</sub>層（褐色の焼土浸透層）に切られるため旧期炉に伴う可能性が強い。

なお、構築土h層は、褐色土を基本土とし、g層はやや暗い褐色土を基本土とし暗褐色土を含むが、g<sub>1</sub>層は焼土の浸透層である。e層は新期炉の埋土であるが、暗褐色土を基本土とする。

#### 柱穴

柱穴は壁寄りに配されたP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>、P<sub>27</sub>の8本が主柱に相当する。いずれも径0.15～0.25m程の柱痕跡を有するが、P<sub>8</sub>のみはやや細く径0.10m程である。また、P<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>の柱痕跡は床面まで達していない。他の柱穴のうち柱痕跡を確認したP<sub>10</sub>、P<sub>15</sub>、P<sub>17</sub>は、第1号竪穴住居跡または第5号竪穴住居跡のいずれに伴うものか断定できなかった。柱痕跡を持たず掘り込みの浅いP<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>29</sub>、P<sub>31</sub>は、機能が断定できないが、P<sub>16</sub>は中軸線上やや北寄りに位置し、他のものは炉の付近に集中する。

#### 遺物出土状況

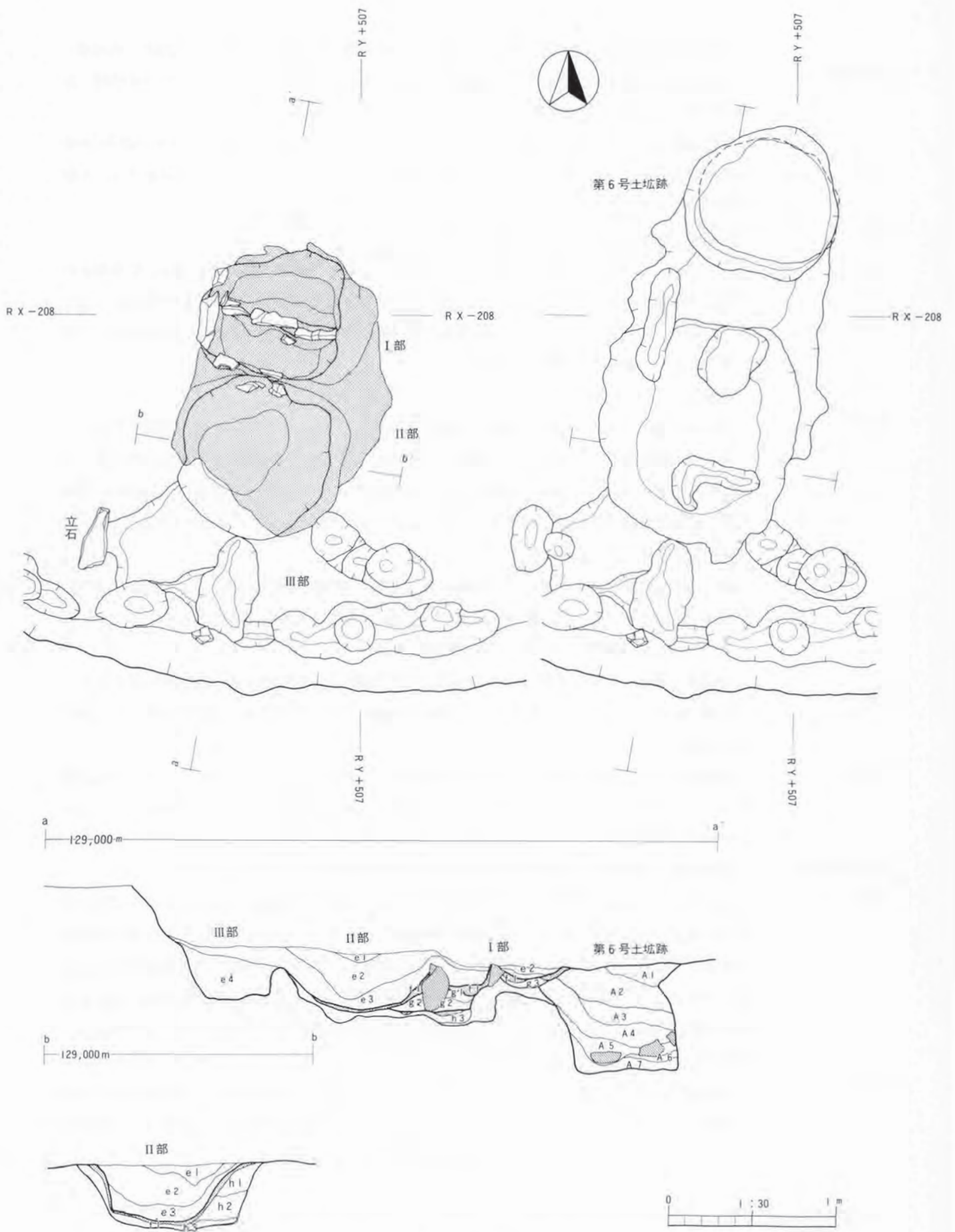
**遺物**は、出土量があまり多くないが、第13図16、17、第14図26、第20図8などは、炉の西側の床面から出土している。

#### 土器

第13図16は、口縁部の外傾する小形深鉢で体部にL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。第13図17は、体部が球形を呈するミニチュア土器であるが、口縁部を欠く。体部にはやや撚りの細かいL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。第14図22は、口縁部の外傾する土器で、口縁部を折り返す。体部には磨消技法により曲線的な文様を施す。無文帯はおそらく逆J字形を呈すると思われるが、上端には横位に鱗状隆帯を施す。地文はR-L単節斜縄文を縦方向に回転する。25は口縁部の内外に鱗状隆帯を施す。32はR-L単節斜縄文を縦方向に回転させるが口縁部を折り返している。

#### 石器

第20図8はピエスエスキーユで、赤い斑文を有する黒曜石を素材とする。14は不定形の剥片をそのまま利用するが、下端にはわずかに剥離が見られ刃部は搔器様を呈する。また両側縁にも細かな剥離が認められる。第22図22は横長の礫の両側縁を利用するもので、使用面は敲打磨石のそれに酷似する。



第7図 第1号竖穴住居跡炉・第6号土坑跡

重複関係

**第3号竪穴住居跡**（第5図・第6図・第8図・第13図・第16図・第20図・第22図・第23図）  
調査区東端に位置し、第1号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡を切り、第2号竪穴住居跡、第6号炉跡、第4号土拵跡に切られる。

**平面形**は不整形を呈し、東西2.95m、南北3.55mを計る。壁高は東壁で0.3mを計り、ややゆるやかに立ち上がる。東壁の一部と北壁の一部に地山を削り残した段状の施設が伴う。主軸方向はN1°30'Eである。

埋土

**埋土**は、3-B層、3-C層、3-D層に大別される。

3-B層は、暗褐色の粘質土を基本土とし褐色土塊や炭化物粒を含む。3-C層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし黄褐色粘土質塊や褐色土塊をわずかに含み、炭化物や焼土粒～塊も多量に含む。3-D層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土としやや暗い暗褐色土塊や褐色土塊を多量に含む。また炭化物粒を少量含む。

**床面**は、平坦であるがあまり固くない。

複式炉

**炉**は土器埋設複式炉で、炉の南壁やや西寄りに位置する。炉の各部をI部～III部とする。

I部は土器埋設炉で、径0.33m、深さ0.22mの掘り方に径0.21mの粗製深鉢を埋設する。土器内に堆積するe1層、e2層は、暗褐色土層で炭化物を含むが全くしまりが無い。g層は、構築土層で黄褐色粘質土を基本土とする。炉床はあまり焼けていないが、土器外の床面は焼成を受け固くしまっている。

II部は、東西0.65m、南北0.75mを計る石囲炉で平面形は不整形を呈する。炉床は焼成を受けるがあまり固くない。h層は、構築土層で黄褐色粘質土を基本土とする。また、炉床を覆うe3層は、暗褐色土を基本土とし炭化物粒等を含む。

III部は、溝と小ピットを径1.05m程の円形に配し外部から区画するが、西側の一部を欠く。中央部には浅いピットP28を配す。また、西側の壁寄りには三角柱状の立石を埋設するが、掘り込みは浅い。

立石

柱穴

**柱穴**はP21、P23、P25が径0.10m程の柱痕跡を持つ。P20、P22は小ピット、P5、P19、P24は皿状のピットである。これらの柱穴やピットは床面の北西部に集中する。また、皿状のピットp26は炉の東側に位置する。P27とP26は第1号竪穴住居跡に伴うものである。

遺物出土状況

土器

**遺物**の出土量は少なくいずれも埋土から出土したものである。

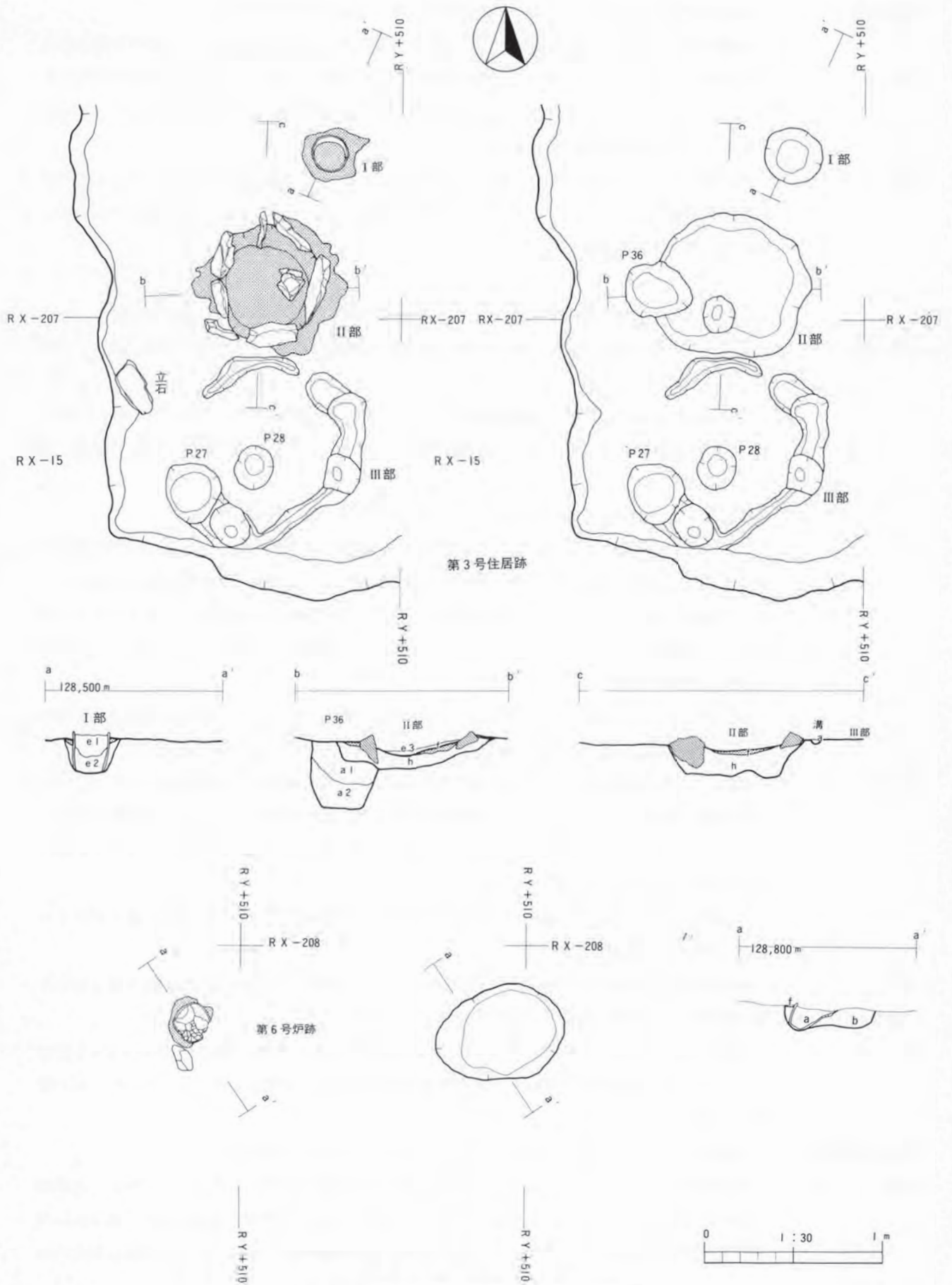
第13図20は、体部下半にふくらみを持つミニチュア土器で、磨消し技法によりC字形または円形の無文帯を持つがモチーフの全容は不明である。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。第13図4は、炉I部に正立で埋設された深鉢で、体部にL-R単節斜縄文を縦方向に回転させるが一部に綾絡文がみられる。第13図19は、地文にL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる小形深鉢である。第16図59は、口縁の波頂部に円形の貼付けおよび押捺を施すものである。第16図64～69は磨消し技法により曲線的な無文帯を持つもの。第16図75は底部に木葉痕を持つ。

石器

第20図1は石槍であるが基部を欠く。調整は、概して粗い。裏面に大きく節理面を残す。第22図27は石皿の破片である。第23図29は石棒の頭部破片である。上面に円形の沈線および拵鉢状の凹みを持つ。体部の整形は粗く、成形時の敲打痕が認められる。

第6号炉跡（第8図・第13図）





第8図 第3号竖穴住居跡・第6号炉跡

**重複関係** 調査区南東部に位置し、第1号竪穴住居跡、第2号竪穴住居跡を切る。

**埋土** 東西0.75m、南北0.55mの不整だ円形の掘り方に深鉢を斜位に埋設する。土器の外側は焼成を受け固くしまっている。また、土器の内面も焼成を受けている。a層は暗褐色土を基本土とするが、やわらかくしまりが無い。b層は褐色粘質土を基本土とする構築土層である。周辺からは、これ以外の施設は検出されなかった。

**土器** 第13図3は、炉に埋設された土器で上半部を欠く、現存部上端に磨消し技法による無文帯や鱗状隆帯が施されるがモチーフの全容は不明である。体部にはR-L-R複節斜縄文を縦方向に回転させ地文としている。

**第2号竪穴住居跡**（第5図・第9図・第10図・第13図～第16図・第20図・第22図）

**重複関係** 調査区のはほぼ北端に位置し、第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡を切り、第4号土坑跡より新しい。

**平面形**は不整形を呈し、**規模**は東西で3.7m、南北で3.3mを計る。壁高は北壁で0.17mでややなだらかに立ち上がる。主軸方向は平面形でN3°30'E、炉の中軸線でN21°Wであり、いずれとも決め難い。

**埋土**は、2-B層、2-C層、2-D層、2-E層、2-F層に大別される。

2-B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土や黄褐色土を多く含む。2-C層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を含み、焼土塊や炭化物を多量に含む。2-D層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を多く含む。他の層より粘性が強い。2-E層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊を多く含む。2-F層は黒褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。焼土粒や炭化物を多量に含む。

**床面**は、平坦であるが北から南にかけてわずかに傾斜している。床面全体に貼床が認められるが特に炉の周辺が固くしまっている。また、床面の北壁寄りで炭化材を検出している。

**複式炉** 炉は、土器埋設複式炉で南壁のはほぼ中央に位置する。炉の各部をI部～III部として説明する。

I部は、東西1.15m、南北0.75mの卵形を呈する浅い掘り込み内に径0.5mの石囲炉を配し、炉床には粗製深鉢の底部を西に向け横位に埋設する。炉床は、焼成を受け固くしまっているが、埋設された土器は焼成を受けもろくなっていた。

II部は、東西0.55m、南北0.5mの不整形を呈する地床炉で、炉床は非常に良く焼けている。f<sub>3</sub>層は焼土の浸透層である。

**立石** III部は、特別な掘り込みや溝などを持たないが、三角柱状の立石を埋設しており第1号竪穴住居跡や第2号竪穴住居跡のIII部に類似する。

**柱穴** 柱穴はP<sub>34</sub>のみである。柱痕跡の径は0.13mを計る。P<sub>34</sub>の西側には皿状のピットP<sub>33</sub>を検出しており、床面に粗製土器を敷く。土器は焼成を受けないが非常にもろくなっていた。炉の東側には小ピットP<sub>18</sub>を検出している。

**遺物出土状況** 遺物は、出土量が比較的多かったが破片が主で図示できたものは多くない。

**土器** 第13図1は、4個の波頂を持つ大波状口縁を呈する深鉢で体部がわずかにふくらむ。波頂部には円形の刺突を5個配す。波頂下には磨消し技法によるL字形の無文帯を施す。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。口縁の波頂内面には鱗状隆帯を施す。第13図18は無文の小



第9図 第2号竖穴住居跡・第5号竖穴住居跡

形深鉢である。第14図38～40は同一個体で口縁部が強く外反する深鉢である。体部には磨消し技法によりJ字形?の無文帯を施し、端部を反転させ円形の無文帯を付加している。地文はR-L単節斜縄文を縦位方向に回転させる。第15図46, 48～51, 55は地文として撚糸文のみを施すものであるが、いずれもrの撚糸を縦方向に回転させる。第15図47は縦方向に回転させたL-R単節斜縄文のみを施すものである。第15図46、第16図47は底部に網代痕を有するもの。第16図48は底部に木葉痕を有するものである。

## 石器

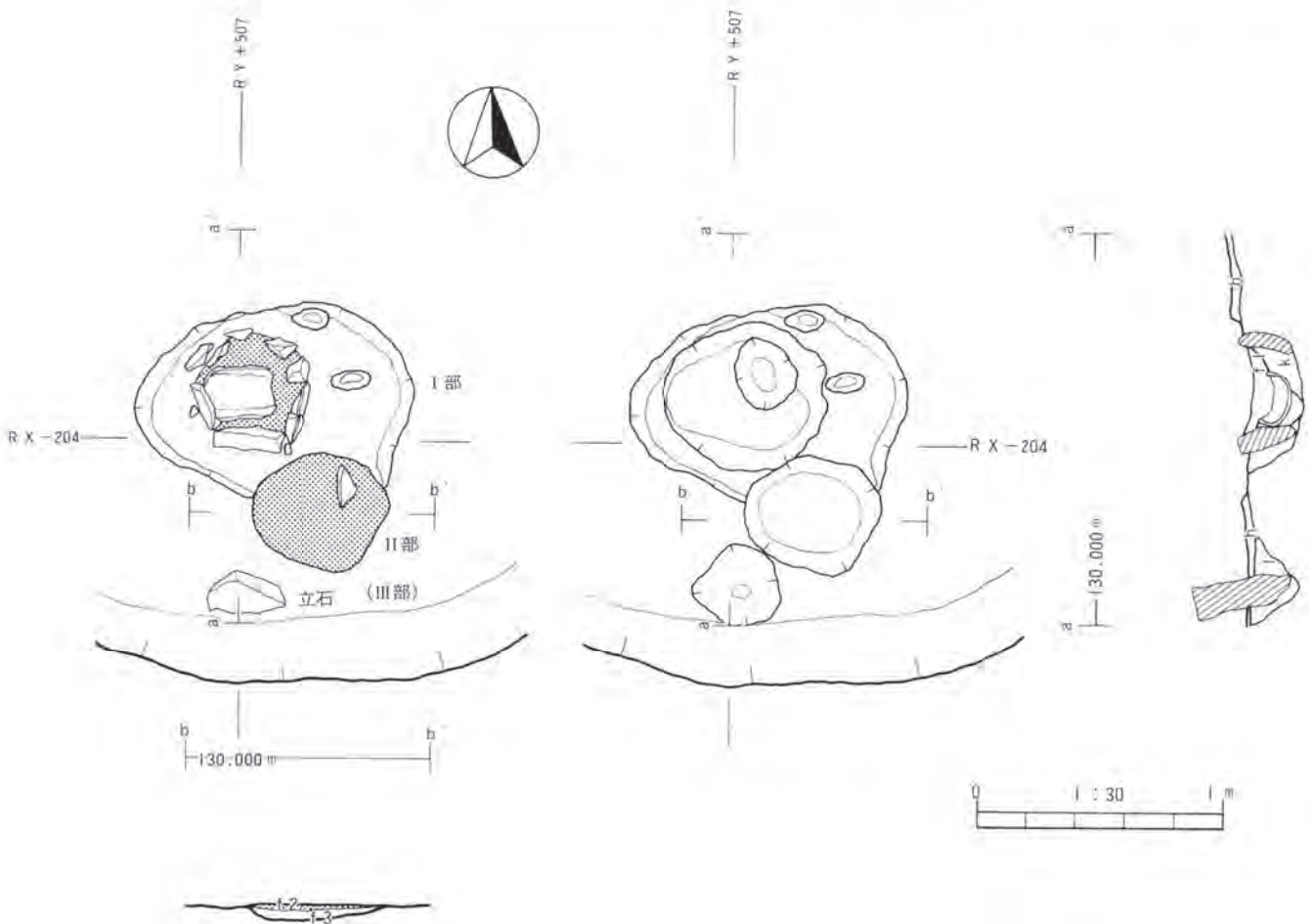
第20図7は削器であるが、縦長でやや大きめのブレード状剥片をそのまま利用したもので、側縁の一方を押圧剥離により刃部として作り出している。第22図20は磨石で、円形の礫の周縁を磨りそろばん玉のような断面形を呈する。第22図24は横長の礫の側縁に粗い剥離を施すもので、敲石などであると思われるが、明瞭な使用痕は観察できない。第22図26は砥石である。図示した面は良く使い込まれているが、他の面は全く手がつけられていない。

## 第5号竪穴住居跡（第5図、第9図、第13図、第17図～第22図）

### 重複関係

調査区中央部に位置し、第1号竪穴住居跡を切り、第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡に切られる。

第1号竪穴住居跡の埋土内に構築された住居跡で、検出時には住居跡と気づかず、炉や床面の一部を確認した時点で住居跡と判断した。周壁や床面の大半は壊してしまったために、平面



第10図 第2号竪穴住居跡炉

形は断面図をもとに推定したものである。

**平面形**は南北に長い円形を呈するものと思われ、推定される規模は、南北で約5.8m、東西で約4.0mを計る。主軸方向は北からわずかに西側へ振れるようである。

**埋土**は、5-B層のみであり褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や焼土粒をわずかに含む。

**床面**は凹凸がありあまり固くないが、炉A付近は比較的固くしまっていた。

**炉**は2基あり、いずれも石囲炉。炉Aは南壁寄りに位置し、平面形はだ円形で東西0.75m、南北0.55mを計る。炉床は良く焼成を受け固くしまっている。炉Bは南壁際に位置し、平面形は不整形で東西0.3m、南北0.4mを計る。炉床は焼成を受け固くしまるが炉Aほどでない。

柱穴、周溝など床面の施設については全く不明である。

**遺物**は、比較的多量に出土したが、破片が多かった。

第13図2は口縁部の外反する深鉢で、頸部に沈線をめぐらせこれより上を磨消す。体部はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させるのみである。第17図97は外面に磨消縄文を施し口縁部の内面に鱗状隆帯を施す。第17図101は口縁の波頂部内外に鱗状隆帯を施す。第17図110は外面の口縁波頂部に鱗状隆帯を施す。第17図117、119、第18図140は磨消縄文に鱗状隆帯を伴うものであるが、モチーフは不明である。第17図98、109は頸部に2条の隆帯をタカ状にめぐらす。98はその上下をアーチ状の隆帯で連結する。第17図105は口縁部の無文帯に円形の連続刺突を施す。第17図103、104は口縁波頂部に円形刺突を施す。第18図141は隆沈線により渦巻文などを施すが大木8b式に伴う。第18図146、147は口縁部を折り返すもの。第19図151は内面に植物繊維の圧痕を持つ。第18図152、153は楕目文を地文とする。第18図154～161は撚糸文を地文とするが、特に156は口縁部に連続刺突文を施す。

第20図4は縦形石匙で先端部を欠く。離面には大きく主要剥離面を残す。第20図6は縦長の小剥片を利用するもので削器か。第20図9、第21図15、17は削器。第20図13は下端部を刃部とする不定形の搔器か。第21図18は使用痕のある剥片。第22図19は基部を欠く磨製石斧であるが、両面にみられる大きな剥離は欠損後のものである。第22図21は不整形円礫の周縁を使用する磨石であるが、機能磨面は敲打磨石に類似する。第22図23は敲打磨石であるが、両側縁に2～2.5cmの機能磨面を有する。磨面には剥離が伴うがこれは調整痕かと思われる。また、長軸方向の端部には敲打痕が認められる。第22図25は扁平な円礫を使用するもので、両端部に敲打痕と大きな剥離が認められる。敲石かと思われるが、礫石錘の可能性もある。

#### 第4号竪穴住居跡（第11図・第13図・第16図・第17図・第20図・第21図）

調査区南西隅に位置し、第1号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡を切る。大半が用地外にあたるため用地外は検出のみにとどめ、用地内のみを精査した。

**平面図**は不整形円形を呈するものと思われ、南北で4.4m、東西4.0m以上を計る。壁高は0.8mと浅く、埋土の大半は削平されている。壁はゆるやかに立ち上がる。主軸方向は不明。

**埋土**は4-A層と4-B層に大別されるが、後者は炉の上のみに堆積する。4-A層は、褐色粘質土を基本土とし黄褐色土塊や焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。4-B層は、暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を含む。4-B<sub>1</sub>層は、剥片やチップを多量に含む、4-B<sub>2</sub>層は炭化物粒、炭化種子（大半はクルミ）を多量に含む。4-K層は貼床（構築土層）である。

石囲炉

遺物出土状況

石器

重複関係

埋土

地床炉

床面は、やや凹凸があるが固くしまっている。

炉は地床炉（掘込炉）であるが、第5号土壇跡の埋りきらない凹みをそのまま炉床としている。規模は、径1.05～1.10m、深さ0.20mを計る。平面形は不整形円形を呈する。炉床は焼成を受け固くしまっている。炉の北側の壁寄りには礫が集中するがその性格は不明である。

柱穴

柱穴はP<sub>35</sub>のみであり、径0.15mの柱痕跡を確認しているが、上面を土器が覆っている。

遺物出土状況

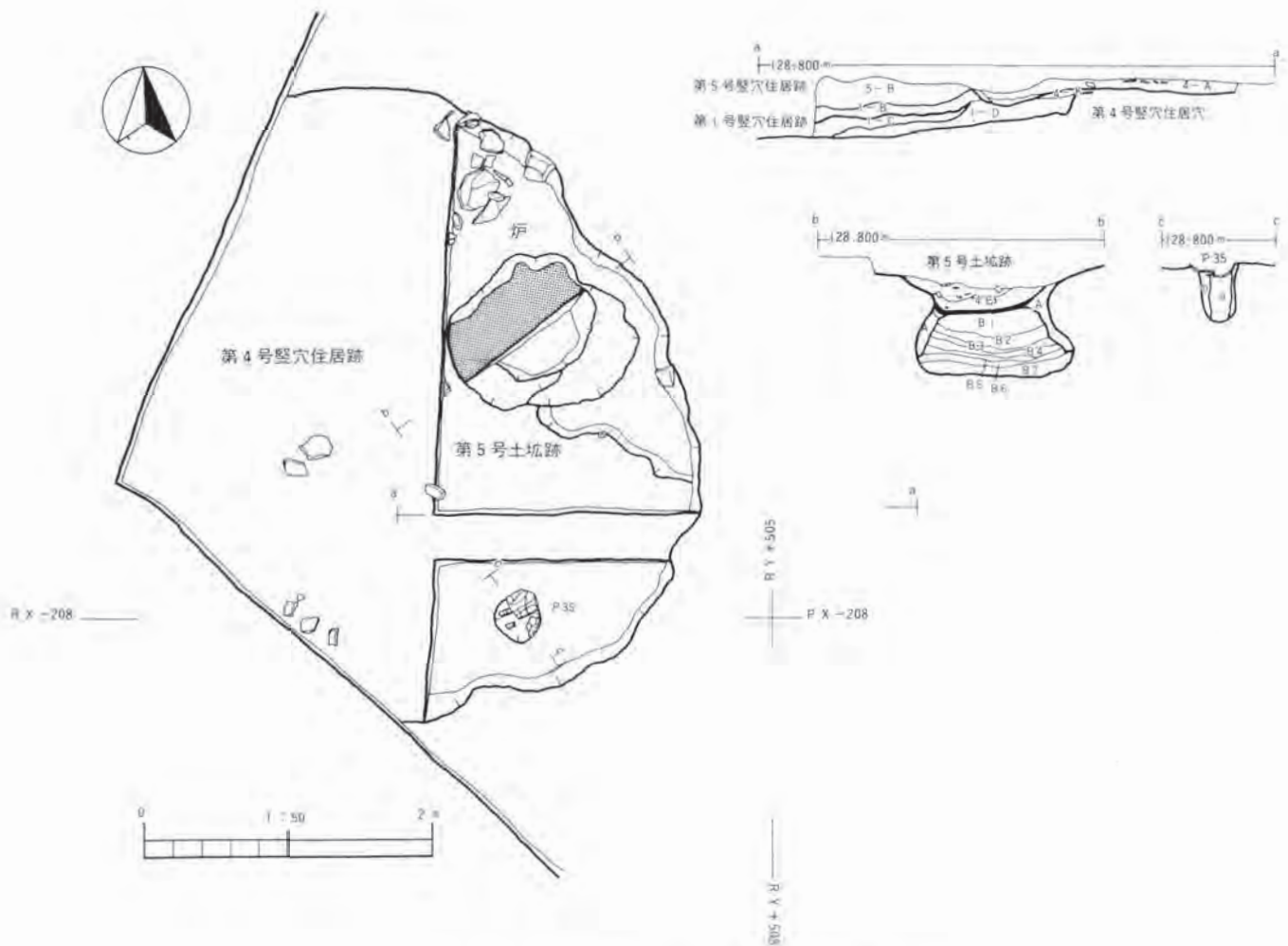
遺物は出土量があまり多くないが、前述したように4・B層から集中的に出土した剥片、チップおよびわずかな製品(第20図2, 5, 11)とP<sub>35</sub>を覆う土器(第13図5)が特徴的であった。

土器

第13図5は、地文としてL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる深鉢であるが胎土がもろい。第13図21は小形土器の底部であるが、地文はLの無節縄文である。第16図76～90、第16図76～90、第17図91, 92は磨消し技法により曲線的な文様を施すものであるがモチーフの全容は不明である。第17図95は鱗状隆帯を施す。第17図94, 96は底部に木葉痕を有するものである。

石器

第20図2, 3はやや小形の三角鉄である。第20図5は赤味を帯びたガラス質の素材を用いて全周に調整をおよぼすが器種は不明である。第20図10, 11は削器であるが、いずれも一方側の縁の両面に調整がみられる。第21図16は不定形の剥片の下端にわずかな調整を施すもので搔器的な機能が想定される。



第11図 第4号竪穴住居跡・第5号土壇跡

### 第5号土坑跡（第11図）

第4号竪穴住居跡の炉床下に検出した。開口部は不整形を呈し、頸部以下はほぼ円形を呈する。規模は、開口部径1.05～1.10m、頸部径0.8m、胴部径1.10m、底径0.95m、深さ0.7mを計る。第4号竪穴住居跡の炉床f層以下はA層、B層、C層に大別される。壁際に堆積するA層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊をわずかに含むがやわらかくしまりがない。B層は褐色土～黄褐色粘質土を基本土とし、混合土は少なく暗褐色土塊などわずかに含むのみだが、B<sub>5</sub>層、B<sub>7</sub>層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を少量含むがやわらかくしまりがない。

平面形

埋土

### 第1号土坑跡（第12図）

昭和61年度調査区の東壁寄りに検出。平面形はほぼ円形を呈し開口部径1.1m、底径1.15m、深さ0.85mを計る。断面形はピーカー形を呈するが一部オーバーハングする。底部の中央には径0.2m、深さ0.1mの小ピットが伴う。埋土はA層、B層、C層に大別されるが、C層は小ピットの埋土である。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊、暗褐色土塊、炭化物粒などを含む。B層は褐色粘質土を基本土とするが、暗褐色土塊をわずかに含む。C層は暗褐色土を基本土とするが、やわらかくしまりがないなど柱痕跡の埋土に類似する。埋土中からわずかに土器片が出土したが、図示できるものはない。

### 第2号土坑跡（第12図・第23図）

第1号土坑跡の北側に位置し、芯々で2.2mを計る。平面形はほぼ円形を呈し、開口部径1.25m、底径1.3m、深さ0.87mを計る。断面形はわずかにフラスコ状を呈する。底部の中央には径0.3m、深さ0.2mの小ピットが伴う。また、底部の南西隅には開口部径0.35m、深さ0.15mの斜位に掘り込まれた小ピットも伴う。埋土はA層、B層、C層、D層に大別されるが、C層とD層は小ピットの埋土。A層は褐色～暗褐色の粘質土を基本土とするがA<sub>6</sub>層、A<sub>7</sub>層以外は、焼土粒や炭化物粒を含む。B層はA層に比べて粘性が大きく、褐色の粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含むが焼土粒や炭化物粒は含まない。C層は暗褐色土を基本土とし、わずかに褐色土粒を含むがやわらかくしまりがない。D層は褐色の粘質土を基本土とする。

出土遺物は埋土中から土器片が、底部からは石皿が出土している。

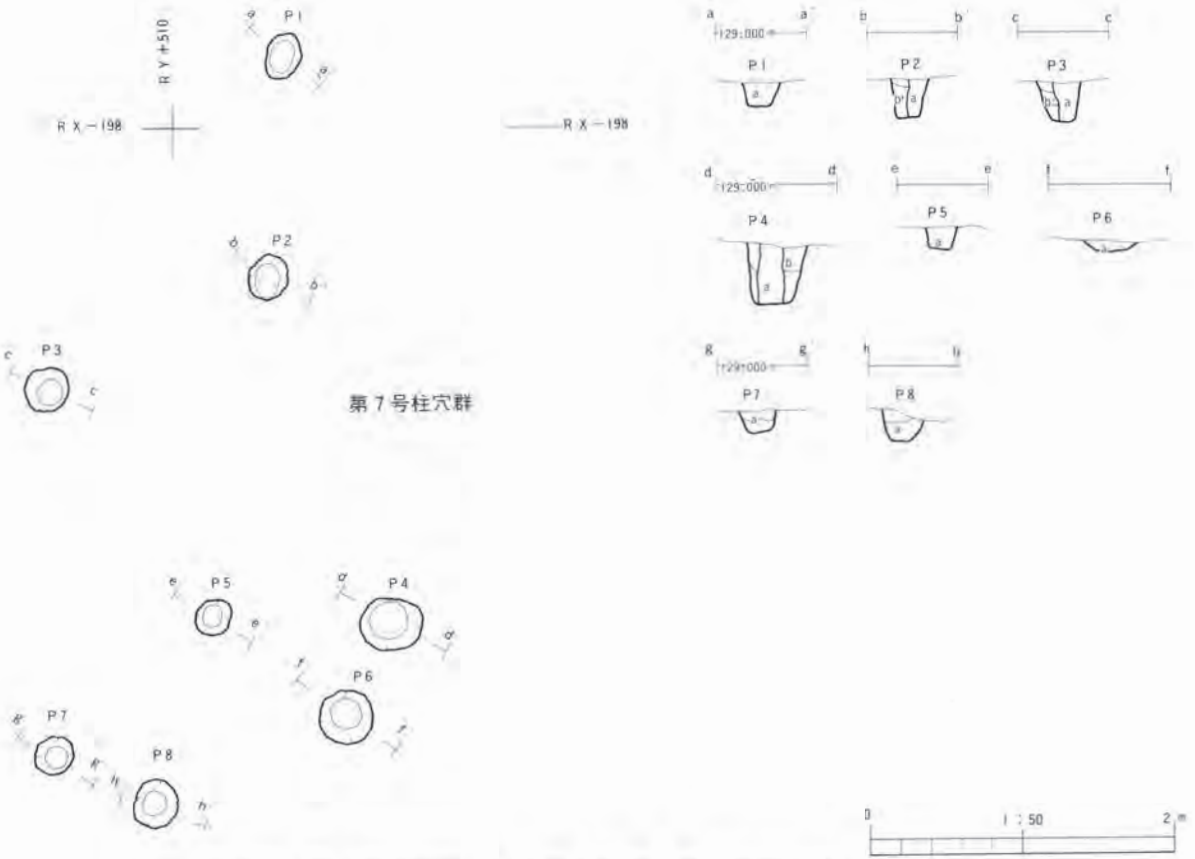
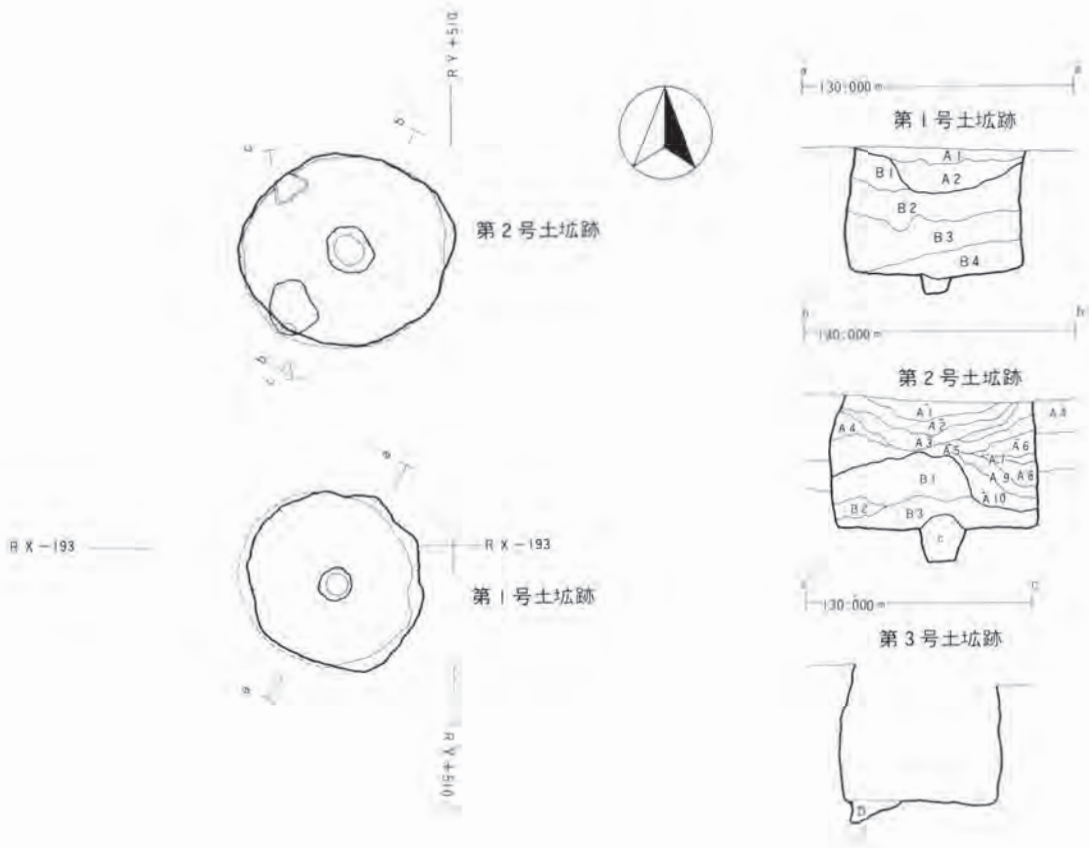
第23図172は連続棘突文、173は磨消縄文により曲線的な無文帯を施すもの。174、175は粗製土器であるが、174は口縁部を折り返す。

第23図28は石皿の破片であるが、片面に磨面と凹石状のダメージを有する。

### 第7号柱穴群（第12図）

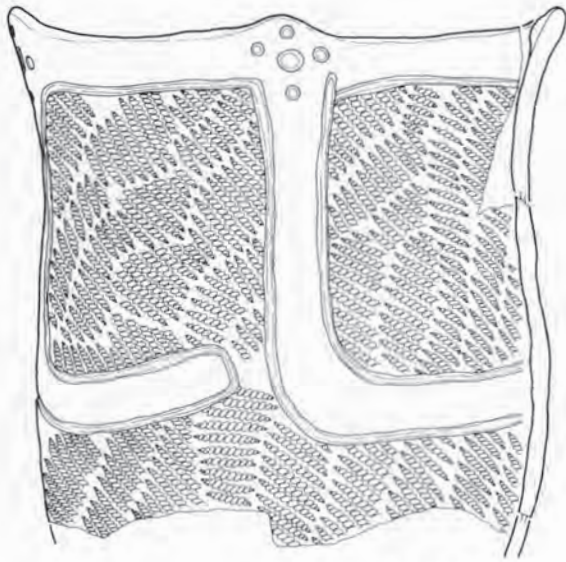
昭和61年度調査区の南端部に位置し、東西2.7m、南北5.5mの範囲に柱穴や小ピットなど8口が集中する。配置は不規則であり、これに伴う他の施設も検出されなかった。

柱痕跡を持つものはP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>のみである。埋土は、a層が暗褐色土を基本土とし、やわらかくしまりがない。b層は、褐色土や黄褐色土をつめる。P<sub>1</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>は小ピット、P<sub>6</sub>は皿状ピットである。

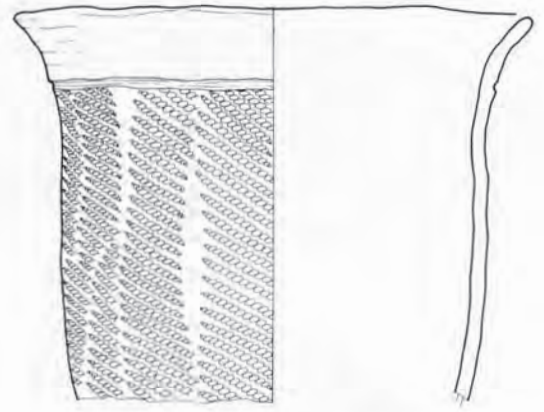


第12图 第1号土坛跡、第2号土坛跡、第7号柱穴群

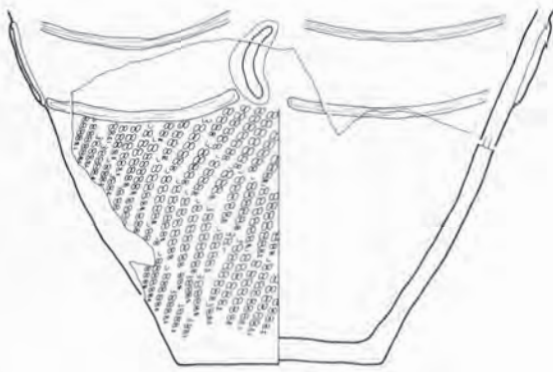




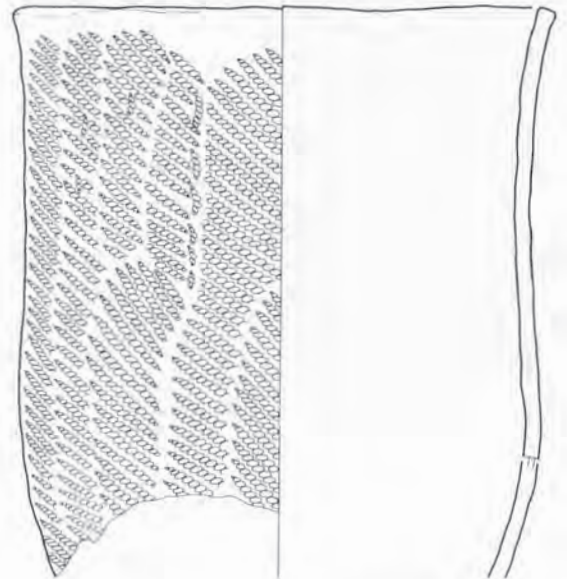
1(第2号住)



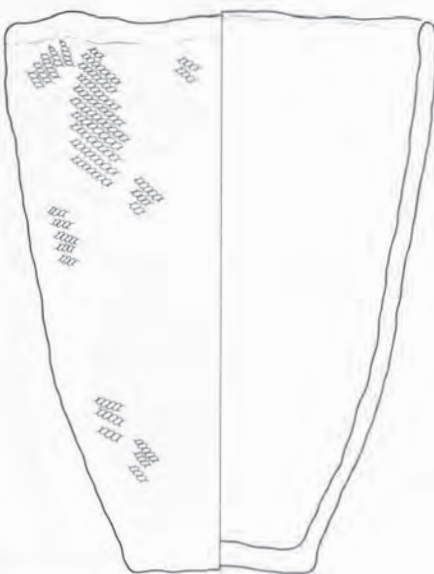
2(第5号住)



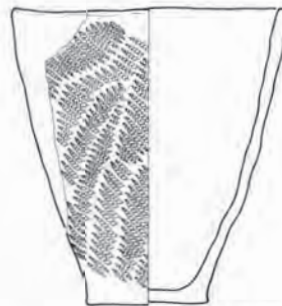
3(第6号炉)



4(第3号住炉I部埋設土器)



5(第4号住床)



16(第1号住床面)



17(第1号住床面)



18(第2号住)



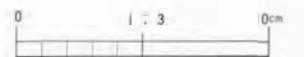
19(第3号住)



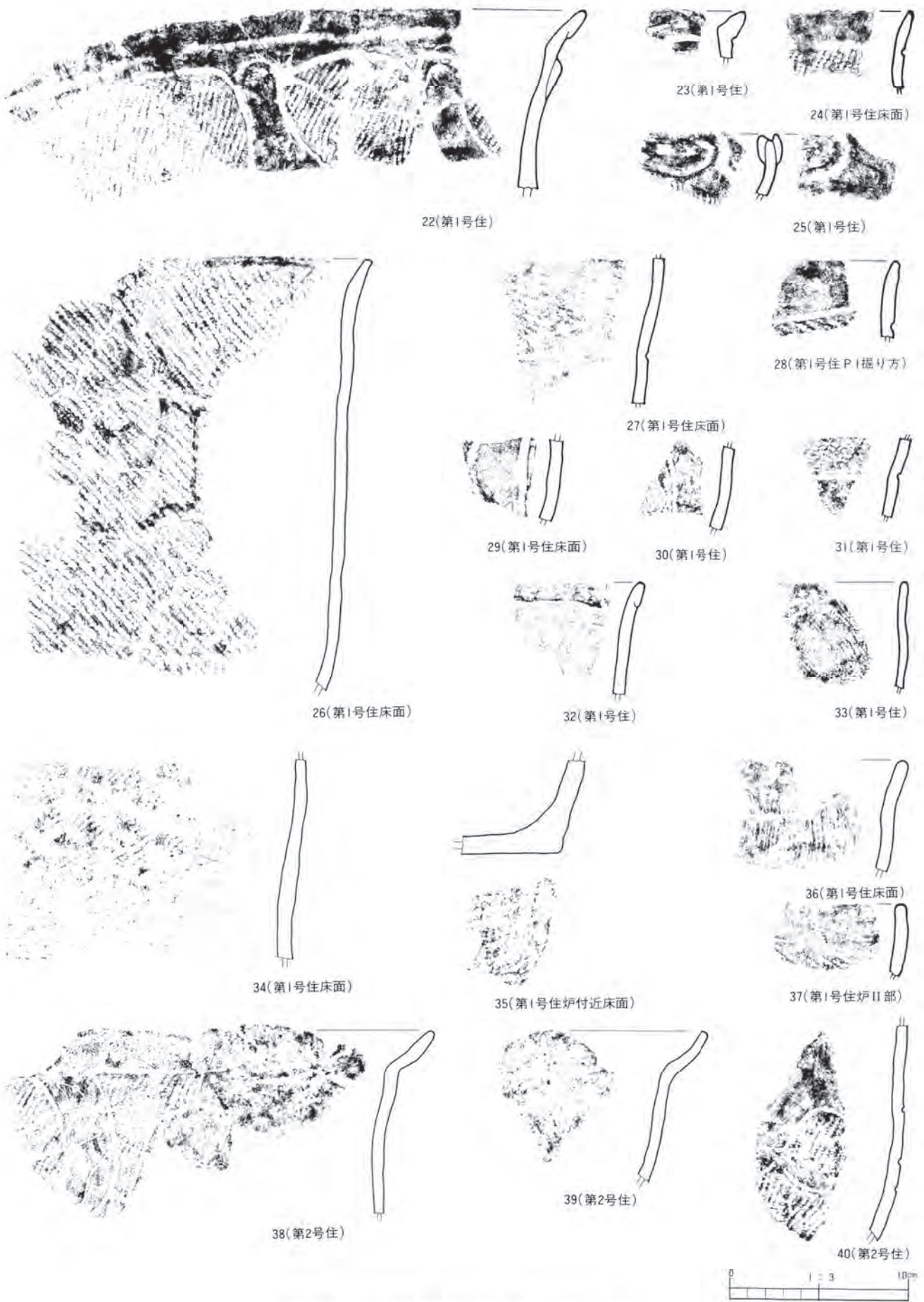
20(第3号住)



21(第4号住床面)



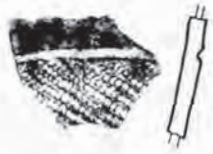
第13図 白石遺跡第2次調査・出土土器(1)



第14図 白石遺跡第2次調査・出土土器(2)



41(第2号住)



42(第2号住)



43(第2号住)



44(第2号住)



45(第2号住)



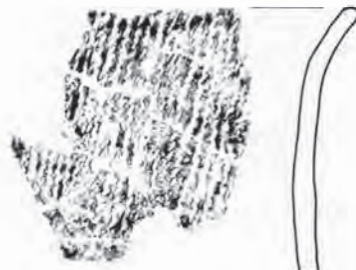
46(第2号住)



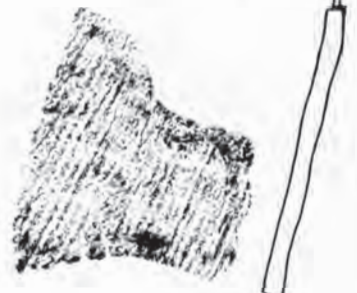
47(第2号住)



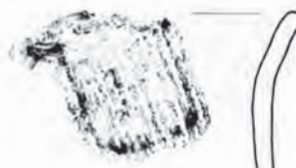
48(第2号住)



49(第2号住)



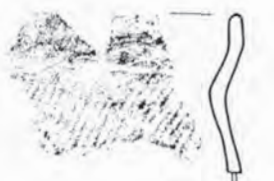
50(第2号住)



51(第2号住)



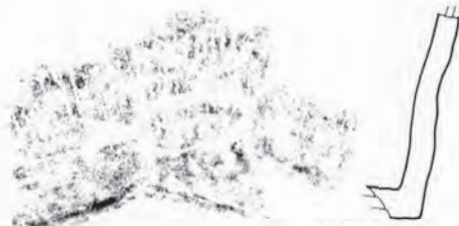
52(第2号住)



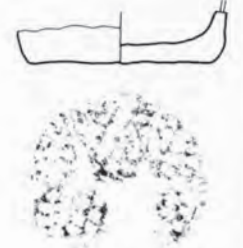
53(第2号住)



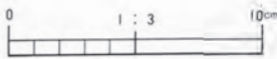
54(第2号住)



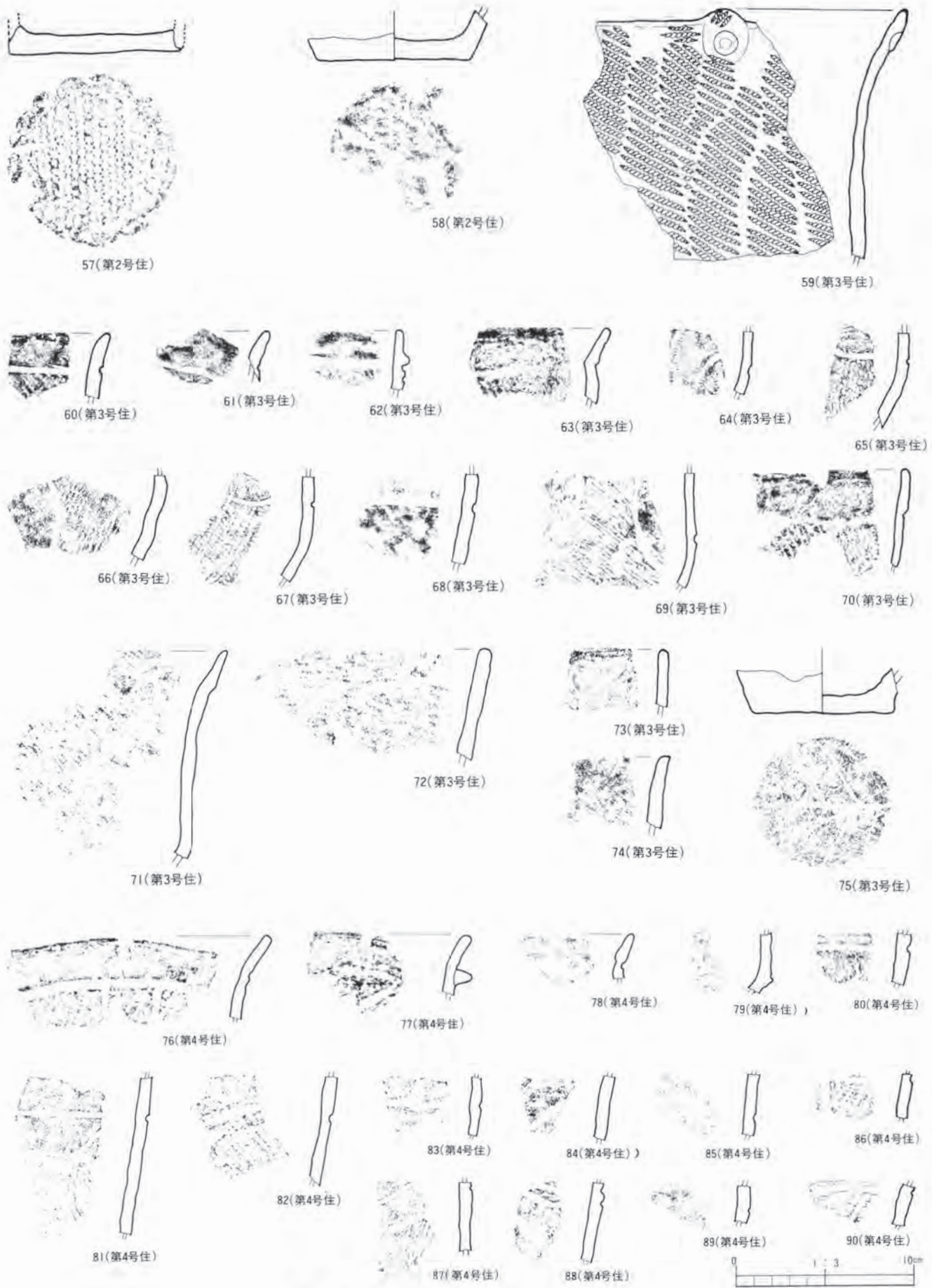
55(第2号住)



56(第2号住)



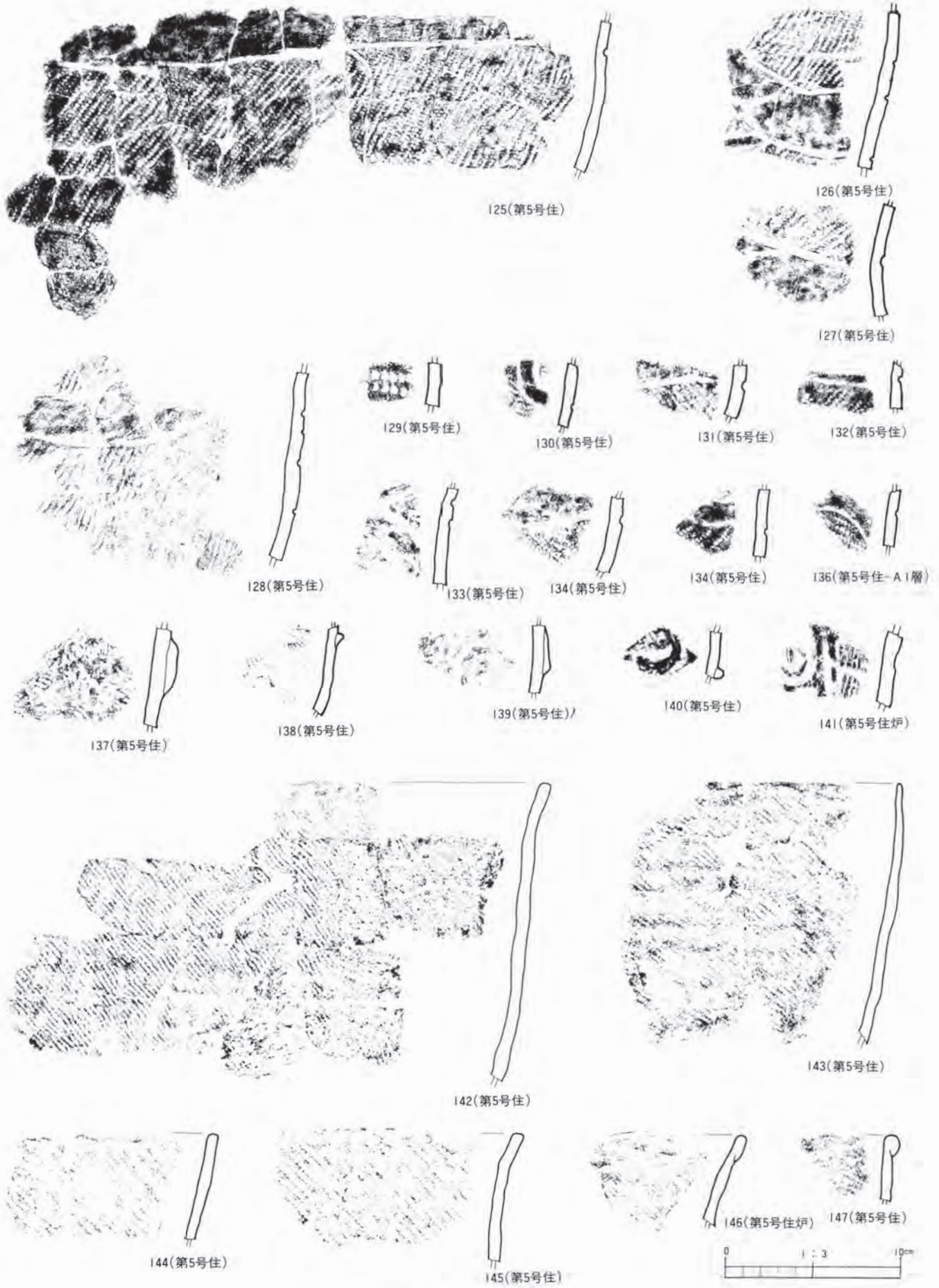
第15図 白石遺跡第2次調査・出土土器(3)



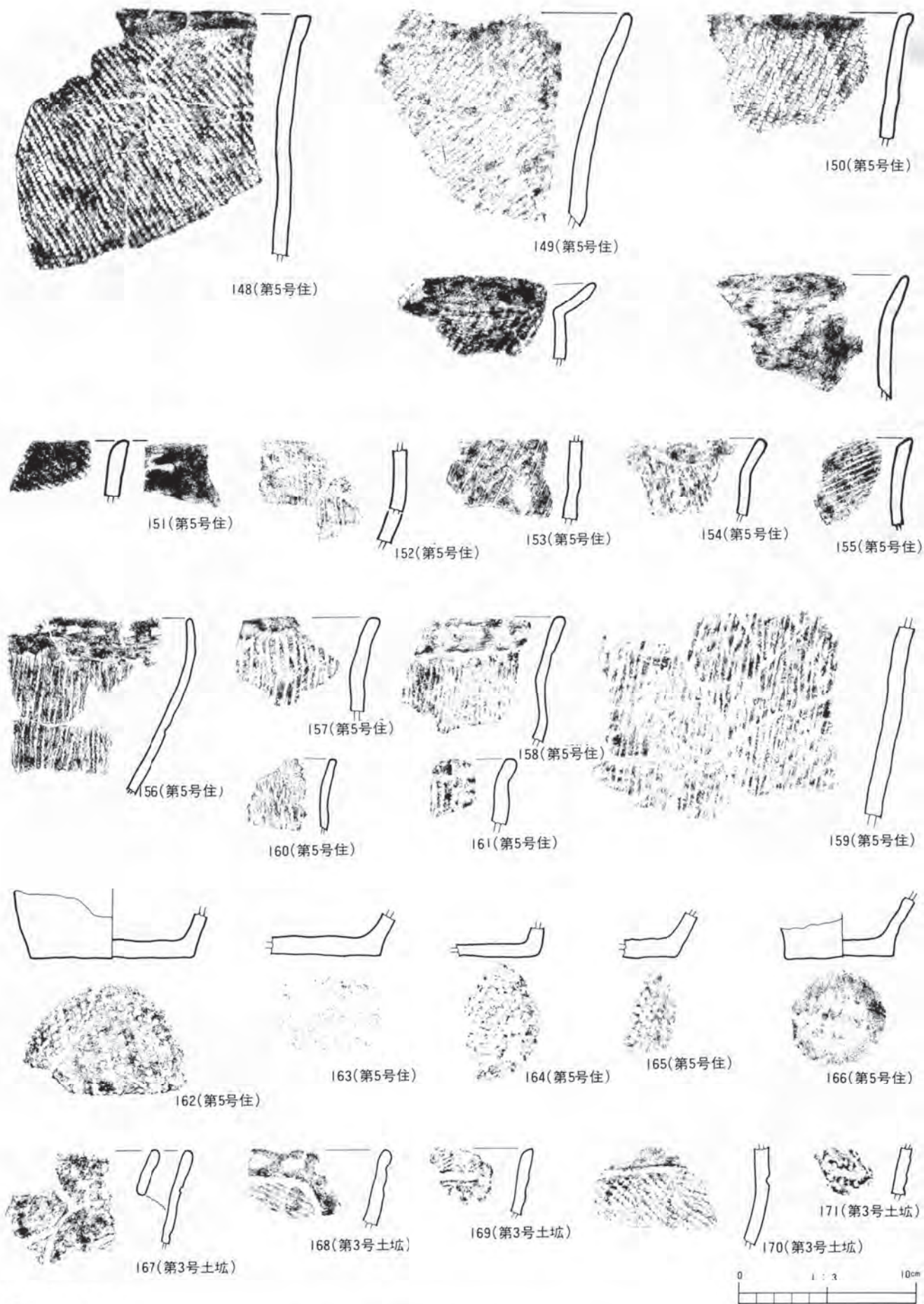
第16図 白石遺跡第2次調査・出土土器(4)



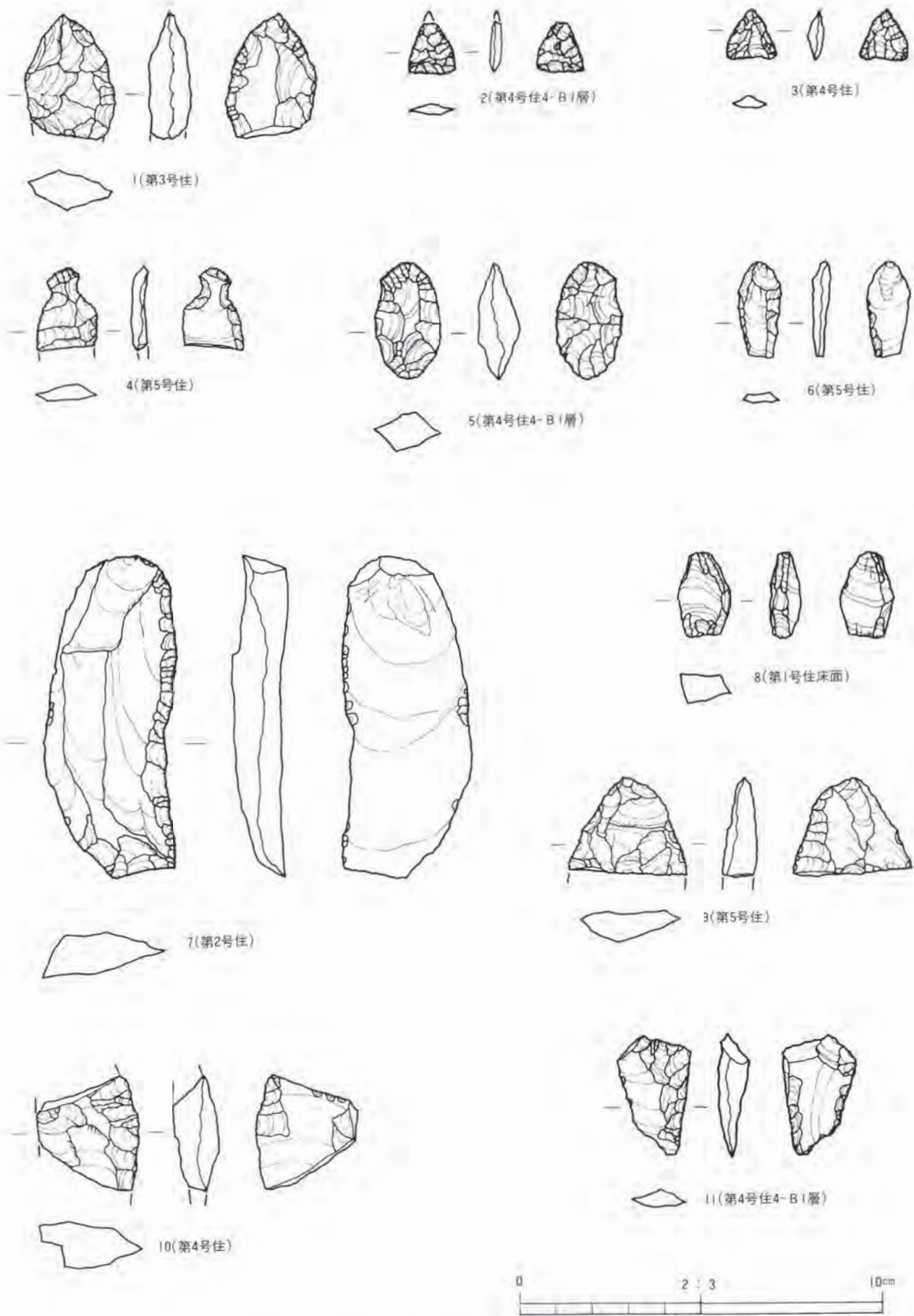
第17図 白石遺跡第2次調査・出土土器(5)



第18図 白石遺跡第2次調査・出土土器(6)

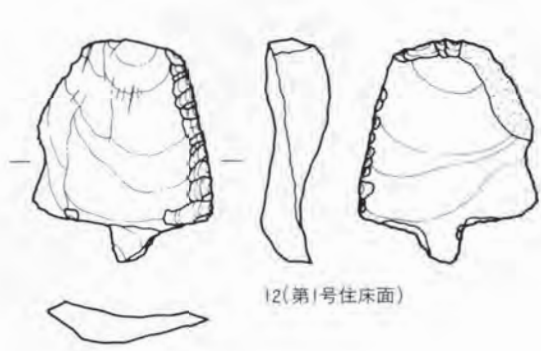


第19図 白石遺跡第2次調査・出土土器(7)

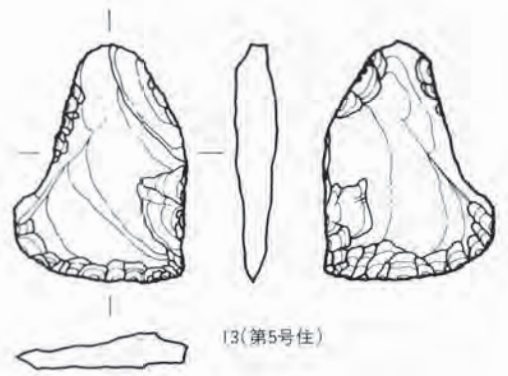


第20図 白石遺跡第2次調査・出土石器(I)





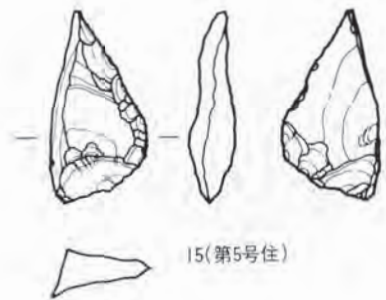
12(第1号住床面)



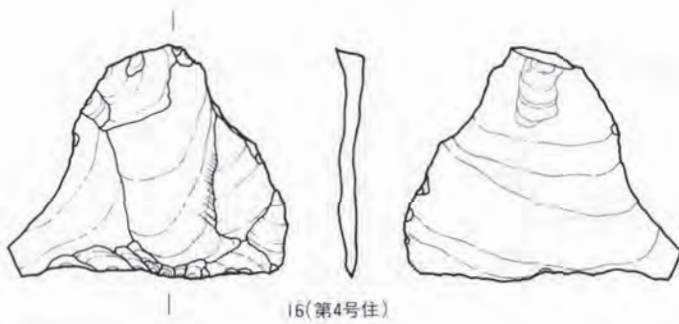
13(第5号住)



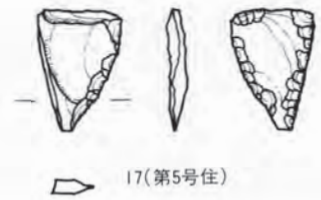
14(第1号住床面)



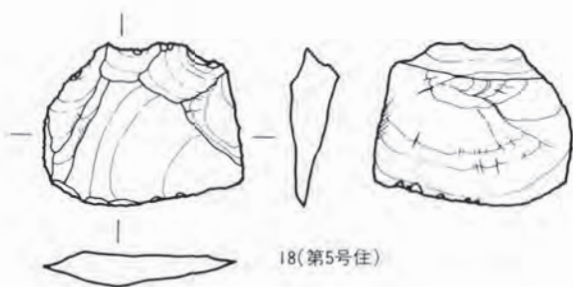
15(第5号住)



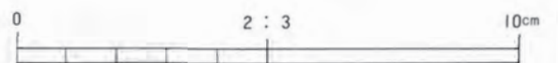
16(第4号住)



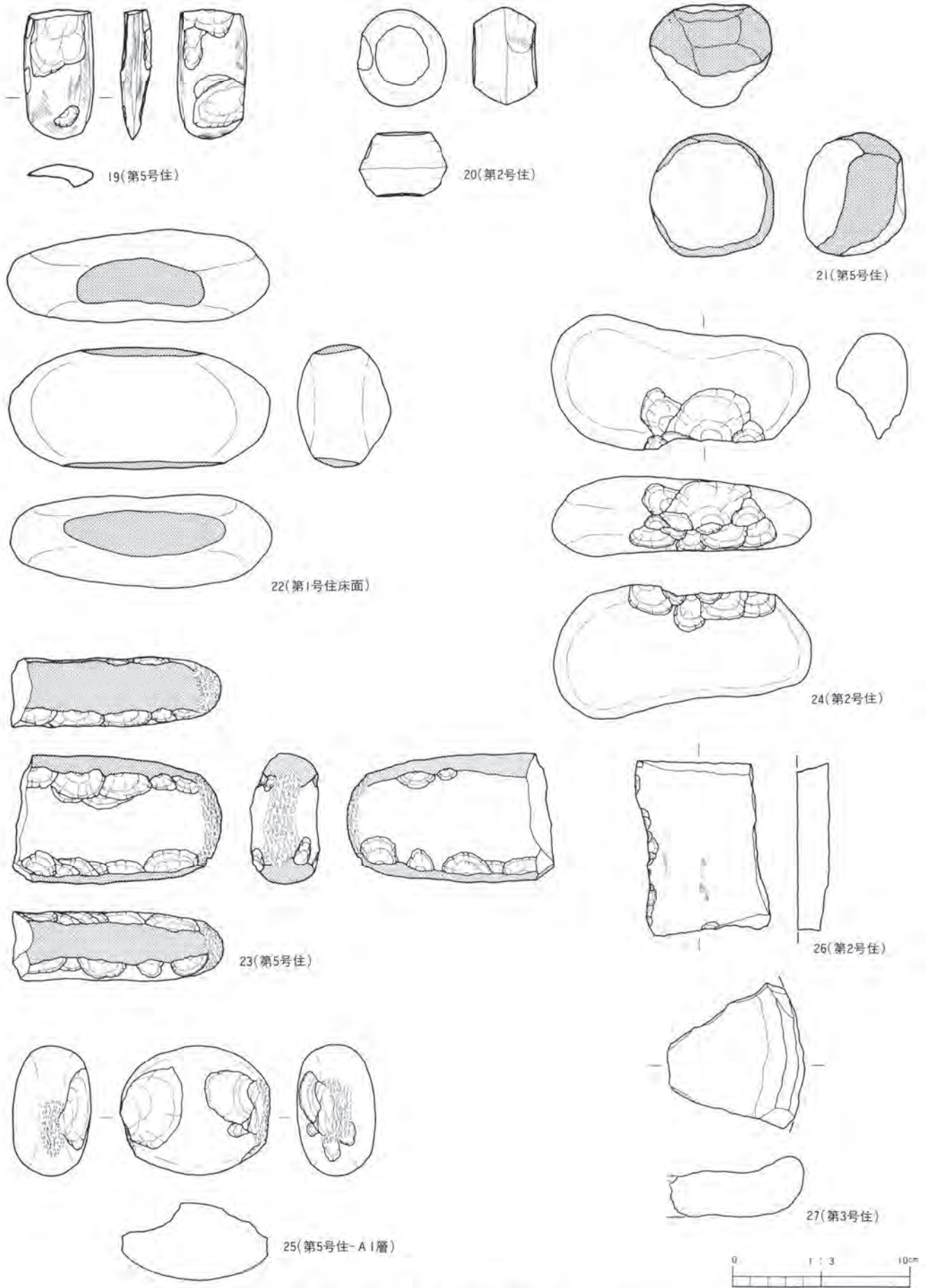
17(第5号住)



18(第5号住)



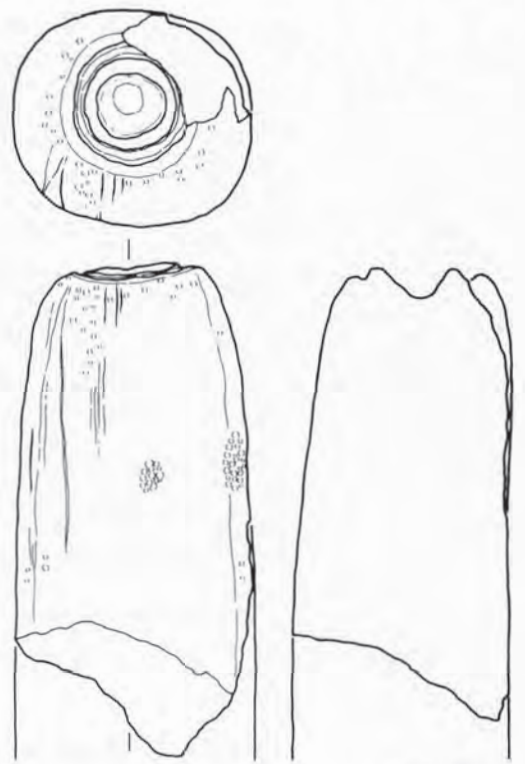
第21图 白石遺跡第2次調査・出土石器(2)



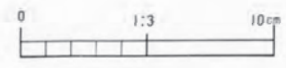
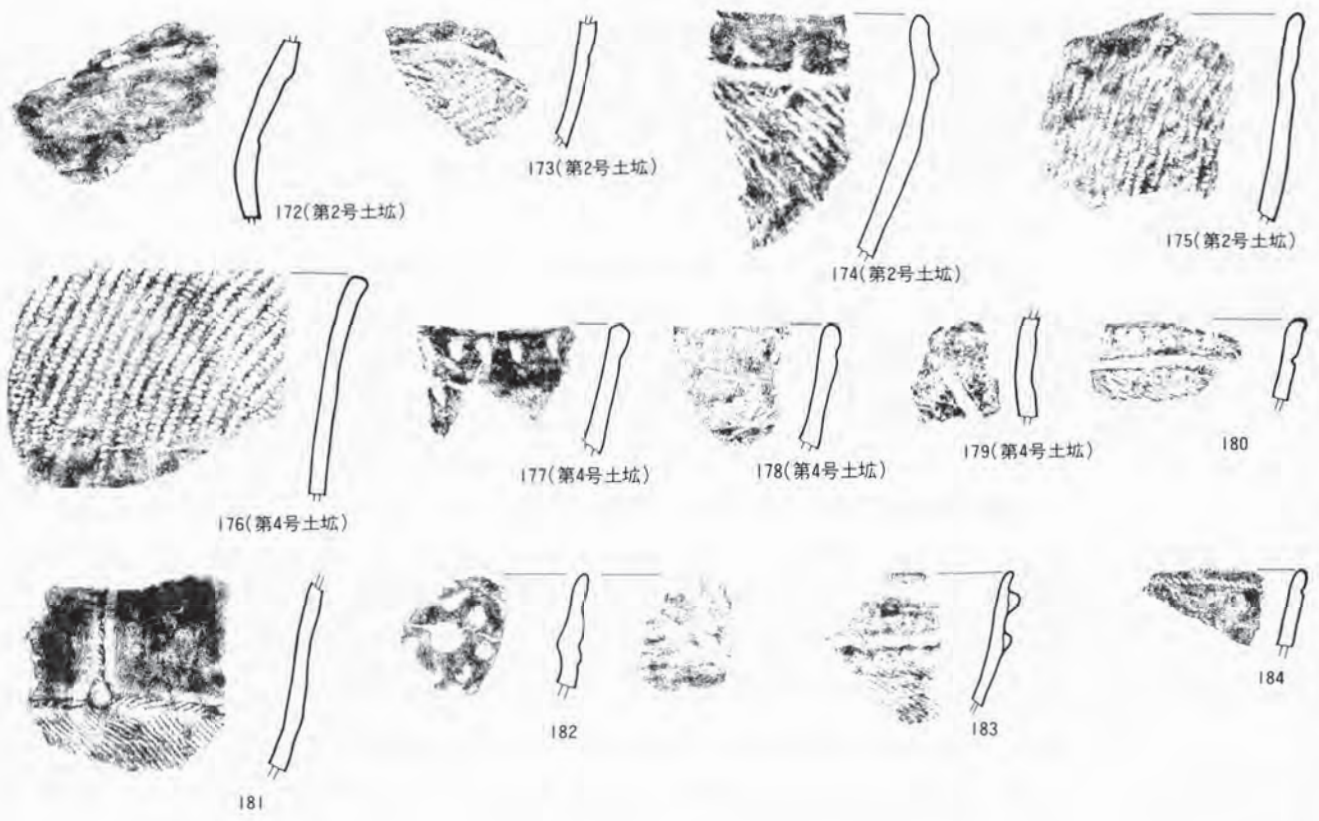
第22図 白石遺跡第2次調査・出土石器(3)



28(第2号土坑底面)



29(第3号住)



第23图 白石遺跡第2次調査・出土石器(4)  
出土土器(8)

## 2. 崎山貝塚第2次調査

### (1) 第1次調査の概要

崎山貝塚は、宮古市のコードL G 14-2079、岩手県のコードL G 04-2180として登録された周知の遺跡である。貝塚は、北、東、南の三方を低湿地により囲まれた舌状台地上に位置する。

#### 第1次調査

#### 自然遺物包含層 (混貝土層)

昨年度の調査(第1次調査)では貝塚南斜面のやや東寄りに幅2mのトレンチを入れ、斜面の上端部と下端部に幅1mのサブトレンチを設定し精査を行った。この結果、上端部からは大木1式以前に伴う貝ブロック3ヶ所と大木2式~大木3式に伴う自然遺物包含層(混貝土層)を検出し、イノシシの下顎犬歯製刺突具などの骨角器若干とシカ・イノシシ・タヌキ・イヌ・オットセイ(註1)などの獣骨、カツオ・マグロ・ブリ・マダイ・アイナメ・カサゴ科の一種などの魚骨、イガイ・フジツボ科の一種・ムラサキウニおよび人骨などの自然遺物を得ている。この地点での自然遺物包含層はあまり規模の大きなものではなく、トレンチ内での広がりは何m程であった。しかし、従来知られていなかった地点からこのような自然遺物包含層を検出できたことは有意義であり同様のものの複数存在する可能性が指摘された。

### (2) 調査の方法と目的(第24図、第25図)

本年度は調査区を南斜面のほぼ中央部に設定した。この地点は古くから自然遺物や骨角器などが多量に表面採集されることで知られていたが、その資料は一部を除きほとんどが公表されず(註2)現在に至っており実態は全く不明のままとなっていた。

#### 調査の目的

発掘調査は貝塚の中心的貝層の一つであると思われるこの貝層をできるだけ壊さないで最大限の成果を上げるよう留意した。調査の目的は貝層の範囲と埋積期間や堆積状況およびその内容(構成物)を確認することとしたが、特に廃棄層や廃棄ブロックの面的な広がりや堆積順序を捉えて記録し、また、各層を構成する遺物や礫などはすべて土ごと採集して持ち帰り分析することとした。

#### 調査の方法

調査区は地表面で自然遺物が多量に散布する地点に5m×5mのグリットを設定しA区とした。また、A区の北側にB区を、東側にC区を、西側にD区を、南側にE区をそれぞれ設定した。表土を剥いだところ、A区とB区から混貝土層などが検出され、C区とD1区からは遺物包含層が検出されたが、D2区は表土直下が地山面であり、またE区には黒色土~黒褐色土が厚く堆積していた。そこで、A区、B区、C区を中心に精査することとした。

A区は全面的に混貝土層や灰層、貝層などが認められ、これらすべてを調査することは不可能であったため、北東隅に1m×1mのグリットを南東隅に3m×3mのグリットを設定し、それぞれA1区、A2区とした。A2区は推定される貝層のほぼ中心部に位置し、貝層の上層部の堆積状況を捉えることを目的とした。またA1区は貝層の上半部に位置するが、ハンドオーガーに

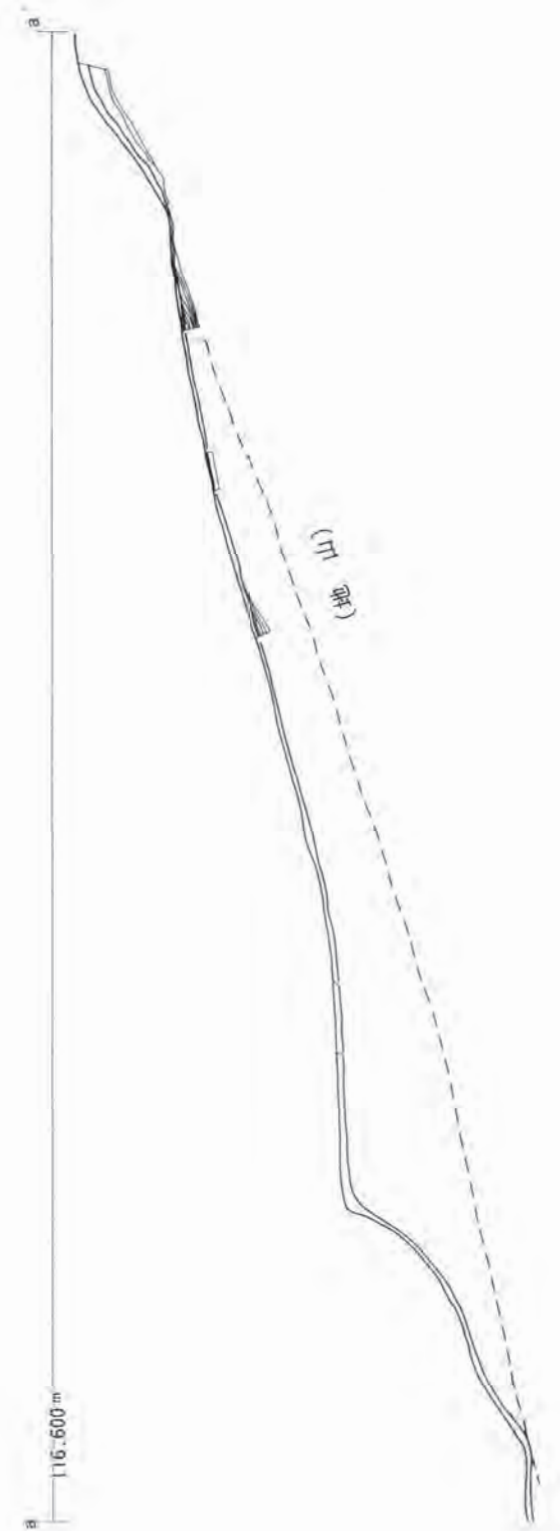
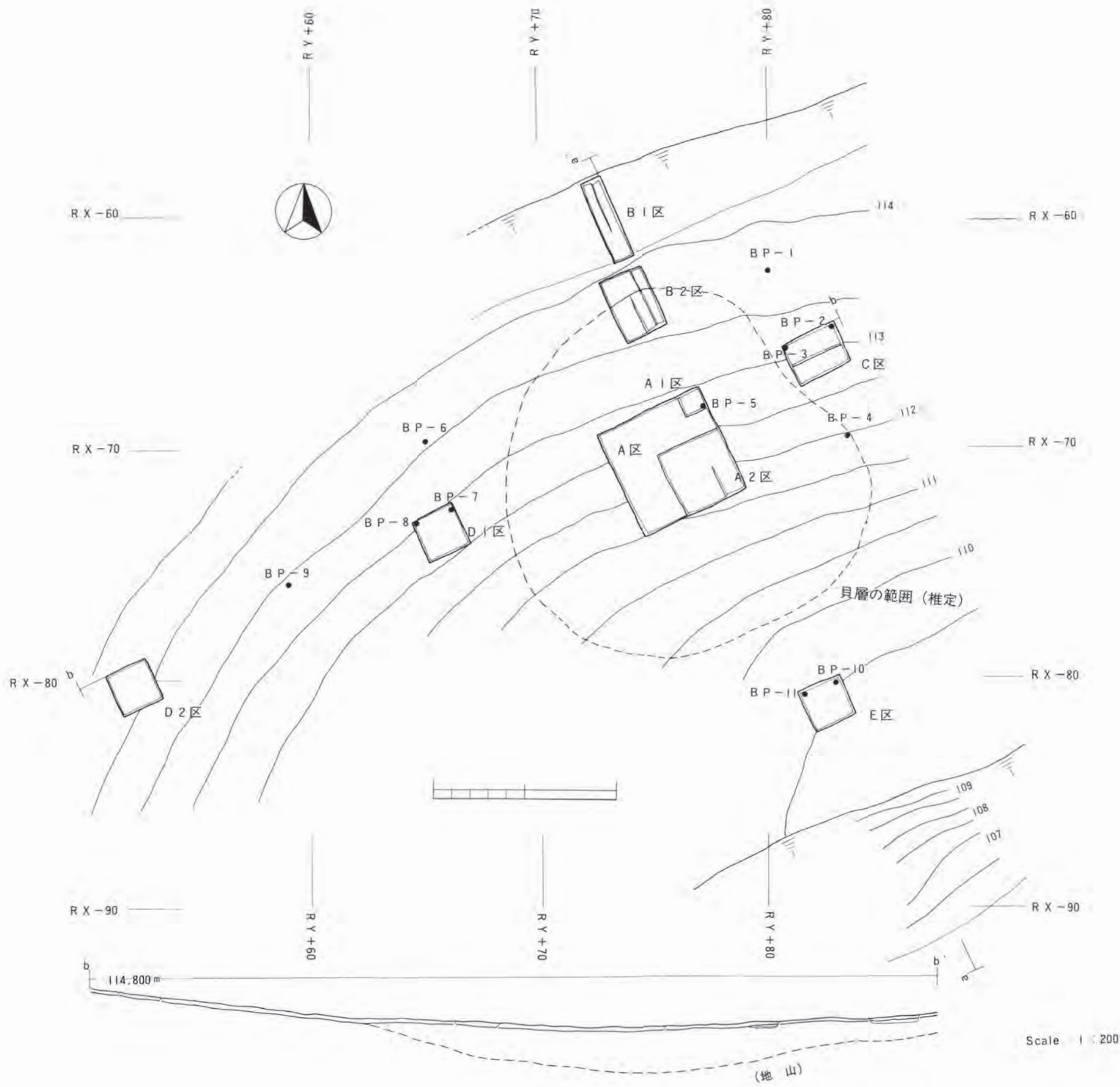
〔註1〕「崎山遺跡群1」では鯨類の一種(アザラシ科?)としたが、西本氏の同定によりオットセイに訂正する。

〔註2〕「分布調査1」に獣骨、魚骨等の写真が2点紹介されており、おそらく本年度の調査地点周辺から出土したものである。骨角器や微細な遺物については報告されていない。



第24図 山崎貝塚周辺地形図



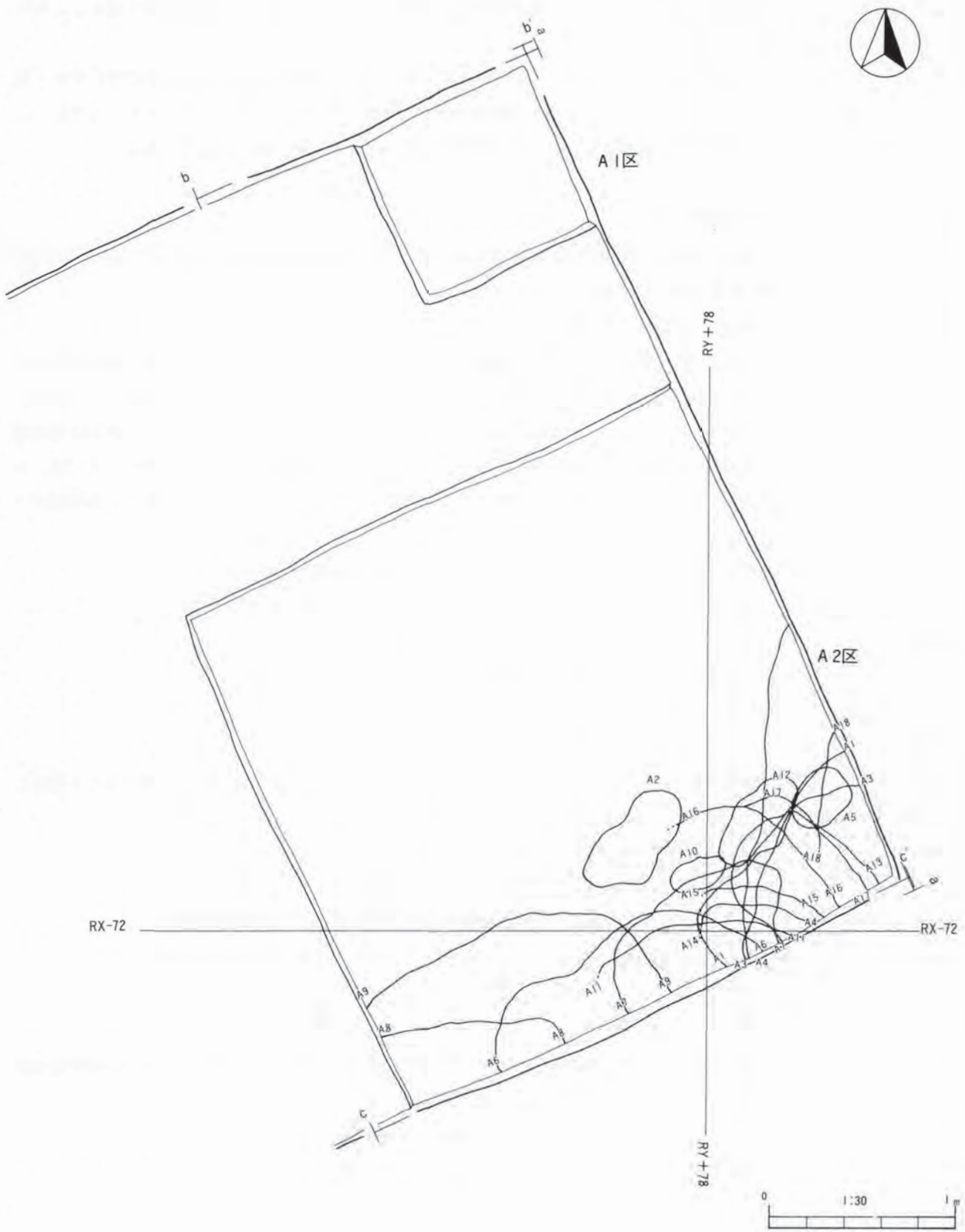


Scale 1 : 200

第25図 崎山貝塚第2次調査区全体図







第26图 A区平面图

よるボーリングを行ない貝層のおおまかな堆積状況をつかむことを目的とした。

B区は北部の法面に設定したトレンチをB1区、その南側のトレンチをB2区とした。B2区より混貝土層が検出されたため、貝層上端部の堆積状況、特に貝層の堆積開始時期を探ることを目的とし精査を行った。

C区は最上層のみを精査し、ボーリングを行ったが下層から混貝土層等は確認されなかった。

また、周辺のボーリング調査で混貝土層等を確認したのはBP4のみであった。ただし、これらの篩別けが終了していないので微細な魚骨や獣骨片等については不明である。

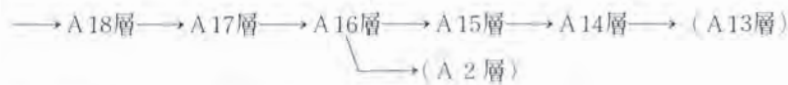
### (3) 層序

A区、B区、C区を中心に記述するが、各地点間の層位的な関係がつかめていないので地区毎に層名を使いわけた。

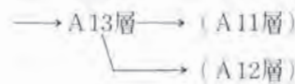
#### A2区 (第26図～第30図)

A1層からA18層までの18層を確認した。A18層以下は良好な魚骨層などであり調査を見合わせることにした。大半は破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻を含む混貝土層である。A2層、A10層は灰ブロック、A5層は魚骨ブロック、A12層は混貝ブロックである。これらは総体積1,400cc～7,400ccの小規模な廃棄ブロックである。A13層は特に巻貝を多く含む。A17層、A18層はカサゴ科、ブリなどの魚骨を多く含む層である。また、A1区の下層からの堆積順序を模式化すると次のようになる。

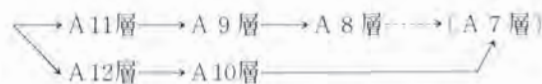
〈第1段階〉 A2区南東隅に北東から南西に下る傾斜で堆積する。



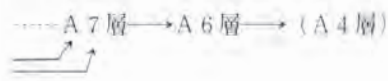
〈第2段階〉 第1段階の各層を覆う。



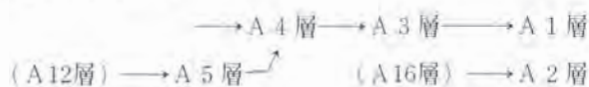
〈第3段階〉 A2区南端に北東から南西に下る傾斜で堆積する。比較的厚い層と小規模な廃棄ブロックにより構成される。



〈第4段階〉 第3段階の各層を覆い西から東へ下るゆるやかな傾斜で堆積する。



〈第5段階〉 A2区南東隅にできた凹みを北西から南東に下る傾斜で覆う。小規模な廃棄ブロックが伴う。



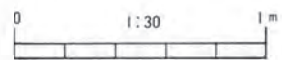
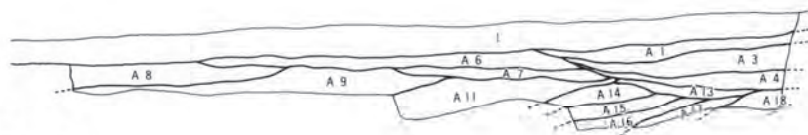
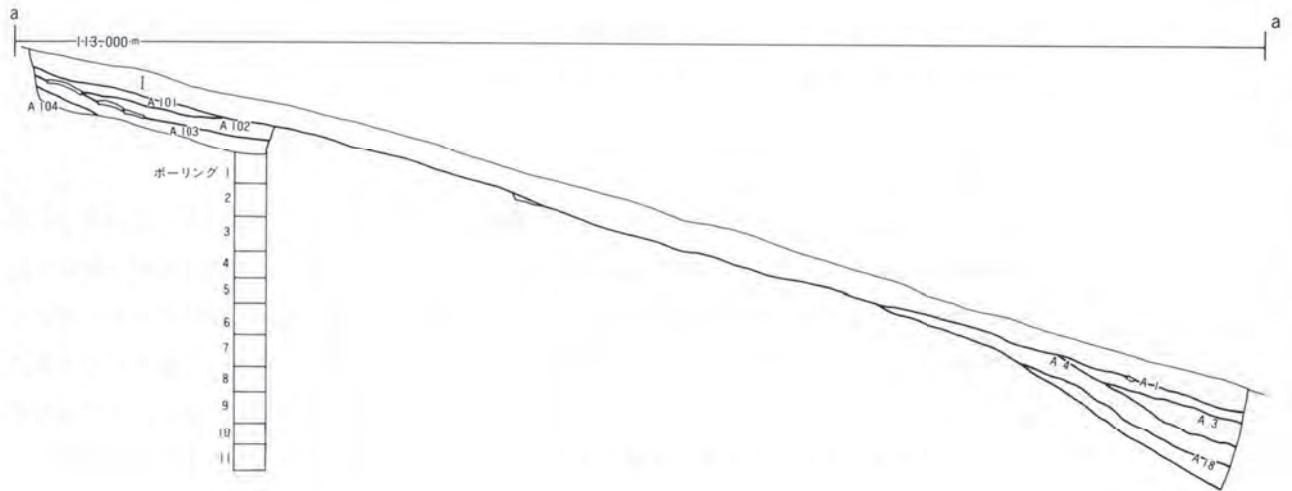
#### A1区 (第26図・第27図)

項目 層名	層区分	層厚 (cm)	掘り上げた土の		特記事項(伴出遺物等)
			総重量(g)	総体積(cc)	
A 1層	暗褐色混貝土層	6	15,140	17,830	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少
A 2層	にぶい黄褐色灰ブロック	3	6,520	7,400	小規模な廃棄ブロック・完掘・イガイ中・フジツボ微・ウニ少・ムササビ
A 3層	暗褐色混貝土層	10	30,360	35,670	イガイ・フジツボ・ウニ少 巻貝
A 4層	暗褐色混貝土層	8	31,335	36,600	イガイ中・フジツボ・ウニ少・ ツノザメ科・テン
A 5層	暗褐色魚骨ブロック	4	2,580	2,980	小規模な廃棄ブロック・完掘・イガイ中～ 多・フジツボ・ウニ少・カサゴ科多・ホッケ
A 6層	暗褐色混貝土層	7	26,200	31,750	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少
A 7層	暗褐色混貝土層	7	17,545	21,730	イガイ中・フジツボ・ウニ少
A 8層	褐色混貝土層	10	11,445	13,400	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少 へビ科
A 9層	暗褐色混貝土層	10	56,230	66,150	イガイ中・フジツボ・ウニ少 へビ科・ネズミ科
A 10層	にぶい黄褐色灰ブロック	3	1,060	1,400	小規模な廃棄ブロック・完掘 イガイ・フジツボ・ウニ少
A 11層	暗褐色混貝土層	15	6,445	7,600	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少～微 ウサギ
A 12層	褐色混貝ブロック	3	4,330	4,850	小規模な廃棄ブロック イガイ少・フジツボ・ウニ微・ニシン
A 13層	暗褐色混貝土層	7	11,325	13,220	イガイ中・フジツボ・ウニ少 巻貝多・アオザメ・ウサギ
A 14層	暗褐色混貝土層	7	14,480	17,600	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少
A 15層	暗褐色混貝土層	6	3,530	4,150	炭多・イガイ中・フジツボ・ ウニ少～微
A 16層	暗褐色混貝土層	6	19,195	22,710	イガイ・フジツボ・ウニ少 巻貝・ヒラメ
A 17層	褐色混魚骨層	4	7,980	9,900	イガイ中～少・フジツボ・ウニ少 カサゴ科多
A 18層	褐色混魚骨層	7	8,310	9,800	イガイ中～少・フジツボ微・ウニ少 カサゴ科・ブリ多
A101層	暗褐色混貝土層	4	42,345	41,250	イガイ・ウニ微
A102層	暗褐色混貝土層	6	18,620	21,100	イガイ・ウニ微 マダイ・カサゴ科やや多・クロダイ
A103層	暗褐色混貝土層	6	10,155	11,850	イガイ・ウニ微 カサゴ科・やや多
A104層	暗褐色混貝土層	6	3,700	4,620	イガイ・ウニ少 オットセイ

第1表 崎山貝塚第2次調査土層一覧表(1)

項目 層名	層区分	層厚 (cm)	掘り上げた土の		特記事項(伴出遺物等)
			総重量(g)	総体積(cc)	
Bor. 1	(暗褐色土、暗)	14.1	3,275	3,900	イガイ・ウニ少・イノシシ腓骨製刺突具 へビ科
Bor. 2	(暗褐色土)	13.0	3,415	4,250	イガイ少・ウニ中～少 オットセイ
Bor. 3	(暗褐色土)	14.5	3,380	4,000	イガイ中～少・ウニ中 カジカ類
Bor. 4	(暗褐色土、明)	9.1	3,565	4,000	イガイ少・ウニ多(下部はウニ層)
Bor. 5	(暗褐色土、明)	10.7	3,480	4,000	イガイ・ウニ中～多・フジツボ少 イワシ最大値・カツオ多
Bor. 6	(にぶい黄褐色土)	12.9	3,020	3,450	イガイ・ウニ中～少 イワシ多
Bor. 7	(暗褐色土)	11.5	3,665	4,000	イガイ・ウニ中～少
Bor. 8	(にぶい黄褐色土)	10.7	3,695	4,050	イガイ・ウニ少 骨角器
Bor. 9	(にぶい黄褐色土)	14.3	4,465	4,800	イガイ・ウニ少 魚骨少
Bor.10	(褐色土)	10.8	3,965	3,950	地山層・遺物は上層のもの
Bor.11	(褐色土)	6.5	2,480	2,550	地山層・遺物は上層のもの
C1層	暗褐色土層	16	(未)	(未)	炭化物粒多・焼骨少 大木7b式土器
B1層	暗褐色混貝土層	5	15,680	18,500	イガイ・ウニ少
B2層	暗褐色混貝土層	8	16,610	19,150	イガイ・ウニ少
B3層	暗褐色混貝土層	8	24,770	29,080	イガイ中～少・ウニ少 オットセイ・獣骨多
B4層	暗褐色混貝土層	7	40,430	52,650	イガイ・ウニ少・白色土含 オットセイ・獣骨多
B5層	暗褐色混貝土層 (灰まじり層)	7	32,125	34,550	イガイ少・ウニ微・白色土含
B6層	暗褐色土層 (混骨土層)	7	40,090	44,900	イガイ・ウニ無
B7層	褐色土層 (混骨土層)	9	153,150	164,420	イガイ・ウニ無
B8層	褐色土層 (混骨土層)	12	14,975	16,800	イガイ・ウニ無

第2表 崎山貝塚第2次調査土層一覧表(2)



第27図 土層断面図

A101層～A104層の4層を確認し、以下の層をボーリング調査した。A101層～A104層はいずれも混貝土層で破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻を少量含む。また、ボーリングは1回に複数の層を掘り上げているため、上層から下層へのおおまかな推移を示すに過ぎないが、ボーリング3～ボーリング6は良好な混貝土層となっている。ボーリング4の下部にはほとんどウニだけで構成される層がみられ、ボーリング5、ボーリング6はイワシをはじめとする多くの魚骨が含まれていた。ボーリング10以下は地山層である。わずかに含まれた自然遺物はハンドオーガを挿入する際に上層のものが混入したためと思われる。

#### B2区（第31図）

畑として使用された際に斜面を切ったものと思われ、かなり傾斜がゆるくなっている。貝層の上端部に相当するB1層～B8層の8層を確認している。B1層、B2層は破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻を少量含む混貝土層である。B3層、B4層は破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻をやや多く含む混貝土層で、層位面付近から完存率の高い獣骨を多く出土している。B5層は灰まじり層である。B6層、B7層は貝類を全く含まない土層であるが、イワシなどの魚骨をやや多く含む。B8層も土層であるが、イワシを含むほかは魚骨、貝類を微量含む。B8層下面は地山へ漸移的に推移する。

#### C区（第25図）

最上層のみを精査したところ縄文時代中期前葉の土器片を比較的多く検出した。

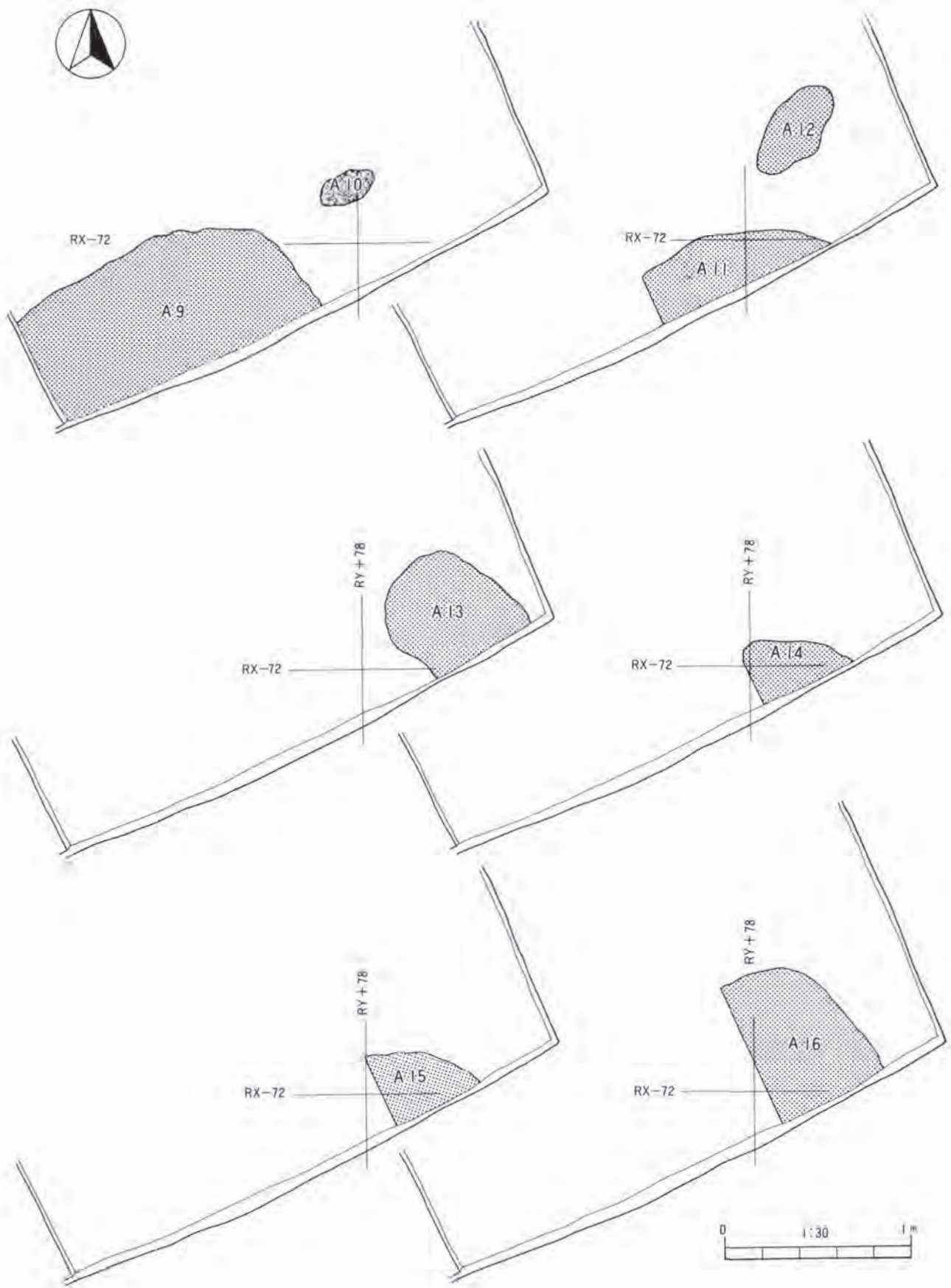
C1層は暗褐色土層であるが炭化物粒を比較的多く含む。層厚は16cmほどである。焼骨がわずかに含まれるが貝殻はみられなかった。水洗選別が完了していないので詳細は不明である。

精査を行った層の概略は以上である。これに周辺のボーリング調査の成果をあわせて第25図に貝層の範囲を示した。これはあくまでも貝殻を含む層の範囲ということであり、イワシ等の小魚骨や骨片を含む層の範囲はもう少し大きなものになる可能性がある。

また、第1次調査区に検出したような貝ブロックや、貝殻をほとんど含まずに獣骨や魚骨を主体とする小規模な自然遺物包含層などが周辺に存在する可能性も考えられる。これらを確認するためにはハンドオーガーや検土杖などによるボーリング坑をもっと密に設定する必要があるが、無秩序なボーリングも貝層の破壊につながるため、来年度以降、慎重に対処することとしたい。

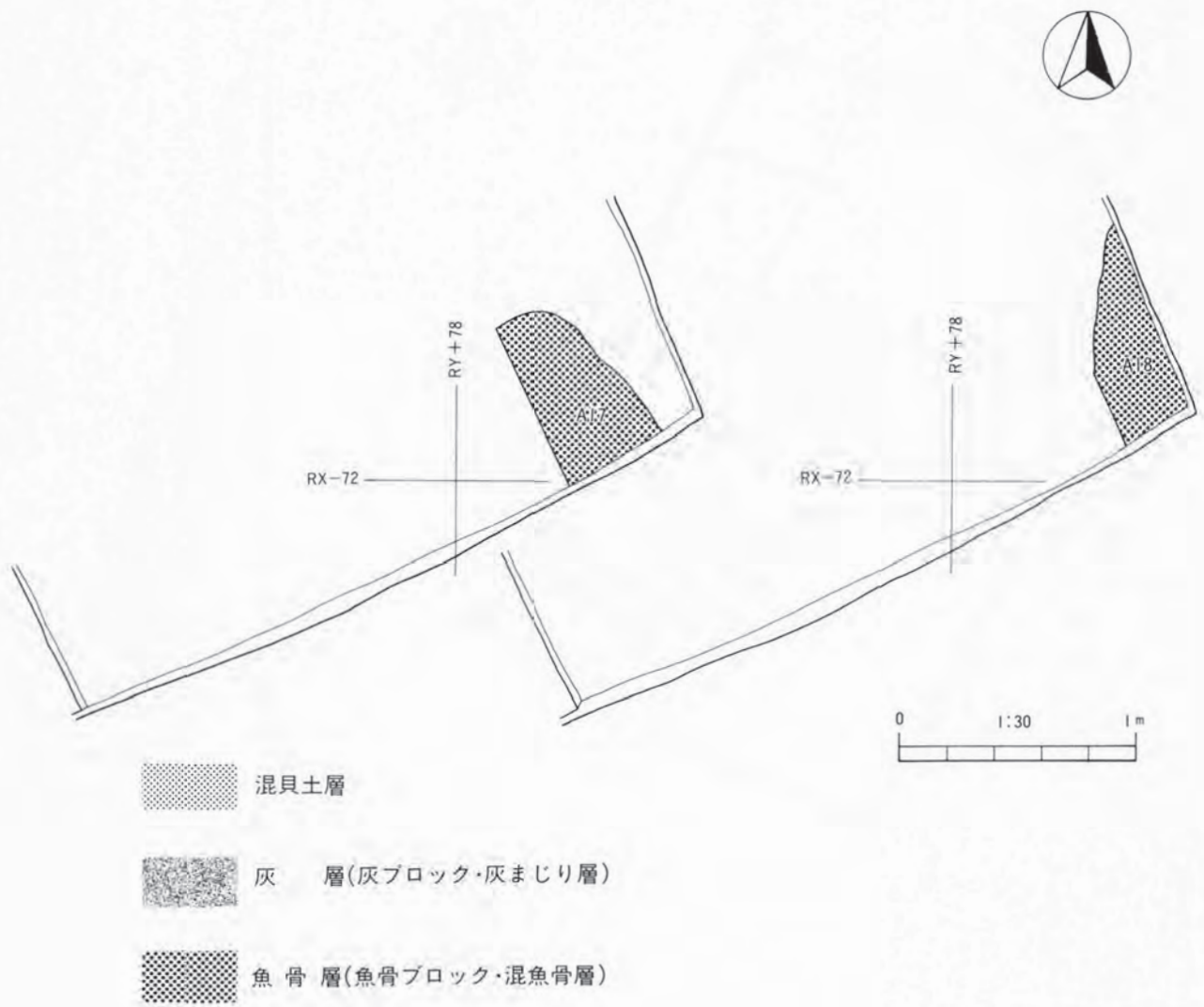


第28図 A 2 区貝層平面図(1)

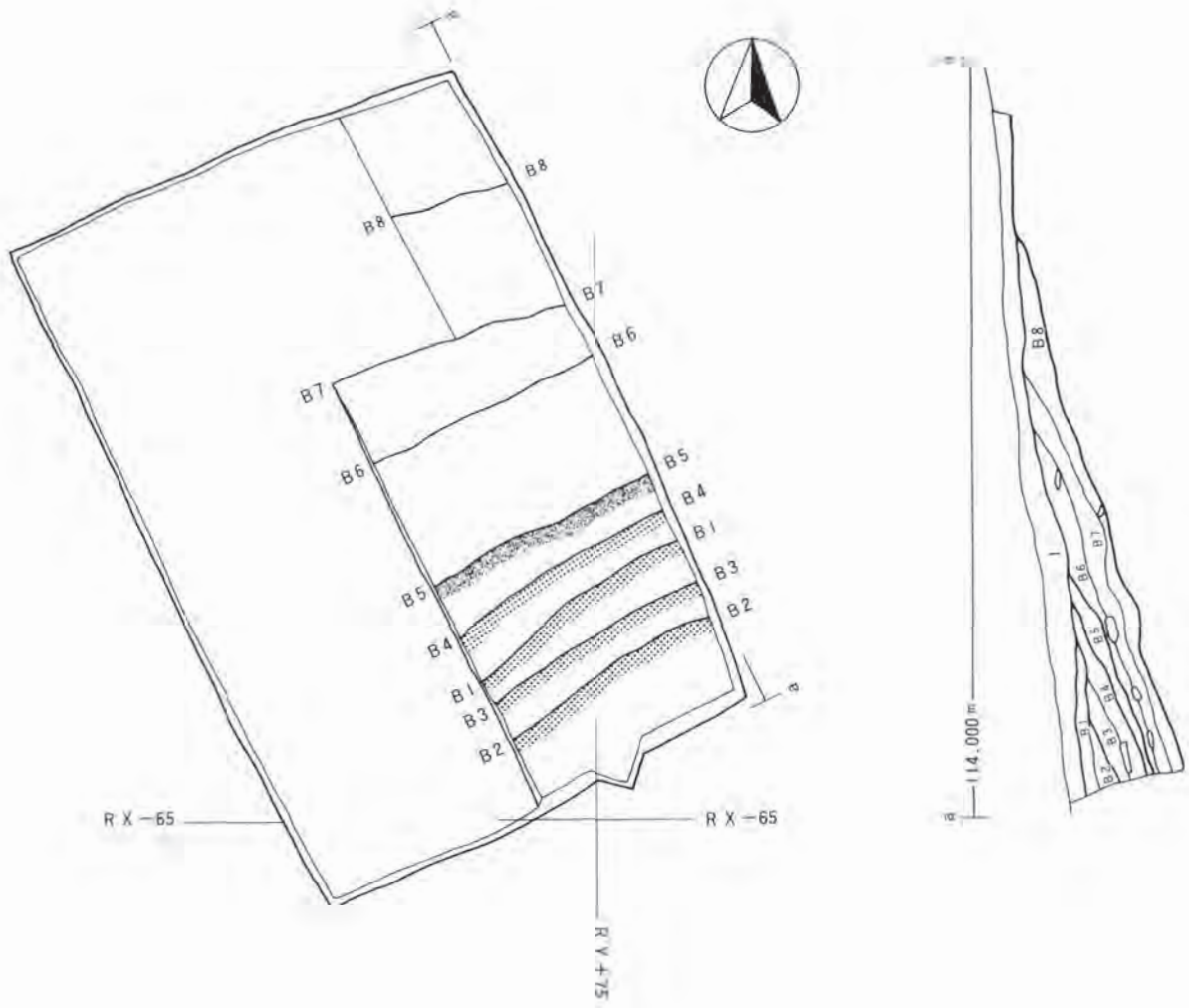


第29図 A2区貝層平面図(2)





第30図 A 2 区貝層平面図(3)



第31图 B2区平面图土层断面图

#### (4) 出土遺物

遺物の出土状況を概観するとA2区は骨角器類を比較的多く出土しているが土器や石器はほとんど皆無に近い状態であった。A1区は土器や石器をわずかに出土している。またボーリング坑から骨角器2点を出土している。B区は土器、石器、骨角器が少量出土している。C区は土器、石器が比較的多く出土している。全体的な傾向としては混貝土層などの自然遺物を多く含む層からは土器、石器の出土が極端に少なく骨角器が多く出土するが、自然遺物を含まない層からは土器、石器が多く出土するようである。

##### (a) 土器 (第32図～第35図)

###### A2区 (第32図1・2)

混貝土層などからの出土量は極端に少なく図示できたのは2点のみである。1はA4層から出土したが、口縁部外面に貼り付けを施し、内面を肥厚させるものである。2はA2層から出土したが、口縁部の内湾する無文の深鉢である。

###### A1区 (第32図8～21)

出土量は少ない。8～15はボーリング坑より出土したものである。8は口縁部破片で9、10は体部破片であるが胎土に植物繊維を含まずおそらく大木2式以降に伴うものと思われる。11、13は体部破片であるが胎土に植物繊維を含む。14は撚糸文を施すもの。15は綾絡文を施すもの。16～21はA104層～A101層より出土したものである。17は撚糸文を施す土器の底部である。18と20は同一個体で体部がややふくらむ深鉢である。網目状撚糸文を施す。これらは大木3～4式に伴うものと思われる。21は口縁部にくぼみのある突起を2つ有する。

###### A区 (第32図4～7)

A1区、A2区以外から出土したものである。4はA1区、A2区中間の貝層上面から出土した。口縁部突起上に幅の広い隆帯を貼り付ける。また突起より垂下した2条の鋸歯状隆帯は端部を連結する。大木5式に相当する。

###### B2区 (第32図22～34、第33図35～53)

22～24はB8層、B7層から出土したものでいずれも地文のみを施し胎土に植物繊維を含む。23は羽状縄文を施す。これらはほぼ大木1式～大木2式に相当する。

25～30はB6層から出土したもので胎土に植物繊維を含むものが大半を占める。27は羽状縄文を施す。30は口縁部に不整撚糸文を施す。29は底部付近の破片であるが胎土に植物繊維を含まない。これらはほぼ大木2式～大木3式に相当する。

31～34はB5層から出土したもので胎土に植物繊維を含むものが大半を占める。33は木目状?の撚糸文を施す。31は口縁部に細い条痕状の沈線を施すが胎土に植物繊維を含まない。これらはほぼ大木2式～大木3式に相当する。

35、36はB4層から出土したもので、35は口縁部に粘土紐を貼り付け、この上に刺突文を施す。大木3式に相当する。

37、38はB3層から出土したもので、37は口縁部に半截竹管により山形文を2段施文する。大木3式に相当する。

39～41はB2層、B1層から出土したものである。39は口唇部に刺突を施すもので大木3式以降かと思われる。

### C区（第33図43～53）

C1層から一括して出土したものである。43は体部がふくらみ口縁部が外反する深鉢である。口縁部文様帯は上端の隆線、下端の小波状隆線により区画され、更にC字および逆C字の隆線により4単位のだ円形区画に分割される。体部文様帯にはY字形の隆線を4単位、だ円形区画の間に垂下させる。地文は体部に羽状縄文を縦方向に回転させるが、口縁部はR-L単節斜縄文を横方向に回転させる。44は円形の突起を有する深鉢である。口縁部文様帯はやはりだ円形区画文を施すが地文のかわりに縦位の刻目状沈線で充填する。体部文様帯にもY字形の隆線を施す。体部の地文は結節縄文を縦方向に回転する。47～50は44と同様の地文を施すものであるが50は体部が強く屈曲し内湾する。45、46も隆線を施文するかややモチーフを異にするようである。51、52は口縁部に刻目を有するもの。53は無文の底部である。これらはいずれも大木7b式に相当する。

### 表土（第33図54～第35図153）

表土から出土したものを一括した。縄文時代早期末葉～中期末葉にわたる。

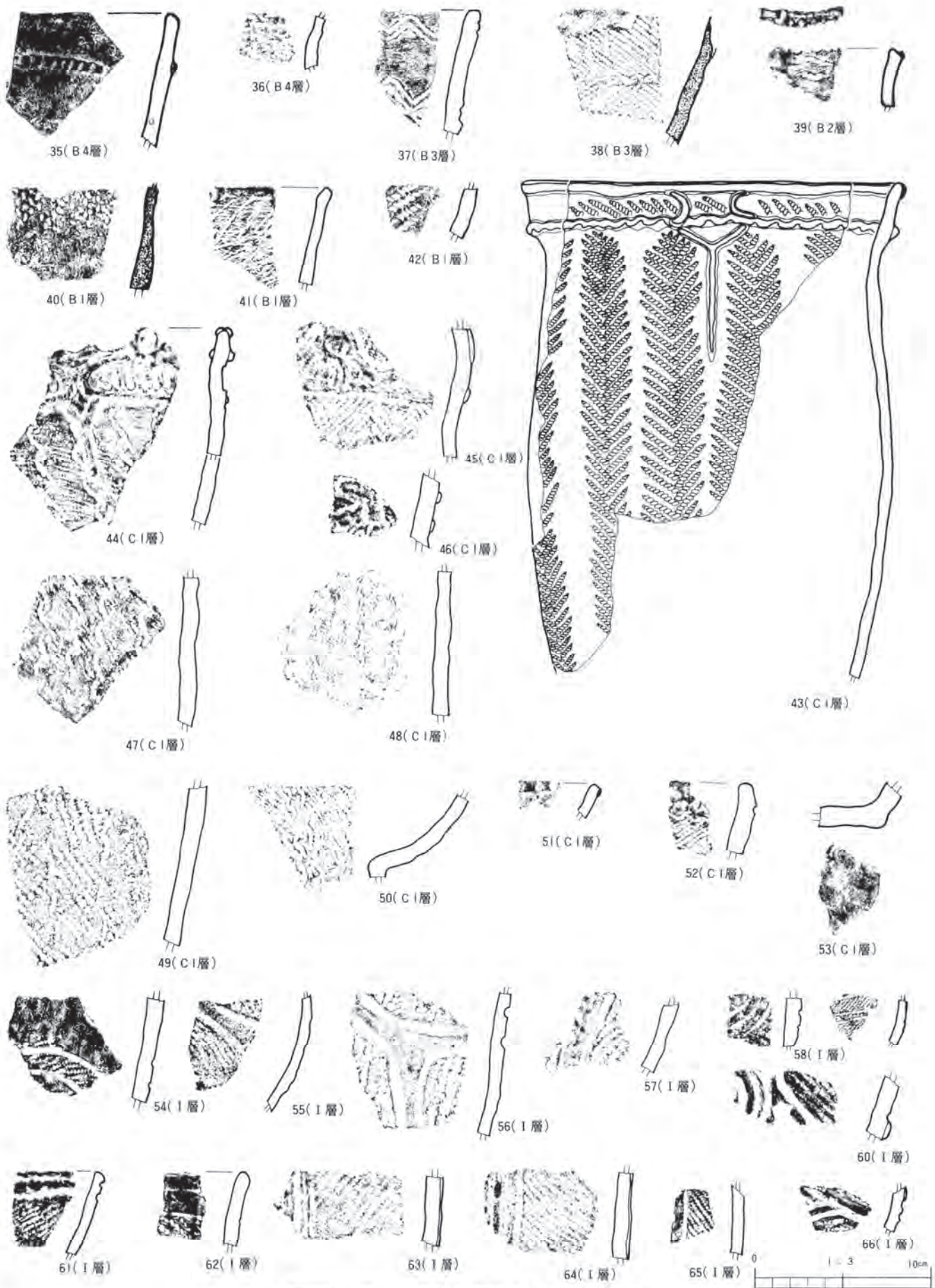
54は磨消し技法により曲線的な区画文を施し大木10式に相当する。55～57も磨消し技法によるが大木9式に相当する。58、59は平行沈線を施すものである。60～66は隆沈線や沈線により渦巻文、懸垂文を施すもので大木8b式に相当する。67、68はキャリパー形深鉢で沈線により施文される。大木8a式に相当する。69～72は原体圧痕文、隆線によるだ円形区画文などを施すもので大木7b式に相当する。76～79は竹管文を施すもので大木7a式に相当する。80は櫛目文?を施すものである。

81～83も竹管文を施文するが円形刺突文などを伴用するもので大木6～7a式に相当する。93は刺突文を伴う幅広の隆帯と沈線による鋸歯状文を施し大木5式に相当する。84～89は隆線により小波状文などを施すもので大木4式に相当する。90～92も隆線によるもので大木4式～大木5式に相当するものか。94～103は刻目を有する隆線や山形沈線文、円形刺突文などを施すもので大木3式に相当する。104～111、118は口唇部に刻目を有するものなどで大木2式～大木3式に相当する。112～117、119～127は胎土に植物繊維を含まないものを一括した。大木2式以降に伴うものと思われる。

127～153は胎土に植物繊維を含むものである。127～129、137～138は網目状撚糸文やS字状連鎖沈文を施すものなどで大木2式に相当する。130～136は口縁部に不整撚糸文を施すものでほぼ大木1式に相当する。140～143は羽状縄文を施すもので大木1式に相当する。144～151は地文のみを施すもので150、151は口唇部にだ円形の押捺がみられる。これらは大木1式もしくはそれ以前の型式に伴うものと思われる。151は口唇部に円形の刺突を施し、内面に条痕の認められるものである。152は内面にも縄文のような圧痕がみられるものである。153は尖底部である。



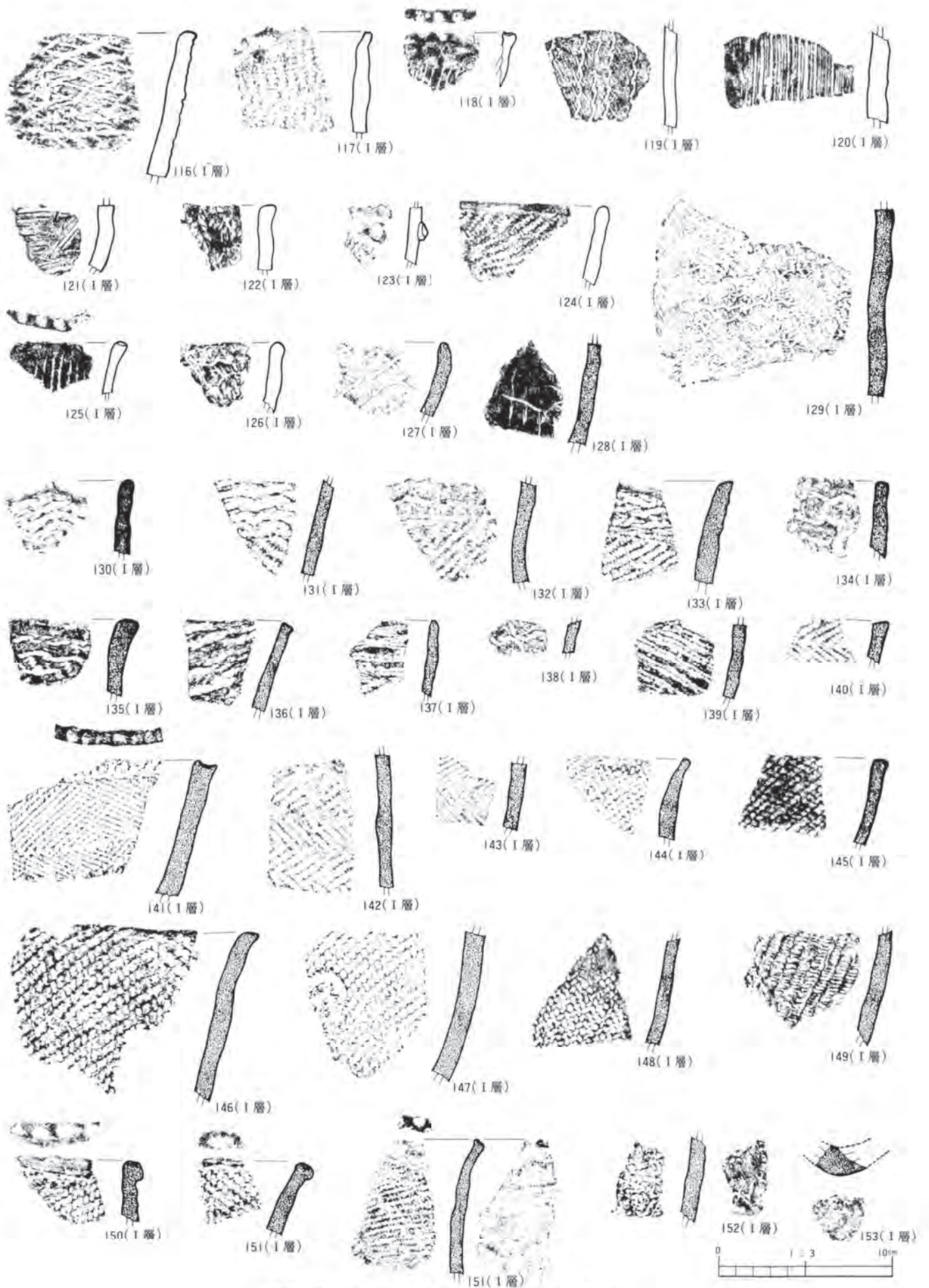
第32図 崎山貝塚第2次調査・出土土器(1)



第33図 崎山貝塚第2次調査・出土土器(2)



第34図 崎山貝塚第2次調査・出土土器(3)



第35図 崎山貝塚第2次調査・出土土器(4)



(b) 石器 (第36図～第38図)

A区、B区、C区から出土したものはすべて図示したが極めて少ない。また、表土から出土したものは主なものを図示したが、これ以外に石鏃約40点など多量に出土している。

**剥片石器**

石鏃 (1～8) 大小があるが基本的にはすべて三角形の無茎鏃である。基部は平基と凹基の2種があるが基部幅は12～18mmにおさまる。

石錐 (9) 細長い剥片を使用するが、基能部だけではなく両側縁にまで調整剥離を施している。

石匙 (10～13) 縦形と横形の2種がある。10は縦形であるがほぼ全周を調整する。正面には自然面を残し、背面には主要剥離面を大きく残す。打面が残る。12は縦形であるが先端部から側縁を調整する。つまみの作り出しは粗雑である。先端部の形状などから石槍や銚頭などの機能も想定されたが、基部に打面 (自然面) を残し調整されていないので着柄には不向きかと思われた。11、13は横形であるが打面を残し、刃部の調整やつまみの作り出しが粗雑である。

搔器 (14、15) エンドスクレーパーである。下端に鈍角的な刃部を作り出すが15は側縁の一部にも調整剥離が認められる。

石筥 (16、17) 大略撥形を呈する (16は上下逆)。側縁部を中心に調整するが17は粗雑である。側縁の刃部は削器的である。

ピエスエスキーユ (18、19) 上下両端に剥離が見られるが、上下両方向からの打撃によるものと思われ、リングはややつまっている。

**礫石器**

礫器 (20、21) だ円形～円形の自然礫を打ち欠いて片刃の刃部を作り出している。20は鈍い刃部を、21は比較的鋭い刃部を持つ。チョッパー的な機能が想定される。

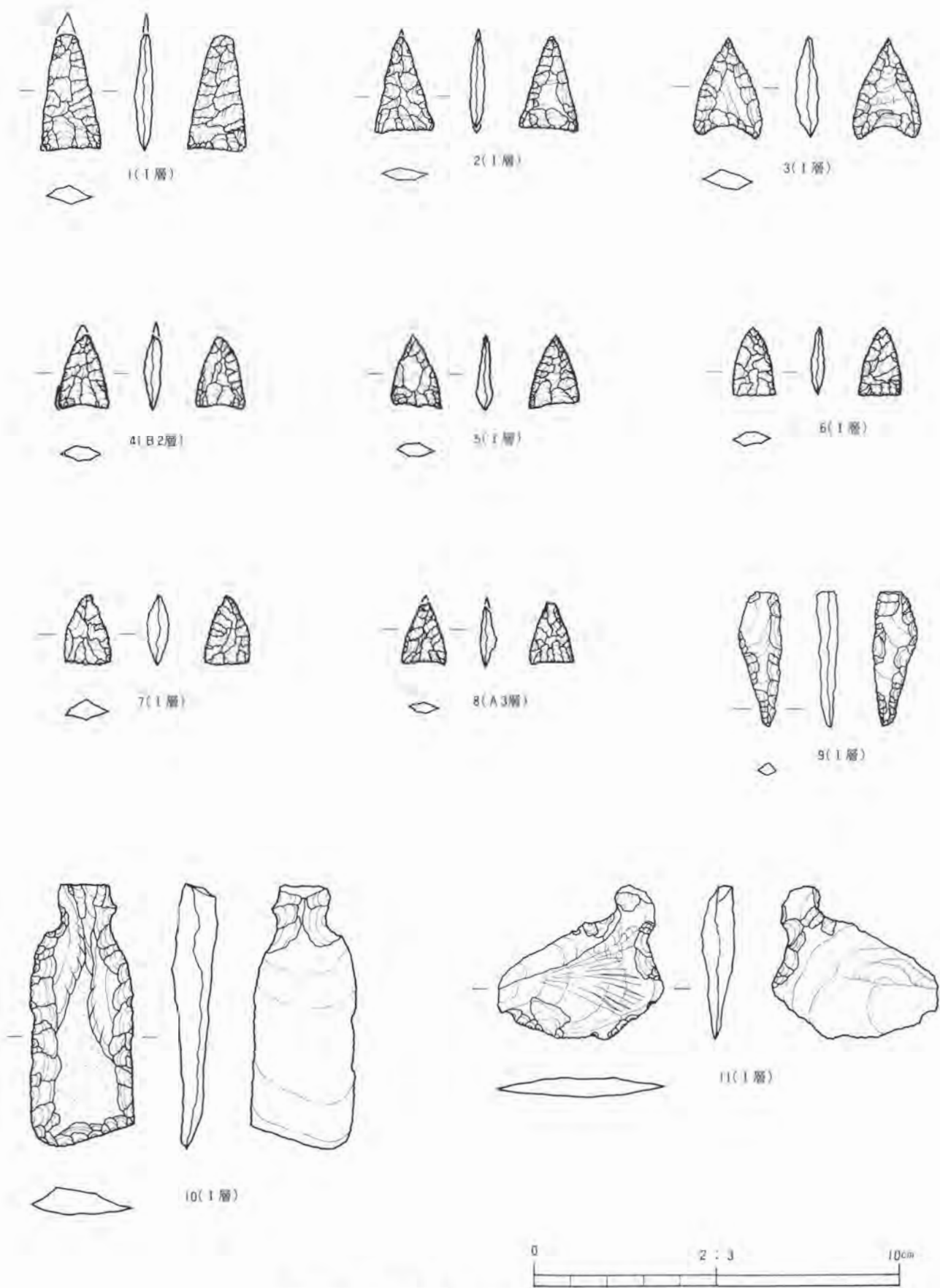
特殊磨石 (27、28) 断面三角形の自然礫の側縁部を使用する石器である。27は上下両側縁を、28は一方の側縁のみを機能磨面 (A面) としている。またこれに隣接する面を調整磨面 (B面) としているが、27には剥離が伴う。機能磨面は敲打磨石と同様であり磨り潰しなどの機能が想定される。

敲石 (22、23) 22は扁平な円礫の側縁の一部を使用し、敲打痕が認められる。23は扁平な円礫の平坦部に敲打痕が認められるがあまり使い込まれていない。

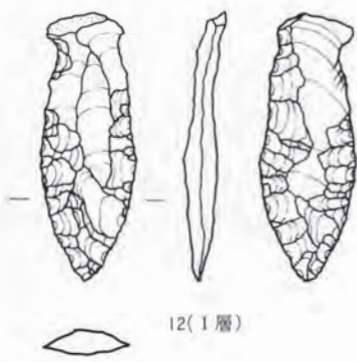
磨石 (25、26) いずれも全面を磨る。25は下面が平坦な磨面となるが側面は面取りをしたような小さな磨面が多数認められる。26はそろばん玉状を呈し上面と下面は平坦な磨面となる。側面の磨面は横方向に磨ったようである。

**石核石器**

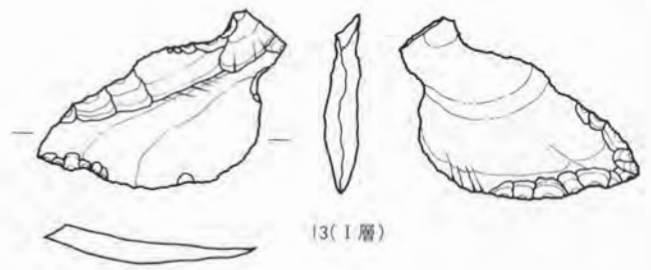
石核 (24) 自然礫を使用し上下両面を打点としている。



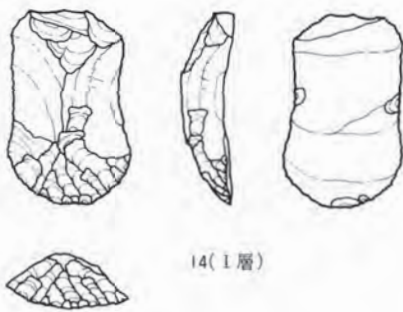
第36図 崎山貝塚第2次調査・出土石器(1)



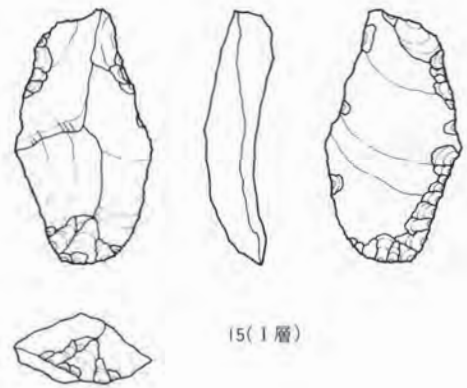
12(1層)



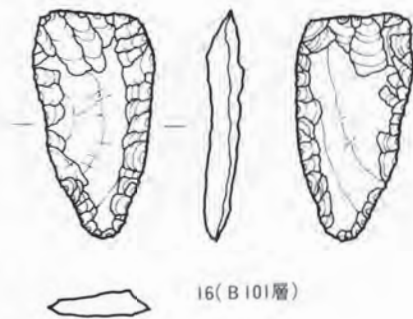
13(1層)



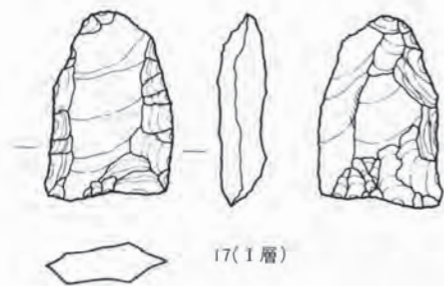
14(1層)



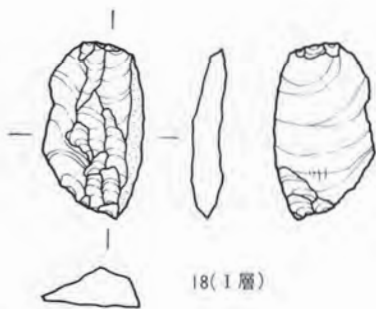
15(1層)



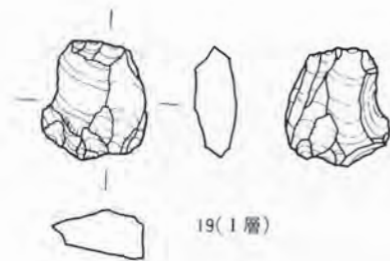
16(B101層)



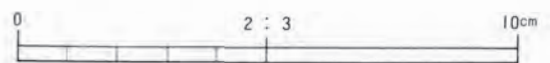
17(1層)



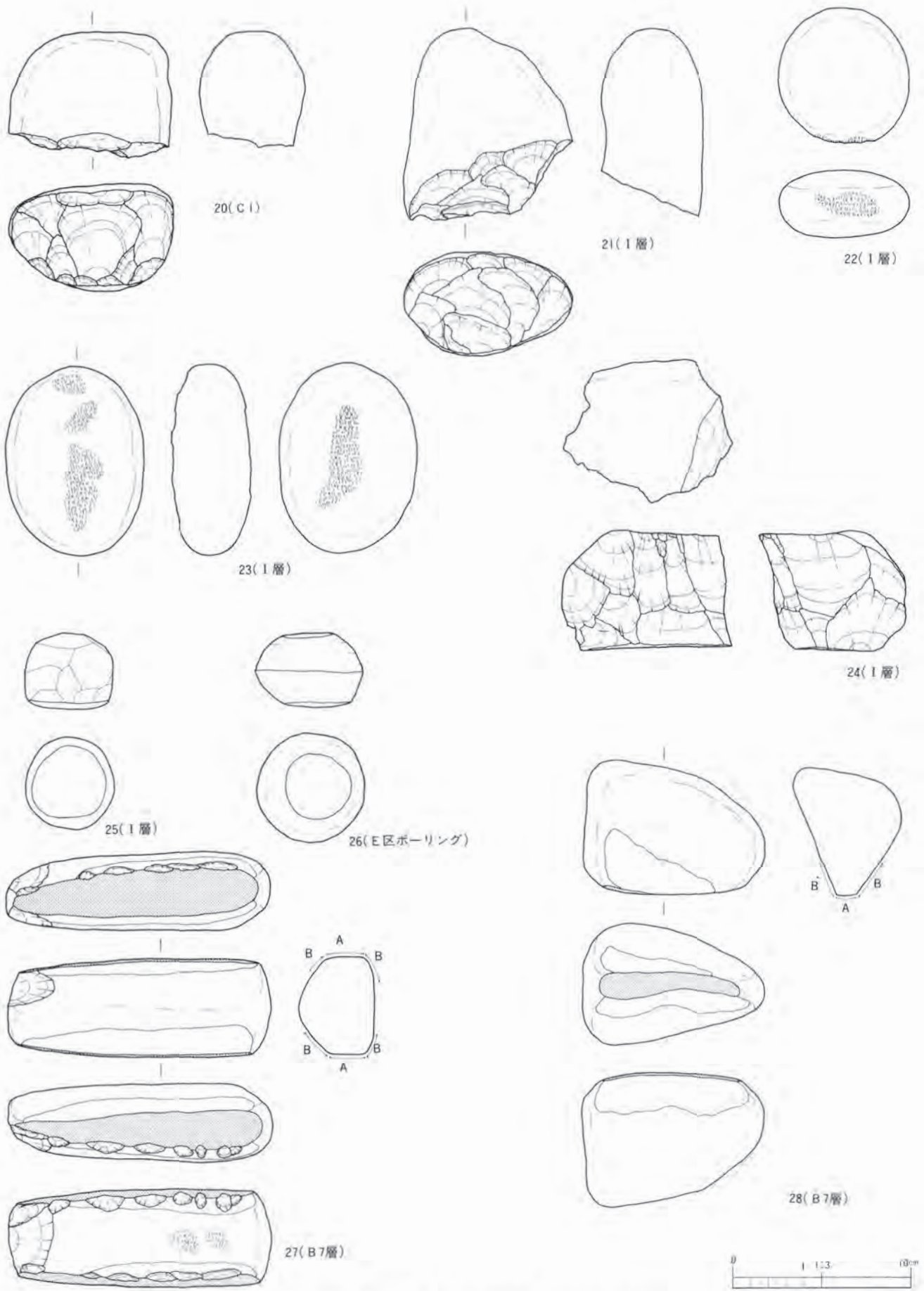
18(1層)



19(1層)



第37図 崎山貝塚第2次調査・出土石器(2)



第38図 崎山貝塚第2次調査・出土石器(3)

## (c) 骨角器類 (39図～第41図) (註1)

骨、角などを加工した製品、未製品および加工痕を有するものを一括した。調査面積の割には比較的多く出土したが表土 (I層) から出土したものが最も多い。また、時間的なものを反映しているためか器種のバラエティーに富んでいるとは言い難いが今までに類例の少ないものも出土している。

**釣針 (1～5)** いずれも鹿角製で5点出土している。湾曲部の形態は基本的にはU字形を呈すると思われるが、なめらかに湾曲するものと角張るものの2種に分類される。1は軸部がやや内傾し、湾曲部が角張りL字形に近い形態をとるものである。軸頂部は有頭状に作り出される。軸部は凹凸が著しく断面形はおよそ八角形を呈する。実測図背面の湾曲部にわずかに海綿体組織が残る。湾曲部～針先部を欠くが軸長6.9cmとやや大形である。2～4は軸部が真直でなめらかに湾曲しU字形を呈するものである。いずれも軸頂部と湾曲部～針先部を欠くが軸部の整形は丁寧で断面形はほぼ円形を呈する。2、3は大形～中形で、実測図背面にわずかに海綿体組織が残る。4は小形の湾曲部片である。5は無鐵の針先部であるが、湾曲部はなめらかでU字形を呈するものと思われる。整形は丁寧で断面形は円形を呈する。

**刺突具類 (6、7、11、12、14、15)** 6は大型獣の四肢骨 (おそらくは中手、中足骨) を打割し側縁を剥離させ成形した後に両端部を整形させ尖らせているが、先端部 (上) の整形がわずかに密である。器体部と基部にわずかに段がつくがこれは整形の有無によって出来たものであろう。基部には少量ではあるがアスファルト状の付着物がみられ、ヤスあるいは鐵のように着柄して使用される器種が想定される。実測図正面が骨幹部外面である。長さは6.3cmを計る。

7は基部だけを残すが、幅1.6cmと比較的大形である。整形は丁寧である。

11は基部から器体部にかけてはゆるやかに細くなり、先端部で一気に鋭くなる。基部には段違いに抉りが入れている。先端部には回転方向につく鈍い擦痕がみられる。あまり固くない対象物に機能したと思われ、錐か骨針 (紐通し) のような器種が想定される。幅は1.1cm、長さは6.7cmである。

12はイノシシの腓骨 (R) を素材とし、遠位端を基部とする。関節部はほとんど加工されていない。幅は1.9cm、長さ10.5cmであるがもとの長さからすれば比較的使い込まれたほうであろう。

14、15は先端部のみを残すものである。15は鳥骨製の刺突具であるが、四分割程度に打割した後に加工するものである。

**骨針 (9、10)** 先端部を尖らせ、基部を穿孔するもので2点出土している。基部の形態が各々やや異なる。9は頂部付近に穿孔し軸部から基部にかけてゆるやかに薄くなる。軸部の整形は丁寧であるが基部は粗い。幅は0.7cmである。10は頂部からやや離れたところに穿孔し、軸部から基部の厚さの変化がないものである。軸部と基部の整形の差はない。幅は0.8cm、長さは6.6cmである。

**ヘラ (16～18)** 16は刃部破片であるが、外面のほぼ全域と内面の下端部にアスファルト状の付着物がみられる。17はシカの脛骨 (L) の近位部を素材とするが、大略縦方向に半截したものの外面を使用する。側縁を剥離させ整形する。刃部の内面にはわずかに擦痕がみられる。幅は3.4cm、長さは10.3cmである。18は刃部破片であるが他のものに比して整形が丁寧すぎるので装飾品の欠損したものである可能性もある。

(註1) 参考文献1986、金子浩昌、忍沢成視『骨角器の研究 編1、II』考古民俗叢書 (22、23) 慶女社

## 加工痕を残す素材

**加工痕を残す素材** (13、19~27) 13、19は棒状の製品の軸部破片である。13は整形が非常に丁寧である。

20~24は擦り切り痕を有するものを一括した。20、22は整形が丁寧であり装飾品等の欠損品である可能性が大きい。21~26は擦り切り痕以外にはほとんど手がつけられていない。21、24はやや大形で、棒状の製品(例えば骨針等)の端部を整形せずに残し、最後に切り離したものと推定されたが類例を知らないので断定はできなかった。25は縦に擦り切るものである。

26は加工痕を有する鹿角片で外面の凸部をつぶすような擦痕がみられる。

27はシカの脛骨(R)の近位部である。先端部が尖り、磨滅して稜がつぶれ光沢がある。明瞭な擦痕は観察されず加工痕なのか自然についたものか判断できなかった。ただし、打割の方法は17と全く同じで、大略縦方向に半截したものの外面部である。

## 装飾品

**装飾品** (8、28~34)

**髪針** (8、28) いずれも鹿角製である。8は基部がやや平坦で完通孔を持たない。また、軸部がやや細味で全体に非常に丁寧に整形する。幅0.7cm、長さ9.1cm、厚さ0.3cmである。28は整形が非常に丁寧に極端に薄い。幅0.8cm、長さ0.8cm、厚さ0.2cmである。形態的には骨針に類似するが、前述のような差異が有り別に分類した。

**垂飾品** (29~31) 29、30はシカの第2、第3手根骨(R)を素材とするもので、中手骨側、橈骨側の両側から穿孔される。29は未製品であるが、刺突具により両側から大まかに孔を穿っている。30はこの後に錐で孔を貫通させ周縁を整形したもののようである。

31はサメ類の推骨を穿孔し、側縁の一部を擦ったものである。

**環状垂飾品?** (32) 鹿角製で環状を呈し、周縁にも抉りを入れる精巧なものである。下端にももう一つすかしが有るようだが、これだけで独立するものかあるいは何らかの装飾品(例えば櫛等)頭部の飾りかは不明である。整形は非常に丁寧である。

**札状装飾品?** (33) 海獣骨を素材とするもので上下端部を欠くが札状を呈する。両側縁の一部に抉りを入れて加飾している。素材の割には丁寧に整形されている。

**叉状角製品** (34) 鹿角の第1角枝(R)の上下を擦り切った後に内部(海綿体組織)をくり抜いている。実測図正面の擦痕は粗く、背面の擦痕は細かいが全体に良く整形され光沢を帯びている。

次にこれらの骨角器類と土器型式の関係について述べる。

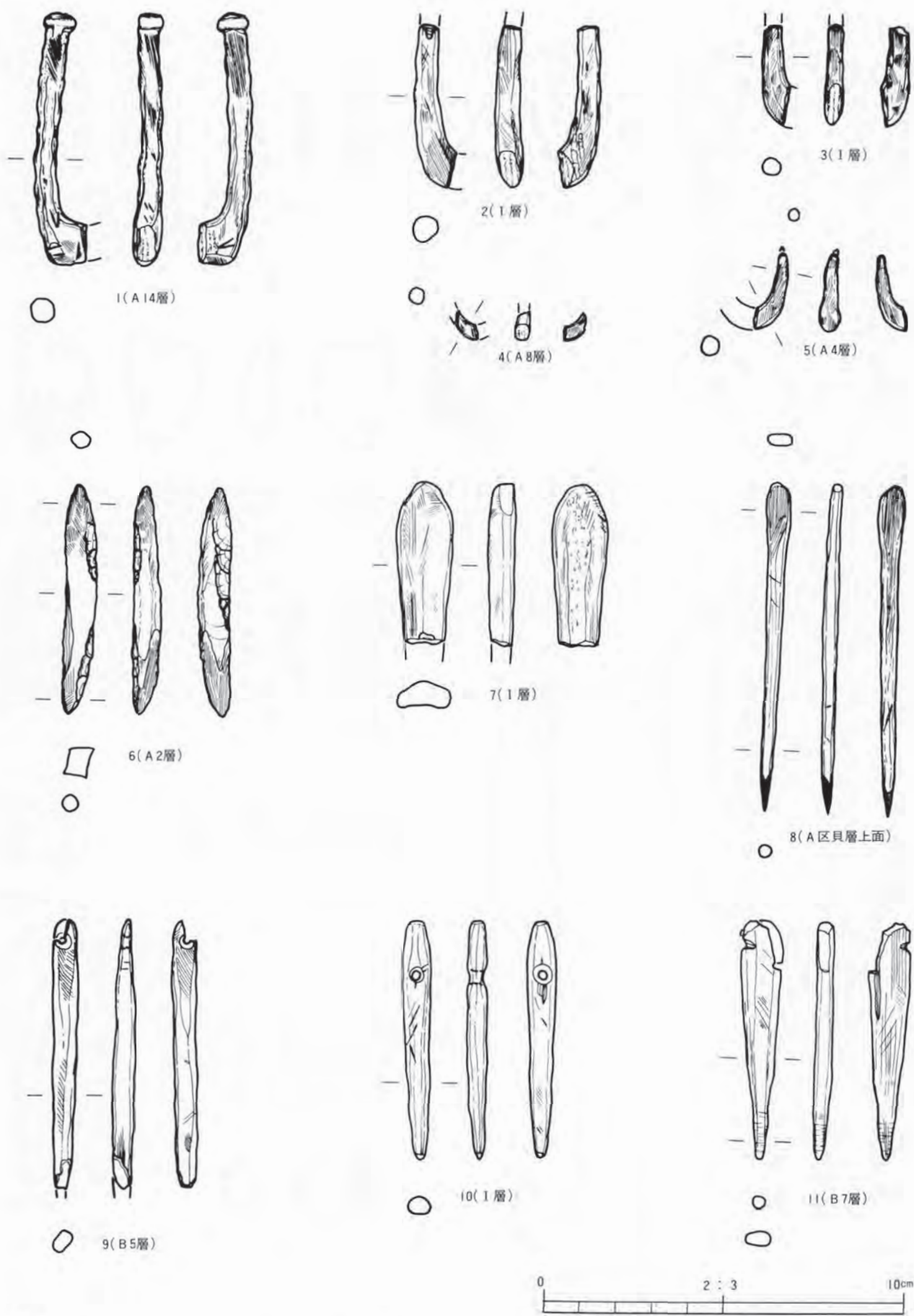
1、4、5、6、20、22、26、32はA2区から出土しており大木5式以降、およそ大木6式~大木7a式に伴うと思われる。33もA2区の西側から出土しておりほぼ同時期かと思われる。34は第32図4とほぼ同じ地点から出土しており大木5式に伴うと思われる。

8、15はA1区とA2区の間でおよそ大木3式~大木6式に伴うと思われる。

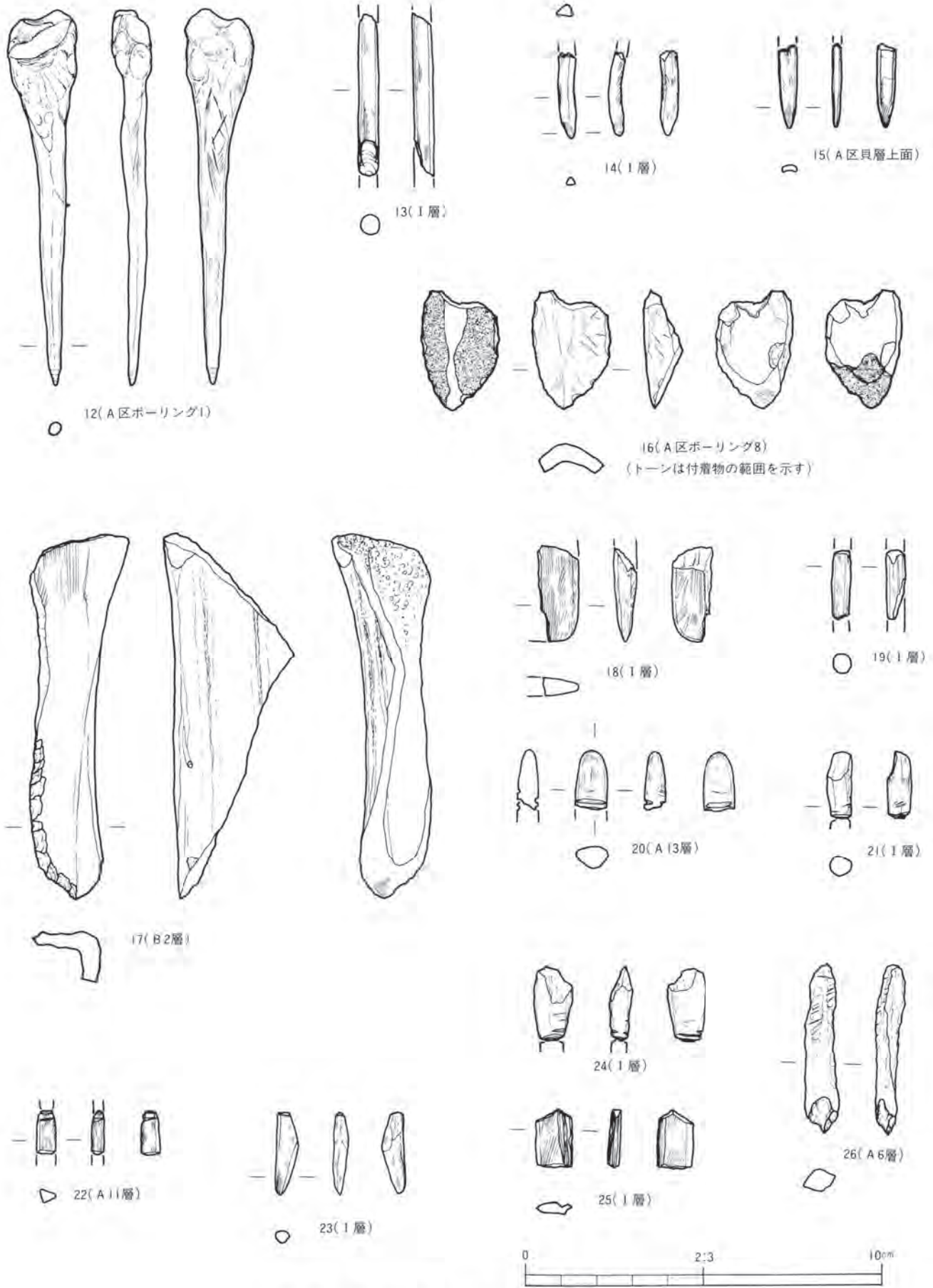
16、28はボーリング坑の下部でおよそ大木3式に、12はボーリング坑の最上部でおよそ大木3式~大木4式にそれぞれ伴うと思われる。

9、11、17、29はB区から出土したもので、11は大木1式もしくは大木2式に、9、29は大木3式に、17は大木3式~大木4式にそれぞれ伴うと思われる。

2、3、7、10、14、18、19、21、23~25、30、31は表土から出土し、時期は不詳である。

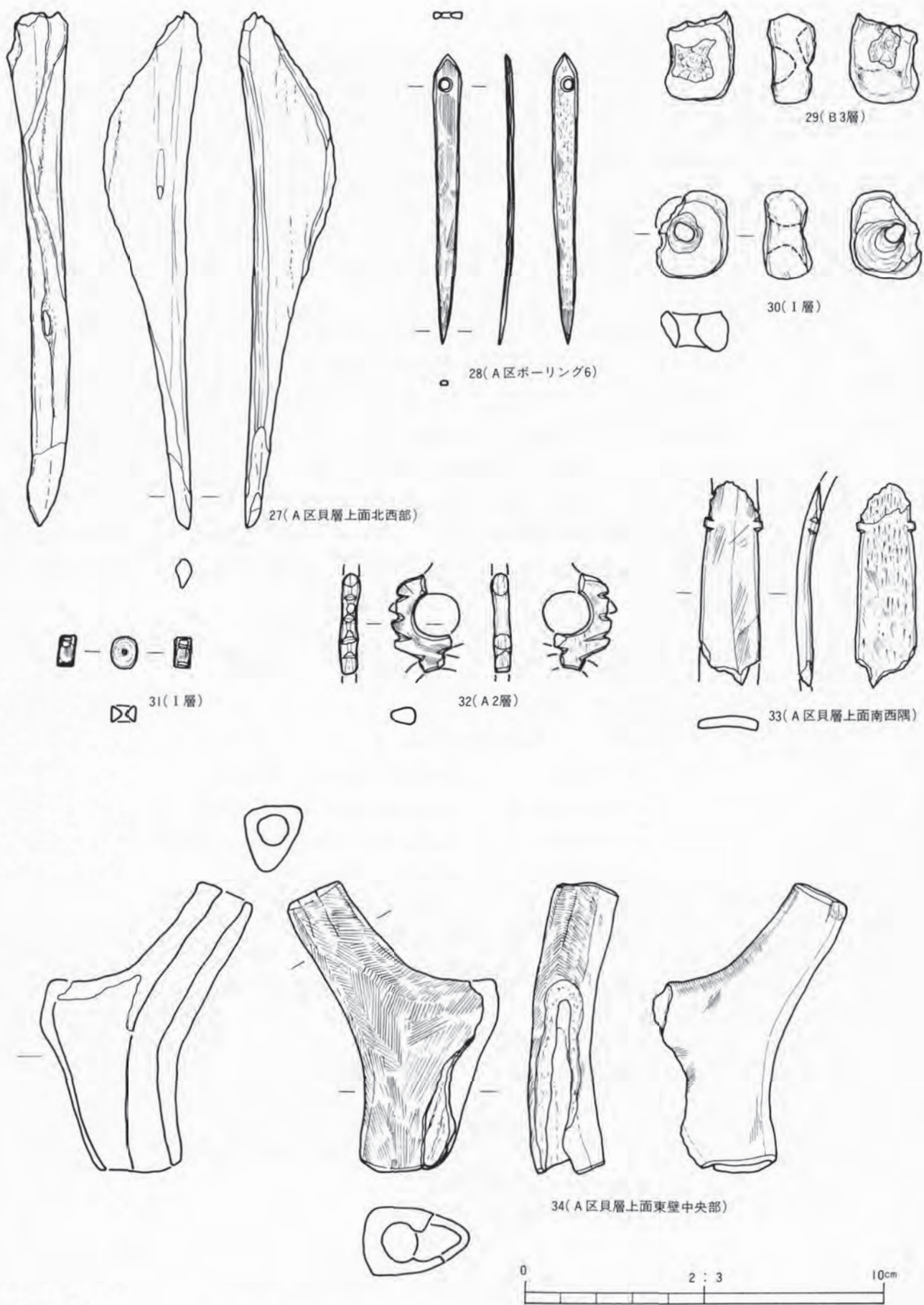


第39図 崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(1)



第40図 崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(2)





第41図 崎山貝塚第2次調査・出土骨角器(3)

#### (4) 自然遺物 (動物遺存体)

今回の調査で出土した自然遺物は動物遺存体のほかに炭化物があるが、細片となり同定不可能であるため動物遺存体を中心に述べる。発掘調査で掘り上げた土は表土をのぞきすべてポリ袋に採集しており、A区とB区は1mmメッシュの篩で水洗選別を終了した。これらのうちポリ袋で2袋分を無作為に抽出し分類した(以下ブロックサンプルと呼ぶ)。動物遺存体はこのブロックサンプル資料と調査中に現場で取り上げた資料、表土を3mmメッシュの篩で選別した資料、表面採集した資料から成り、腹足類、二枚貝類、節足動物、棘皮動物、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類より構成される。これらのうち哺乳類と魚類が主体となるが、なかでも後者の出土量が多い。

種の同定については、魚類を中心に現生種の骨格標本を作成中でありこれらとの比較により行っている。しかし、宮古湾周辺での魚類の現生種は120科278種である(註1)のに対し、標本数は29科55種とかなりの不備がある。哺乳類、鳥類なども標本を作成中であるが、魚類以上に入手が困難であり標本数がなかなか増加しない。また、貝類も標本を採集中であるが分類が終了していない。このような標本の不備に加えて同定能力の不足により同定できなかったものも多く、今後新たな種名が追加されるものと思われるので来年度以降追補してゆきたい。

なお、動物遺存体の同定や分析に関し、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、岩手県立博物館熊谷常正氏、陸前高田市立博物館佐藤正彦氏、東北学院大学学生熊谷賢氏の諸氏には指導、助言をいただき、さらには一部の資料の同定までお願いした。

以下同定できたものの種名を記す。

##### <崎山貝塚第2次調査出土動物遺存体種名一覧>

#### I 軟体動物門 MOLLUSCA

##### i) 腹足綱 GASTROPODA

- 1 クロアワビ *Nordotis discus* (REEVE)
- 2 チュウザラガイ科 *Acmaeidae* gen. et sp. indet.
- 3 タマキビガイ *Littorina brevicula* (PHILIPPI)
- 4 レイシガイ *Reishia bronni* (DUNKER)
- 5 イボニシ *R. clavigera* (KUSTER)
- 6 チヂミボラ *Nucella heyseana* (DUNKER)
- 7 エゾチヂミボラ *N. freycineti* (DESHAYES)
- 8 オオウヨウラクガイ *Ocenebra japonica* (DUNKER)

##### ii) 二枚貝綱 BIVALVIA

- 1 イガイ *Mytilus corsucus* GOULD
- 2 エゾイガイ *Crenomytilus grayanus* DYKER
- 3 ムラサキインコガイ *Septifer (Mytilisepta) virgatus* (WIEGMANN)

#### II 節足動物門 ARTHROPODA

##### i) 蔓脚亜綱 CIRRIPELIA

註1 1979 西野耕一郎 「III 宮古市の海産魚類」 『宮古市の自然』 宮古市

- |                        |          |   |
|------------------------|----------|---|
| 1                      | アカフジツボ   | <i>Balaus tintinnabulum rosa</i> PILSBRY              |
| 2                      | チシマフジツボ  | <i>B. cariosus</i> (PALLAS)                           |
| III 棘皮動物門 ECHINOERMATA |          |   |
| i) 海胆綱 ECHINOIDEA      |          |   |
| 1                      | ハファンウニ   | <i>Hemicentrotus pulcherrimus</i> (A·AGASSIZ)         |
| 2                      | キタムラサキウニ | <i>Strongylocentrotus nudus</i> (A·AGASSIZ)           |
| IV 脊椎動物門 VERTEBRATA    |          |   |
| i) 軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES |          |   |
| 1                      | アオサメ     | <i>Isurus glaucus</i> (MULLER et HENLE)               |
| 2                      | ツノサメ科    | <i>Squalidae</i> gen. et sp. indet.                   |
| ii) 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES  |          |   |
| 1                      | ニシン      | <i>Clupea pallasii</i> CUVIER et VALENCIENNES         |
| 2                      | マイワシ     | <i>Sardinops melanosticta</i> (TEMMINCK et SCHLEGEL)  |
| 3                      | サケ科      | <i>Salmonidae</i> gen. et sp. indet.                  |
| 4                      | マアナゴ     | <i>Conger myriaster</i> (BREVOORT)                    |
| 5                      | マグロ      | <i>Thunnus thynnus</i> (LINNE)                        |
| 6                      | カツオ      | <i>Katsuwonus pelamis</i> (LINNE)                     |
| 7                      | ソウダガツオ   | <i>Auxis</i> sp.                                      |
| 8                      | サバ       | <i>Scomber</i> sp.                                    |
| 9                      | ブリ       | <i>Seriola quinqueradfata</i> TEMMINCK et SCHLEGEL)   |
| 10                     | カンパチ     | <i>S. purpurasens</i> TEMMINCK et SCHLEGEL            |
| 11                     | アジ科      | <i>Carangidae</i> gen. et sp. indet.                  |
| 12                     | スズキ      | <i>Lateolabrax japonicus</i> (CUVIER et VALENCIENNES) |
| 13                     | マダイ      | <i>Pagrus major</i> (TEMMINCK et SCHLEGEL)            |
| 14                     | クロダイ     | <i>Acanthopagrus schlegelii</i> (BLEEKER)             |
| 15                     | ウミタナゴ    | <i>Ditrema temmincki</i> BLEEKER                      |
| 16                     | オキタナゴ    | <i>Neoditrema ransonneti</i> STEINDACHNER             |
| 17                     | カワハギ科    | <i>Monacanthidae</i> gen. et sp. indet.               |
| 18                     | カサゴ科     | <i>Scorpaenidae</i> gen. et sp. indet.                |
| 19                     | ホッケ      | <i>Plurogrammus azonus</i> JORDAN et METZ             |
| 20                     | アイナメ     | <i>Hexagrammos ofakii</i> JORDAN et STARKS            |
| 21                     | カジカ科     | <i>Cottidae</i> gen. et sp. indet.                    |
| 22                     | ヒラメ      | <i>Paralichthys olivacens</i> (TEMMINCK et SCHLEGEL)  |
| 23                     | カレイ科     | <i>Pleuronectidae</i> gen. et sp. indet.              |
| iii) 爬虫綱 REPTILLIA     |          |   |
| 1                      | ヘビ科      | <i>Colubridae</i> gen. et sp. indet.                  |
| iv) 鳥綱 AVES            |          |   |
| 1                      | ミズナギドリ科  | <i>Proaellariidae</i> gen. et sp. indet.              |

2	ワシ・タカ科	Accipitridae gen. et sp. indet.
3	ツグミ亜科	Turdinae gen. et sp. indet.
v) 哺乳綱 MAMMALIA		
1	ニホンザル	Macaca fuscata (BLYTH)
2	ノウサギ	Lepus brachyrus TEMMICK et SCHLEGEL
3	ムササビ	Petaurista leucogenys TEMMICK
4	ネズミ科	Muridae gen. et sp. indet.
5	ツキノワグマ	Selenarctos thibetanus (G·CUVIER)
6	タヌキ	Nycterentes procyonoides GRAY
7	イヌ	Canis familiaris LINNAEUS
8	テン	Martes melampus (WAGNER)
9	オットセイ	Callorhinus ursinus (LINNE)
10	イノシシ	Sus scrofa LINNE
11	シカ	Cervus nippon TEMMINCK
12	イルカ科	Delphinidae gen. et sp. indet.
13	ヒト	Homo sapiens Linnaeus

(a) 貝類 (腹足綱、二枚貝綱)

混貝土層などを構成する基本的な貝類はイガイである。破碎～粉碎されており個体数を算定できた層は極端に少なく、出土量を反映していない。エゾイガイやムラサキインコガイは稀である。腹足綱はチヂミボラ・エゾチヂミボラ・タマキビが代表的な種でA13層、A18層には特に多く含まれていた。他の種は少ないがアワビの出現率が極端に少ないのが意外であった。また、崎山地区の岩礁地帯に多数生息しているクボガイやコシダカガンガラなどは欠落している。

(b) 節足動物、棘皮動物

フジツボ科は混貝土層から微量ではあるが出土している。ウニは各層から少量～微量出土しているがムラサキウニが圧倒的に多い。A1区のボーリング4の下部にはほとんどウニだけで構成される層がみられた。

(c) 魚類 (軟骨魚綱、硬骨魚綱)

サメ目は比較的少ないが、椎骨のタイプから4種くらいに分類できそうである。ニシンは稀である。イワシは当貝塚の主体を成す魚種の一つであり各層を通して最も個体数が多い。マイワシが大半であるが他のイワシも含んでいるものと思われる。1,000 ccあたりの個体数はほぼ0.3～1.0くらいに集中するがA1区ボーリング5で9.50、同6で6.09と他に比して異常とも思える高い値が得られており特筆される。また、イワシの出現率はカツオやマグロなどの大型回遊魚の出現率と必ずしも一致しないのでこれらの食餌とは考えづらく、むしろ当貝塚において貴重な食料として捕食されていたとみるほうが自然であろう。

サケ科は現在の魚獲高に比べるとあまりにも少なすぎる。また、マアナゴ・スズキ・カワハギ科・ホッケ・カジカ科・ヒラメ・カレイ科も稀である。

マグロ類は大型のものと小型のもの2種がある。大型のものは大半がクロマグロであるが、

小型のものは別種なのか若小個体なのか判別できなかった。両者とも少ないながら各層から出土している。表土からの資料には比較的出土量が多いが、大きな骨であるので目につき易いか、別にマグロ類を多く含む層があるのかは不明である。

カツオも当貝塚の主体を成す魚種の一つであるが、出土点数が多い割には個体数に反映されていないようである。ソウダカツオ類としたものは大半がマルソウダと思われる。カツオに比してだいぶ少ない。サバ類は大小2種あり、小型のものは若小個体かと思われる。各層から少量ずつ出土している。

ブリもやや出土量が多いが、特にA17層、A18層に多い。アジ科としたものは小型のものであり、おそらくはマアジなどの若小個体が主体となるようである。カンパチは表土から1点出土している。

マダイも当貝塚の主体を成す魚種の一つであるが、カツオよりは出土点数がだいぶ少ない。クロダイは1点のみである。タイ類としたものは遊離歯、骨瘤、小さな椎骨などである。椎骨はマダイに極めて類似する、タイ類はほとんどの層から出土している。

ウミタナゴ・オキタナゴもわずかずつではあるが出土している。

中型～小型魚のなかで最も重要な魚種はカサゴ科であり混貝土層や魚骨層などの出土魚類のうち最も数が多い。現在貝塚周辺で捕獲されるカサゴ科はソイ類・カサゴ類・メバル類などであるが圧倒的にソイ類が多い。貝塚から出土したカサゴ類は属、種のレベルまで同定できていないのでこれに対応するかどうかは不明である。

アイナメはほとんどの層から出土しているが点数が少ない。春と秋に多く釣れ、カサゴ科よりは一般的な魚種であるが、意外な出土状況であった。また、ホッケは1点のみである。

#### (d) 爬虫類

わずかにヘビ科のみを同定したが極めて少ない。

#### (e) 鳥類

鳥類は極めて少なく同定できたものはわずかに3科のみである。ただ、この中でミズナギドリ科が目される。現在、崎山の日出島ではオオミズナギドリが繁殖しており、これとの関係も十分考えられる。

#### (f) 哺乳類

最も多いのはシカ・イノシシであるが前者がやや多い。B3層とB4層は獣骨を多く含む層で、比較的完存率の高いシカ下顎骨などが多く出土している。

ウサギ・オットセイは少ないが複数の層から出土している。ムササビ・タヌキ・テンは少ない。ネズミ科はわずかに出土しているが当時補食されたものかどうかは不明である。サル・クマ・イヌ・イルカ科、ヒトは稀で、表土からわずかな量が出土しているにすぎない。

以上であるが、当貝塚の自然遺物は魚類と哺乳類を中心としたものであり、イワシ等の小魚、カサゴ科、マダイ等の岩礁につく魚、カツオ・マグロ・ブリなどの大型回遊魚の三者にシカ・イノシシを加えたものが基本的な構成要素となる点が特徴として指摘されるが、極めて単純な構成であると言える。

解 名	分析した主量(cc)	アザメ科				ツオカ				ソバ類				フ				マ				イ					
		遊鯿		鰭鱈		前上顎骨		方骨		舌顎骨		肩中骨		椎骨		前上顎骨		主上顎骨		方骨			舌顎骨		上舌骨		
		遊鯿	鰭鱈	前上顎骨	方骨	舌顎骨	肩中骨	椎骨	前上顎骨	主上顎骨	方骨	舌顎骨	肩中骨	椎骨	前上顎骨	主上顎骨	方骨	舌顎骨	上舌骨								
A 1	8,450	1	156	1									11	5	1												
A 2	7,400		4	1	666	1	1						10	1	4						1				1		1
A 3	9,800		1	147	1	1							1	13	9										1		
A 3下部	9,170		2	215	1	1	1						6	1	6										2		2
A 4	8,700		1	152	1	1	1						8	3	3										1		
A 5	2,980			80									4	2	2										2		
A 6	9,850		2	176									1												1		1
A 7	12,300		1	227									1	20	4										1		1
A 8	13,400		1	2	301								1												2		1
A 9	11,500			491	1	1	1						15	1	5										3		5
A 10	1,400			67									2												1		
A 11	7,600			128									6	4	4												1
A 12	4,850			207									2	1	1										1		
A 13	11,770		1	3	360	1	1						2	9	2	13									3		1
A 14	11,400		3	268									1	21	5										2		
A 15	4,150		2	81									4	1	4												
A 16	9,130			347									2	5	2	6									1		
A 16下部	4,050		1	141									1	7	7										1		
A 17	5,700			229									5	3	3										1		
A 18	8,750		4	371									4	5	2	2									2		6

第3表 A2区ブロックサンプル出土魚類(1)



層名	分析した土量(cc)	サメ目	イワシ科	マダロ類		マダロ類(小)	カワツオ											ソウダカツオ類						サバ類	アブリ	アシズキ科	マダ						クロダ	イ類						
				椎骨	椎骨		椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨				椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨			椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	
表	土 5,800	1	1	150	1	1										16																								
A 1 0 1	8,700	1	2	106	2	1										12																								
A 1 0 1 0 2	9,600					110										10																								
A 1 0 2	8,300	2	174							1	1					19																								
A 1 0 3	7,600	1	320						1	1						35																								
A 1 0 4	4,620															20																								
Bor. 1	3,900	1	267	2												17																								
Bor. 2	4,250			77	1											18																								
Bor. 3	4,000			72	1											39																								
Bor. 4	4,000	1	240													18																								
Bor. 5	4,000			1,857	1											30																								
Bor. 6	3,450			1,039																																				
Bor. 7	4,000			244	1																																			
Bor. 8	4,050	2	139													4																								
Bor. 9	4,800			49												1																								
Bor. 10	3,950			4																																				
Bor. 11	2,550			7																																				

第 5 表 A 1 区ブロックサンプル出土自然遺物(1)







層名	イノシシ		シ						カ			
	下顎骨	肩甲骨	上腕骨	遊離歯	下顎骨	肩甲骨	手根骨	大腿骨	脛骨	距骨	踵骨	中足骨
B 1												
B 2	①				①				①			
B 2・3												
B 3				①	①							
B 3・4												
B 4	①											
B 5			①									
B 5下部												
B 6												
B 6下部												①
B 7												
B 8												

○印の数値は現場で取り上げたもので  
印の無いものはブロックサンプル中の  
資料

層名	ウサギ		ムササビ		ネズミ科		タヌキ			テン		イノシシ		シ											カ		へビ科												
	大腿骨	上顎切歯	下顎骨	寛骨	椎骨	下顎骨	環骨	頭骨	尺骨	手根骨	中手骨	大腿骨	脛骨	踵骨	中足骨	基節骨	中節骨	遊離歯	角片	椎骨	椎骨	尺骨	手根骨	中手骨	大腿骨	脛骨	踵骨	中足骨	基節骨	中節骨	遊離歯	角片	椎骨	椎骨					
A 1									1																														
A 2		1																1																					
A 3			1										①																										
A 3下部																																							
A 4											1																												
A 5																																							
A 6																																							
A 7																																							
A 8																																							
A 9																																							
A 10																																							
A 11	1																																						
A 12																																							
A 13	1																																						
A 14																																							
A 15																																							
A 16																																							
A 16下部																																							
A 17																																							
A 18																																							
その他																																							

第 8 表 A 2 区、B 区出土獣骨



種名	層名																				
	A 1	A 2	A 3	A 3下部	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	A 9	A 10	A 11	A 12	A 13	A 14	A 15	A 16	A 16下部	A 17	A 18	
クロアワビ				0.11					0.11												
チュウザラガイ科						0.67				0.09											
タマキビガイ		0.14	0.20	0.11	0.23	1.01	0.10		0.07	0.09		0.13		0.93			0.11	0.25	0.18	0.57	
レイシガキ			0.10	0.11									0.21	0.08							
イボシン			0.20									0.13									
チヂミボラ		0.14	0.10	0.11	0.11	0.34		0.08	0.22	0.09				0.34	0.09		0.11	0.25		0.11	
エゾチヂミボラ		0.14	0.20	0.11	0.23	0.67	0.10	0.57	0.07	0.09				0.34	0.26		0.11	0.25	1.05	0.34	
オオウヨウラクガイ										0.09											
イガイ		0.14	0.20				0.10			0.17		0.13									
エゾイガイ										0.09											
ムラサキインコガイ			0.10		0.11																
アオザメ														0.08							
ツノザメ科					0.11																
サメ目	0.12	0.14	0.10	0.11			0.10	0.08	0.07	0.09				0.08	0.09	0.24		0.25		0.11	
ニシン		0.14												0.08							
イワシ	0.47	1.89	0.31	0.55	0.46	0.67	0.41	0.41	0.52	0.87	1.43	0.39	1.03	0.68	0.53	0.48	0.77	0.74	0.88	0.91	
ニシン科		0.14																			
サケ科	0.12	0.14	0.10	0.11						0.09							0.11	0.25	0.18	0.11	
マアナゴ					0.11											0.09					
マグロ類		0.14	0.10	0.11	0.11		0.10		0.07	0.09		0.13			0.09						
マグロ類(小)					0.11		0.10	0.08													
カツオ	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11	0.67	0.10	0.16	0.15	0.09	0.71	0.13	0.21	0.17	0.09	0.24	0.22	0.25	0.18	0.11	
ソウダカツオ類	0.12			0.11						0.09					0.09	0.24					
サバ類	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11	0.34		0.08	0.07	0.09		0.13	0.21	0.08	0.09		0.11	0.25	0.18	0.11	
ブリ	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11	0.34	0.10	0.08		0.09	0.71		0.21	0.08	0.09		0.22	0.25	0.18	0.23	
アジ科		0.14	0.10	0.11			0.10	0.08	0.07	0.09				0.08					0.18	0.11	
スズキ														0.08							
スズキ科				0.11																	
マダイ	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11		0.10	0.08	0.15	0.09		0.13		0.08	0.09	0.24	0.22	0.25	0.18		
タイ類	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11	0.34	0.10	0.08	0.07	0.09	0.71	0.13	0.21	0.08	0.09	0.24	0.22	0.25	0.18	0.11	
ウミタナゴ																		0.11			
オキタナゴ							0.10			0.09				0.08			0.11		0.18		
カサゴ科	0.24	0.41	0.10	0.22	0.34	1.01	0.20	0.08	0.15	0.17	0.71	0.13	0.21	0.42	0.09		0.11	0.25	0.70	0.69	
ホッケ						0.34															
アイナメ	0.12	0.14	0.10	0.11	0.11	0.34	0.10	0.08	0.07	0.09	0.71	0.13	0.21	0.08	0.09	0.24	0.11	0.25	0.18	0.11	
アイナメ科																			0.25		
ヒラメ																	0.11	0.25			
ヘビ科									0.11	0.09											
ウサギ												0.13		0.08							
ムササビ		0.14																			
ネズミ科			0.10					0.08		0.09											
タヌキ																					0.11
テン					0.11																
イノシシ	0.12									0.09											
シカ	0.12	0.14					0.10		0.11	0.09				0.08							

第10表 A 2区ブロックサンプル1,000ccあたりの個体数

種名	層名																
	サ ト	A 1 0 1	A 101,102	A 1 0 2	A 1 0 3	A 1 0 4	Bor. 1	Bor. 2	Bor. 3	Bor. 4	Bor. 5	Bor. 6	Bor. 7	Bor. 8	Bor. 9	Bor. 10	Bor. 11
サメ目	0.17	0.11		0.12	0.13		0.26			0.25				0.25			
イワシ	0.52	0.34	0.31	0.48	0.92	1.08	1.79	0.47	3.75	1.25	9.50	6.09	1.25	0.99	0.21	0.25	0.39
サケ科	0.17	0.11					0.26	0.24	0.25				0.25				
マグロ類					0.13					0.25	0.25	0.25	0.29	0.25		0.21	
マグロ類(小)	0.17	0.11			0.13	0.22							0.29		0.25		
カツオ	0.17	0.11	0.10	0.12	0.26	0.22	0.25	0.24	0.75	0.25	0.50	0.29	0.25	0.25	0.21		
ソウダガツオ類	0.17	0.11	0.10		0.13	0.22				0.25		0.29					
サバ類	0.17	0.11	0.10	0.12	0.13	0.22	0.25	0.24	0.25	0.25	0.25						
ブリ	0.17	0.11				0.22				0.25	0.25	0.25	0.29				
アジ科	0.17		0.10		0.13												
スズキ		0.11															
マダイ	0.17	0.11		0.12	0.13	0.22	0.26	0.24	0.25	0.25	0.25						
クロダイ				0.12													
タイ類	0.17	0.11	0.10	0.12	0.13	0.22	0.26	0.24	0.25	0.25	0.25	0.29	0.25	0.25	0.21		0.39
ウミタナゴ		0.11															
オキタナゴ						0.22											
カワハギ科					0.13	0.22	0.26										
カサゴ科	0.17	0.23	0.10	0.12	0.26	0.22	0.26	0.24	0.25	0.25	0.25	0.58	0.25				
カジカ科				0.12						0.25							
アイナメ	0.17	0.11	0.10	0.12	0.13	0.22	0.26	0.24	0.25	0.25	0.25	0.29					0.39
ヘビ科							0.26										
オットセイ	0.17					0.22		0.24									
イノシシ										0.25	0.25		0.25				
シカ				0.12	0.13												
種名	層名																
	B 1	B 2	B 2・3	B 3	B 3・4	B 4	B 5	B 5下部	B 6	B 6下部	B 7	B 8	A C1.1	A C1.2	A C1.3	A C1.4	
サメ目	0.12					0.13	0.13	0.10	0.09	0.16	0.11	0.13		0.19	0.19		
イワシ	0.47	0.56	0.71	0.98	1.23	1.00	1.70	1.34	1.26	0.47	0.45	0.25		0.37	0.34	0.58	0.33
サケ科											0.11			0.19	0.17	0.14	
マアナゴ		0.11															
マグロ類															0.17		0.17
マグロ類(小)						0.13											
カツオ	0.12	0.11	0.36	0.20	0.13	0.13	0.13	0.10	0.09		0.11			0.19	0.17	0.14	0.17
ソウダガツオ類		0.11					0.13							0.19		0.14	0.17
サバ類	0.12	0.11		0.20	0.25	0.13	0.13	0.10	0.09		0.11			0.19		0.14	0.17
ブリ						0.13											
アジ科														0.19	0.17		
マダイ	0.12	0.11								0.16	0.11	0.13		0.19	0.17	0.14	0.17
タイ類	0.12	0.11		0.20	0.25	0.13	0.13	0.10	0.09	0.16	0.11	0.13		0.19	0.17	0.14	0.17
ウミタナゴ								0.10									
カワハギ科								0.10								0.14	
カサゴ科	0.12	0.11				0.13		0.10	0.09		0.11	0.13		0.19		0.14	0.17
アイナメ		0.11	0.36	0.20	0.25		0.13	0.10	0.09	0.16	0.11			0.19	0.17	0.14	0.17
ミズナギドリ科																0.14	
イノシシ		0.11		0.20		0.13	0.13										
シカ	0.12	0.11		0.20		0.13		0.10	0.09	0.16				0.19			

第11表 A区・B区・A区クリーニングブロックサンプル1,000ccあたりの個体数

## IV 調査のまとめ

### 白石遺跡第2次調査

第2次調査区は、白石遺跡のほぼ中心部に相当し、狭い面積の割には多くの遺構が密集し、重複していた。これらの新旧関係を模式化すると次のようになる。(Hは竪穴住居跡、Pは土壇跡、FPは土器埋設炉とする)



これらは比較的短期間のうちに構築～廃棄がくり返されたものと思われる。つまり、第1号竪穴住居跡が埋没しきらないうちに第5号竪穴住居跡が構築され、また、第5号竪穴住居跡が埋没しきらないうちに第2号竪穴住居跡が構築されている。同様に、第3号竪穴住居跡の埋土中から第4号土壇跡が握り込まれており、更には第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡の最上面は連続した浅い凹みとなっており同一の層(A層)に覆われている。

これらの遺構からの伴出遺物は主に大木10式中葉～後葉に位置づけられるが、第1号竪穴住居跡は丹羽の大木10式第II段階～第III段階、観音堂遺跡第III群3類に相当し、第2号、第5号竪穴住居跡、第6号炉は丹羽の大木10式第III段階、観音堂遺跡第III群4類にほぼ相当する。土器型式からも短期間のうちに構築～廃棄がくり返されたことが裏づけられている。

竪穴住居跡は複式炉を持つものが多いが各々形態を異にし、各部位(I部～III部)の組み合わせにより次のように分類される。

- |            |                 |            |               |         |
|------------|-----------------|------------|---------------|---------|
| <b>A 類</b> | <I部> 日字形石囲炉+    | <II部> 掘込炉+ | <III部> 前庭部・立石 | No.1 H  |
| <b>B1類</b> | <I部> 正立土器埋設炉+   | <II部> 石囲炉+ | <III部> 前庭部・立石 | No.3 H  |
| <b>B2類</b> | <I部> 横位土器埋設石囲炉+ | <II部> 地床炉+ | <III部> 立石のみ   | No.2 H  |
| <b>C 類</b> | <I部?>           | 斜位土器埋設炉    |               | No.6 FP |

A類は石組複式炉に相当するが、II部に石組が成されていない。B類は土器埋設複式炉に相当するが、B1類はかなり省略されたもの、B2類はやや変容したものである。C類は斜位土器埋設複式炉に相当し、都南村湯沢遺跡などで多く検出されている。重複関係による推移は、

<第II～III段階>      <第III段階>

A 類→B1類→B2類・C 類      (B2類とC類は直接重複せず新旧関係不明)となる。A類とB1類は別系統のものであり、他遺跡の検出例から本来は同一型式内で共伴していた可能性も考えられる。しかし、B1類からB2類、あるいはC類への推移は複式炉自体の衰退・変容にかかわるもので、ほぼ大木10式第III段階のうちに複式炉が消滅して行く過程を表わしているものと思われる。また、A類、B類のIII部には三角柱状の立石が伴い、いずれも炉の南西部に埋設される。この形態が本遺跡の複式炉を特徴づけており他にあまり例をみないものとなっている。おそらくこの立石はIII部の機能に強く結びついているものと思われる。

土壇は6基検出したが、大半は断面形がピーカー状・フラスコ状を呈するものである。竪穴

住居の内部に検出したものと外部に検出したものの2種がある。第6号土坑跡は前述したように第1号竪穴住居跡の旧期に伴うものであり、新期が構築する際に埋め戻されている。第5号土坑跡も第4号竪穴住居跡に伴うものであるが、使用途中に中段まで埋め戻され、地床炉として再利用されている。この2例は住居の床面に伴う屋内の貯蔵形態とみられる。第1号～第3号土坑跡は住居の外部に検出したもので、3基中2例の底面に柱穴状の小ピットが伴う。これは土坑に上屋をかけたためと思われ、屋外での貯蔵形態と思われる。昭和55年度に調査を行った金浜館では縄文時代前期～中期のフラスコ状ピットを47基検出しており、住居跡を伴わない土坑域を形成していた。白石遺跡のフラスコ状（ピーカー状）ピットは住居跡とほぼ同じ年代であると思われ、金浜館とは異った様相を呈するが、具体的にどのような空間利用が行われているのか今後の調査により解明してゆく必要がある。

最後に、第4号土坑跡は大略だ円形を呈する土坑で、かなり大きな扁平礫が伴う。土壌の分析を行っていないので明確ではないが、形態等から墓坑であると思われる。葬法としては北西を頭位とした抱岩葬（屈葬）が想定される。

### 崎山貝塚第2次調査

本年度の調査は、貝塚の主体を成す貝層のひとつと思われる地点を調査したが、ほぼ縄文時代前期～中期初頭に伴うものかと思われる。また、これに後続する層として大木7b式の遺物包含層を検出している。貝層は混貝土層・魚骨層・魚骨ブロック・灰ブロック・ウニ層などで構成されるが、純貝層は検出されなかった。動物遺存体は魚類・哺乳類を主体とするが、同定された種が多かった割には出土点数や個体数の多い種にかたよが見られる。前述したように、基本的には(A)イワシ、(B)カサゴ科・マダイ、(C)カツオ・マグロ・ブリ、(D)シカ・イノシシの4者に大別されそうである。

(A) イワシは各層を通して最も個体数が多いが、これに伴ってアジ科やサバ類などの若干個体がみられ、おそらくは同様な漁法で捕獲されたものと思われる。出土する個体数が多いのは1個体あたりのカロリーが少ないため当然の結果であるとも言えるが、当時安定した供給が絶えず成されていたかどうかはやや疑問である。また、検出された部位は椎骨が圧倒的であり頭部を構成する骨は全くみられないのも興味深い。

(B) カサゴ科は最も重要な魚種であろうと思われる。崎山地区の現生種はソイ類の多いことは前述したが、クロソイとゴマソイが特に多く、春から秋の間夜釣りで捕獲される。貝塚から出土したカサゴ科は種のレベルまで同定できていないのでこれとの比較はできないが、同じく現在も夜釣りで捕獲されるマアナゴも同定されており、このような漁法も一考の価値がありそうである。また、現在崎山地区で最も一般的な魚種であるアイナメが比較的少ないのが意外であった。これらの魚種は水温の下る冬期間は全く釣れなくなる。

また、マダイやクロダイは現在貝塚周辺に全く生息していないが、特にマダイの出土量がやや多く、海流や海水温度などの環境が現在とはかなり異なるものと思われる。

(C) カツオやマグロなどの大型回遊魚も当貝塚の重要な魚種である。これらは春から夏にかけて三陸沿岸を北上し、秋に南下すると言われている。かつて宮古周辺では、建網や刺網などのマグロ漁が行われていたが、現在はほとんどすたれてしまっている。貝塚から出土した骨



角器にはやや大型の釣針やヤス状の刺突具などが若干みられたが、具体的にどのような漁法と結びつくのかは現段階では全く不明である。

(D) 哺乳類はシカ・イノシシが圧倒的に多い。他のものは稀であるがウサギがやや多い。

今後はこれらの動物をいつ、どのような方法で捕獲していたのかを探ることが一つの課題となる。

出土した遺物の中で最も注目されるのは骨角器であろう。縄文時代前期～中期初頭に伴うものが主体を成すためややバラエティーに欠ける感もあるが、一応ひとつおりの器種は揃っている。特に装飾品類には見るべきものがあると思う。器種により複類の形態が出土しているが、型式差や機能による差異などの細部への検討は不十分である。資料の蓄積を待ち、他地域との比較などを行うなどして明らかにしてゆく必要がある。

本来、土器・石器・骨角器などの道具類に動物遺存体を総合し、各層の特徴を導き出せるのが貝塚の特殊性かと思われるが、残念ながら混貝土層などからは土器・石器が少量しか出土していないので土器片から各層のおおまかな時期を想定するに留まってしまった。また、石器は第1次調査に比して、礫器・特殊磨石・凹石などの器種が少ない、あるいは欠落している。

今後の調査は、これらの遺物を残した人々の集落構成を把握することが大きな課題となる。また、ボーリング調査などを伴用して未知の貝層の分布状況を把握することとしたい。

参考引用文献（例言および本文中に記述したものは除く）

- 岡村道雄 1982 『里浜貝塚Ⅰ』 東北歴史資料館資料集5  
岡村道雄 1985 『里浜貝塚Ⅳ』 東北歴史資料館資料集13  
草間俊一・金子浩昌 1971 『貝鳥貝塚』 岩手県文化財愛護協会  
草間俊一ほか 1974 『崎山弁天遺跡』 大槌町教育委員会  
熊谷常正・小田野哲憲・高橋信雄 1987 『根井貝塚発掘調査報告書』 岩手県立博物館  
佐藤正彦 1987 『中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅲ』 陸前高田市教育委員会  
鈴木優子ほか 1980 「高畑遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 岩手県教育委員会  
高橋文夫ほか 1978 『都南村・湯沢遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集  
武田将男 1985 『金浜館』 宮古市埋蔵文化財調査報告書7  
中村良幸 1982 「複式炉について」 『考古風土記・第7号』 鈴木克彦  
中村良幸 1986 『観音堂遺跡・第1次～6次発掘調査報告書』 大迫町埋蔵文化財報告第11集  
丹羽茂 1981 「大木式土器」 『縄文文化の研究・第4巻』 雄山閣  
目黒吉明 1982 「住居跡の炉」 『縄文文化の研究・第8巻』 雄山閣

## IV 付 章 (資料紹介)

ここではかつて中嶋隆氏により崎山貝塚から採集された資料のうち骨角器類の一部を紹介する。これらの大半は貝塚の南斜面、特に今回の調査区付近から採集されたとのことである。また、第72図版等に示したもののうちマグロ棘などは明瞭な使用痕がみられないので割愛した。

釣針、ヤス状刺突具、刺突具類、ヘラ、磨製刃器、装飾品類、加工痕を残す素材から構成される。

### 生産用具

**釣針 (1)** 鹿角製の釣針で、軸頂部と針先部を欠く湾曲部付近の破片である。軸部は真直でなめらかに湾曲しU字形を呈する。前述したものの断面はおよそ円形であったのに対し、これは隅丸方形を呈する。

**ヤス状刺突具 (6)** シカの中手、中足骨を縦方向に半截したものを素材とする。基部のみを残すが端部にアスファルト状の付着物がみられる。

**刺突具類 (2~5)** 2、3、5は大型獣の四肢骨を素材とする。一方を尖らせて機能部としており擦痕が集中する。3は小形の製品で完形品である。基部は丸く整形されている。幅1.3cm、長さ5.9cmである。

4は大型の鳥(アホウドリか?)の管状骨を素材とする。一方の端部を斜めに削り落とし機能部とする。

**ヘラ (7、8)** 7はシカの脛骨(R)の近位部を素材とする。先端部のみを使用するもので擦痕が集中する。前述したものとは分割の方法を異にし、大略横方向に半截したものの前面を使用する。8はシカの中手骨を縦方向に半截したものを素材とする。基部を欠くためどちらの端部を残すか不明である。

**磨製刃器 (9)** 雄イノシシの左下顎犬歯舌側のエナメル質部を素材とする所謂刃斧である。両端を入念に整形し、同様な刃部を作り出している。整形の若干の粗密により犬歯の尖端部(下)を機能刃部とした。エナメル質側のカーブに合わせて蛤刀形とするため象牙質部を入念に整形している。かなり大きな個体の犬歯を利用したものと思われる。幅2.2cm、長さ5.5cmである。

### 装飾品類

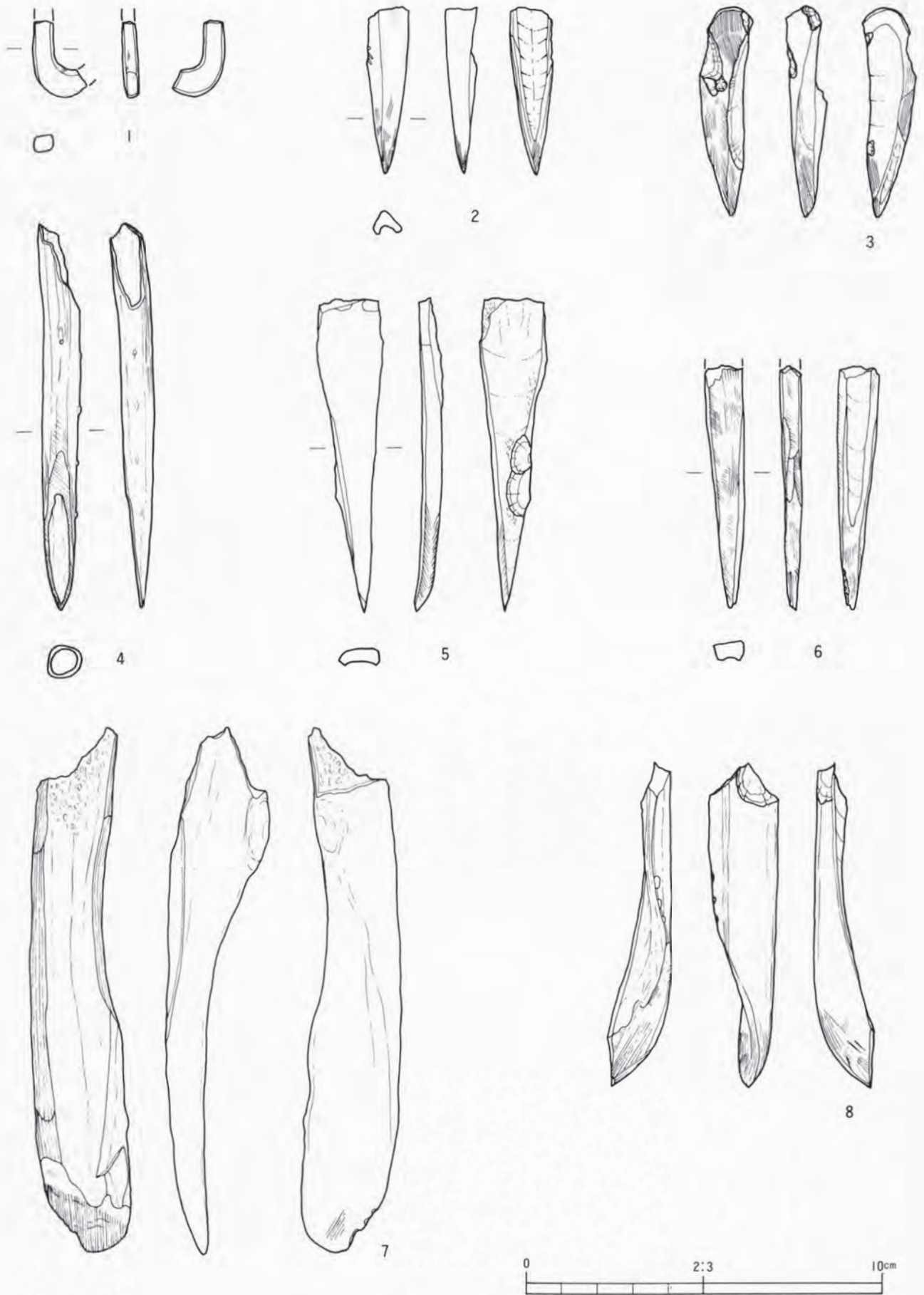
**装飾品類 (10~14)**

**垂飾品 (11~14)** 11は不定形であるが環状を呈し入念に整形されたものである。鹿角製かと思われる。12はイノシシの切歯に穿孔するものである。13はマタイの上後頭骨を素材とするが、周縁を研磨し整形している。端部に穿孔するが貫通はしていない未製品である。14はイヌの犬歯に穿孔するものであるが貫通していない。

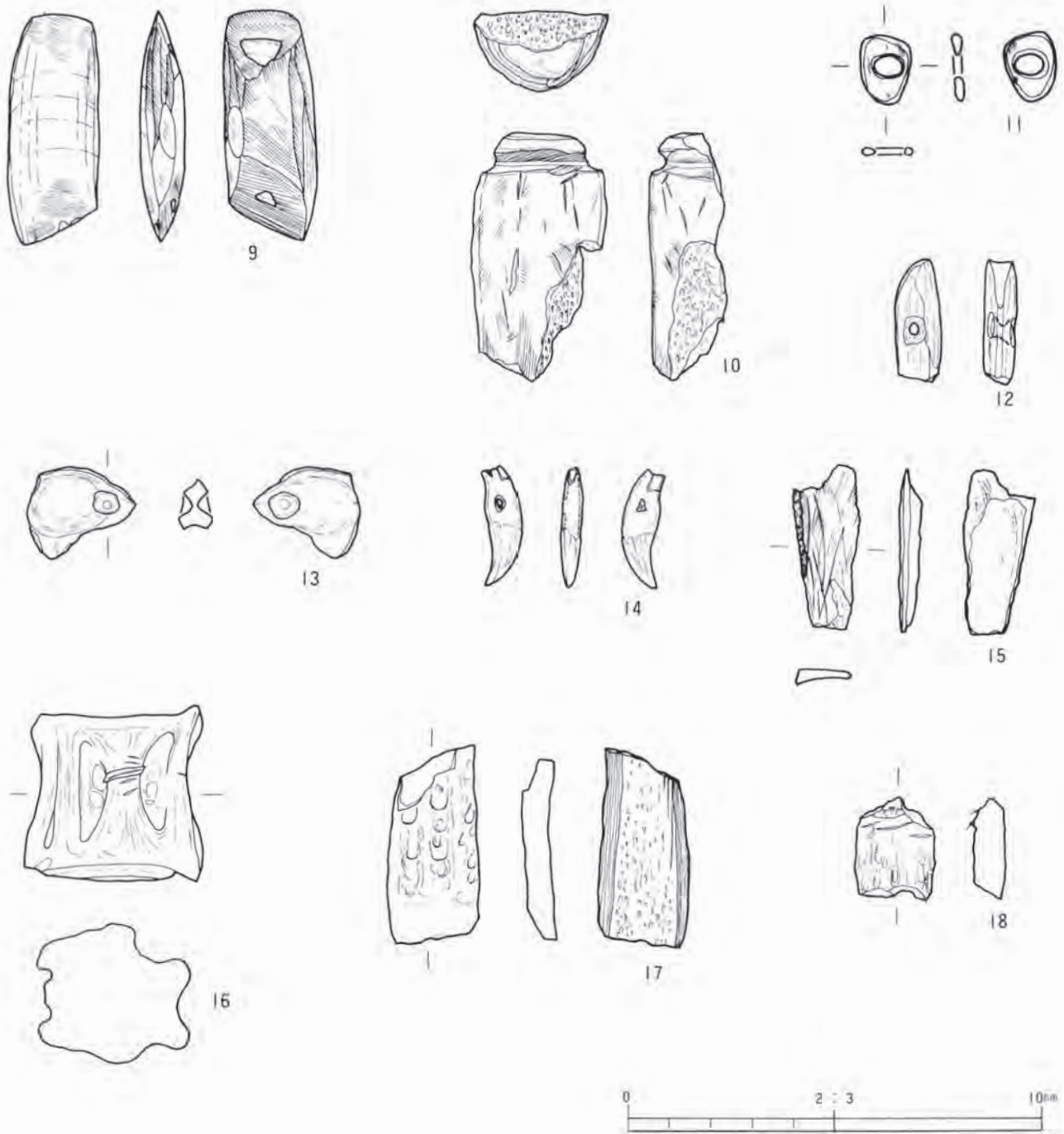
**棒状加工品? (10)** 鹿角を素材とする大形の製品である。端部のみを残すため全体の形状は不明であるが比較的丁寧に整形される。頂部付近には溝が1条めぐる。

**加工痕を残す素材 (15~18)** 15は剥離や擦痕を有するものである。17、18は鹿角片である。17は側縁~両面を研磨し板状にするが、外面には手がつけられていない。18は端部に打ち削り(chop)痕を有するものである。16はマグロの尾椎であるが、石器による擦痕がきつく施される。おそらくは解体痕かと思われる。

以上の骨角器類は今回の調査で出土した資料と基本的には類似した構成をとるものと思われる。また、出土地点からもほぼ縄文時代前期~中期初頭に伴うと思われる。



第42図 崎山貝塚出土骨角器 中島コレクション(1)



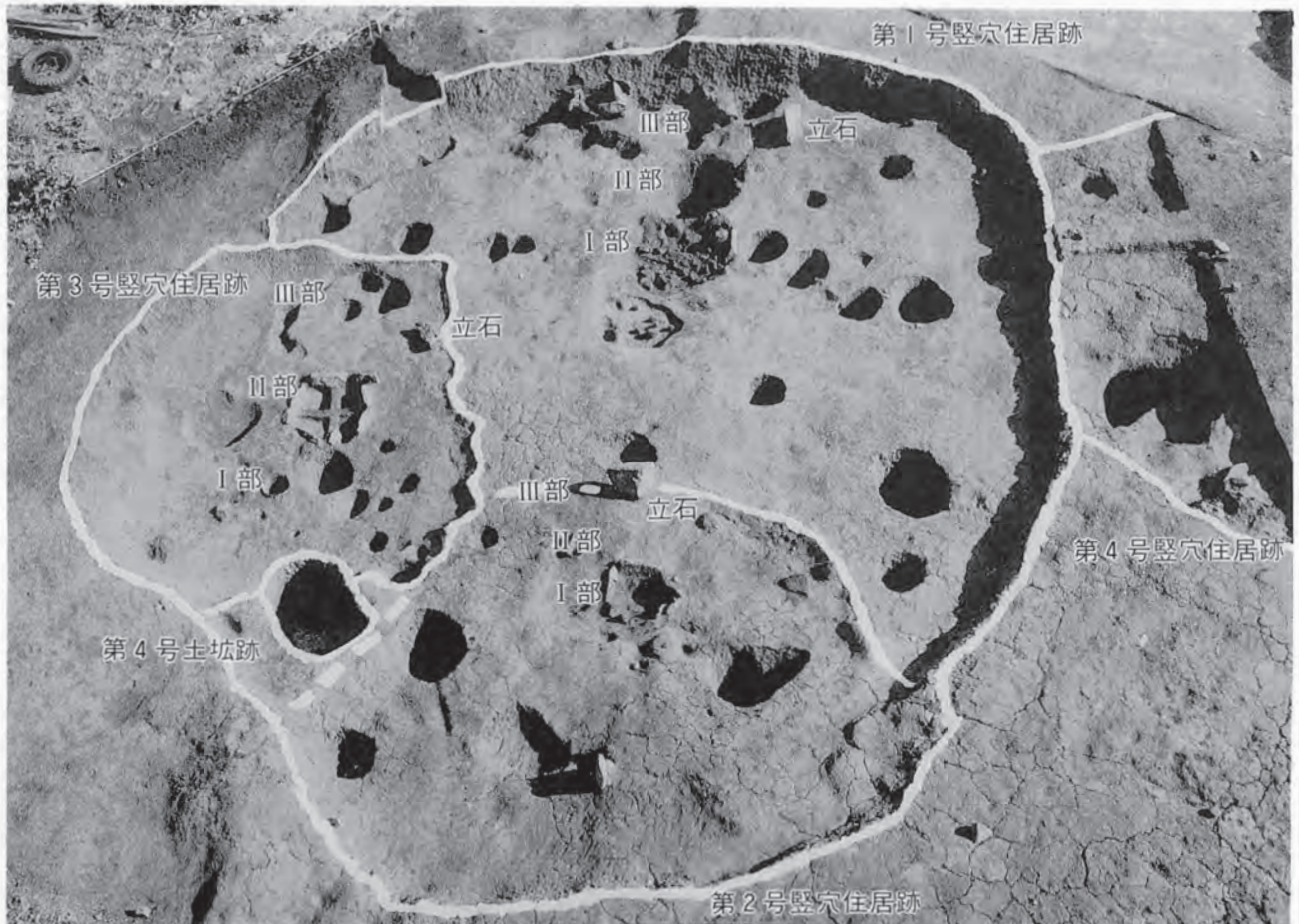
第43図 崎山貝塚出土骨角器 中島コレクション(2)

写 真 图 版



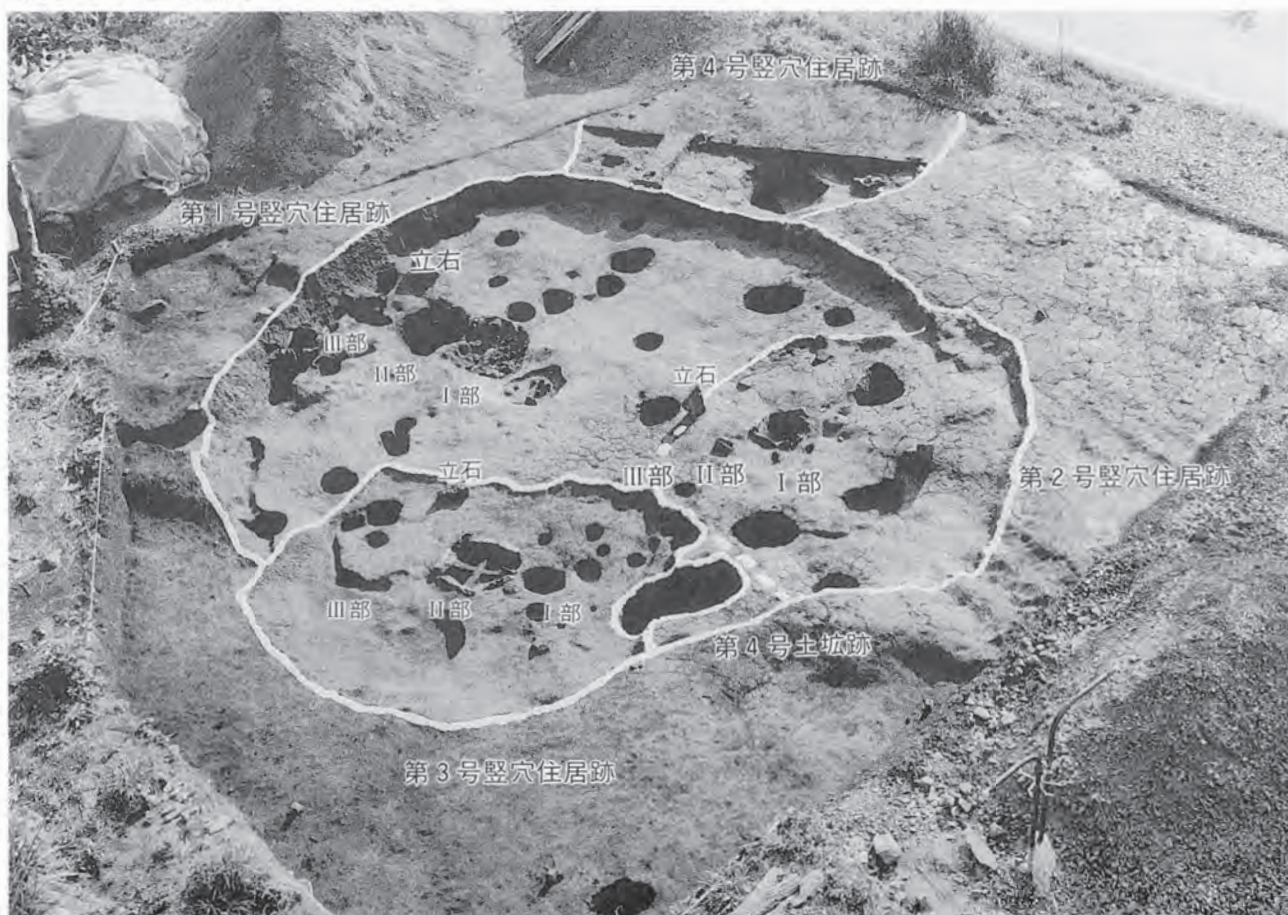


崎山遺跡群航空写真（北北西から）



白石遺跡第2次調査検出遺構

# 第2図版



白石遺跡第2次調査検出遺構



第1号竖穴住居跡炉完掘状况





第1号竖穴住居跡遺物出土状況（床面）



第1号竖穴住居跡P-2堆積状況

# 第4図版



第2号竖穴住居跡



第2号竖穴住居跡 炉



第3号竖穴住居跡 炉



第3号竖穴住居跡 土器埋設炉 (I部)

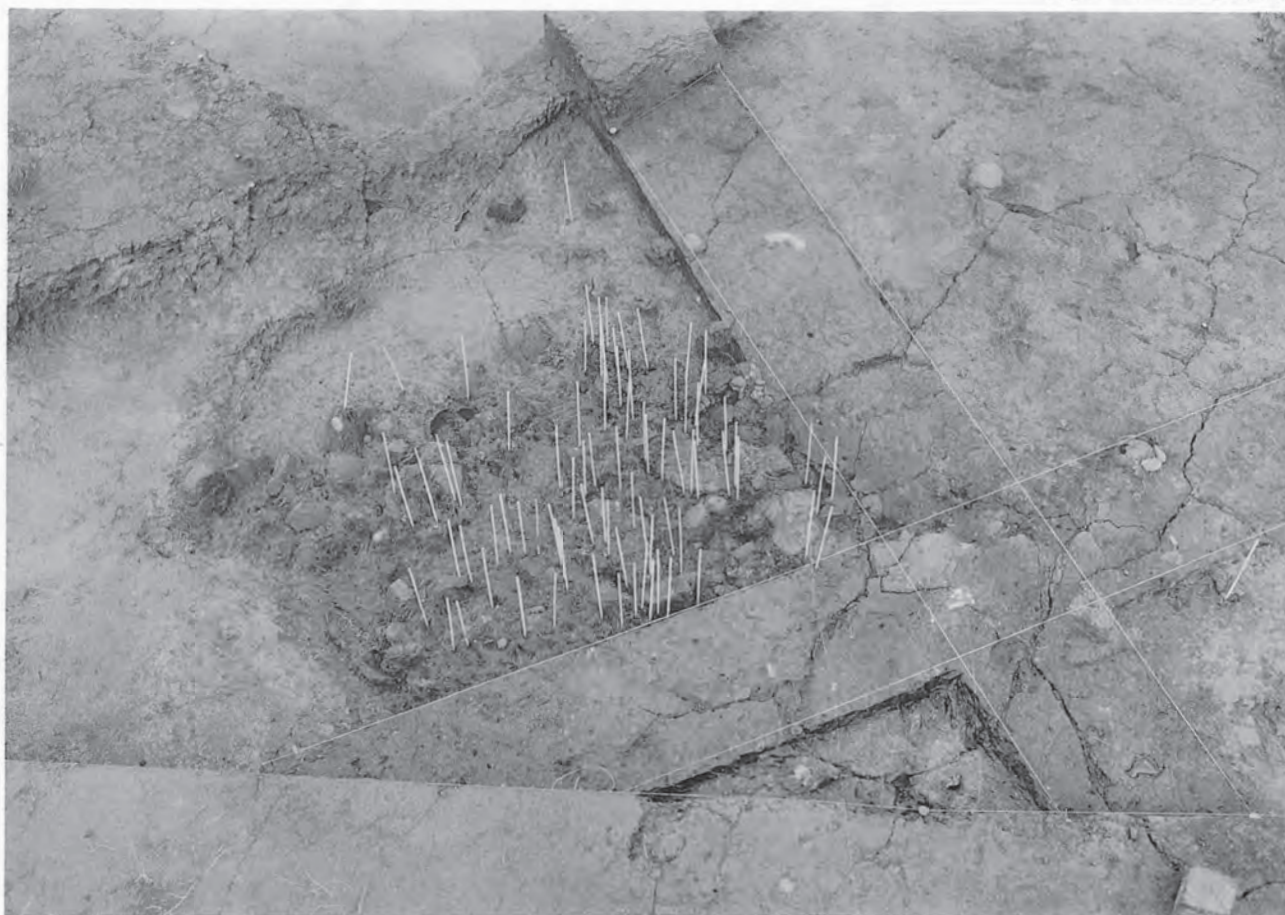
# 第6図版



第3号竪穴住居跡 石棒出土状況



第4号竪穴住居跡



第4号竖穴住居跡 フレーク・チップ等出土状況



第6号炉跡

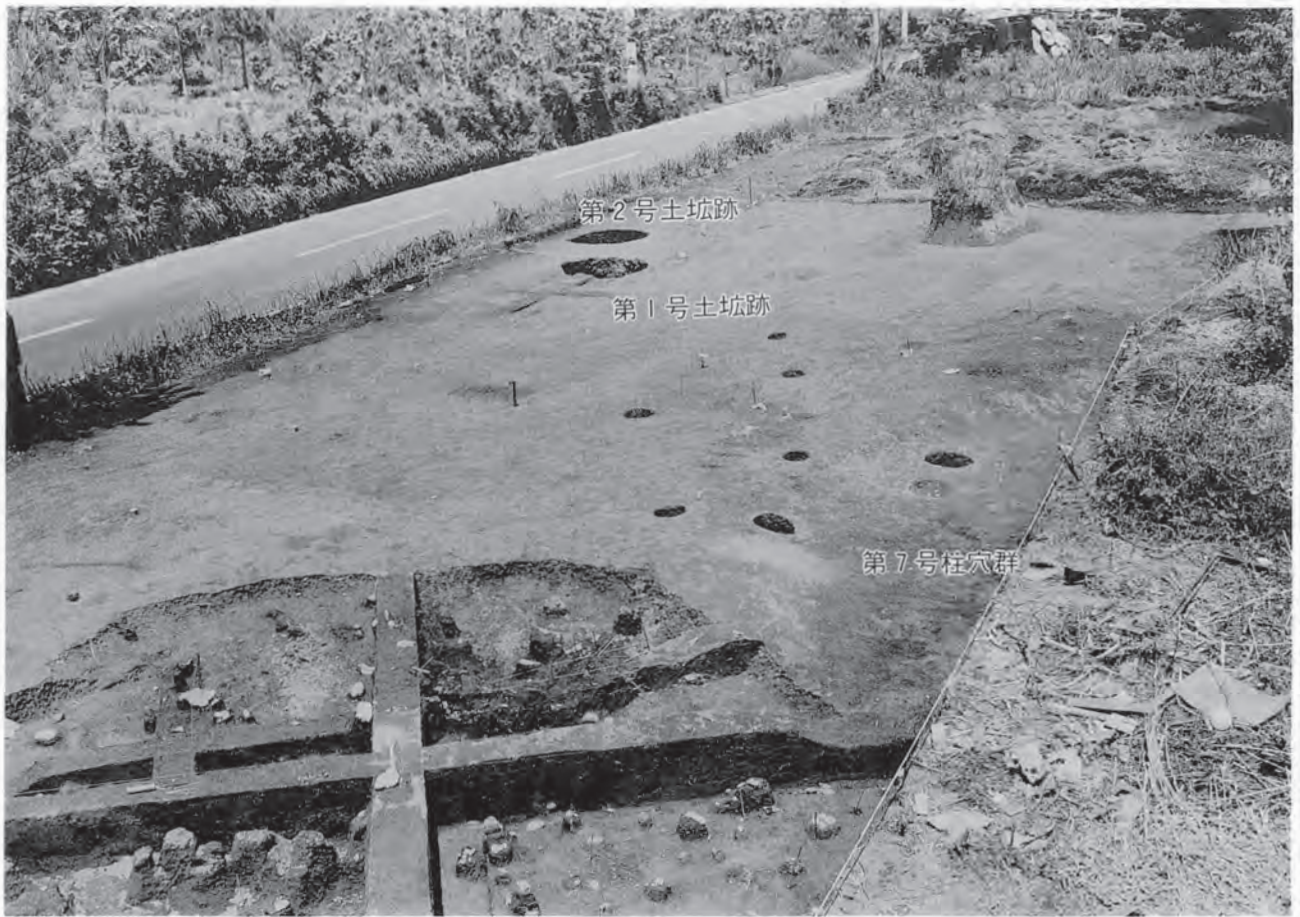
# 第8図版



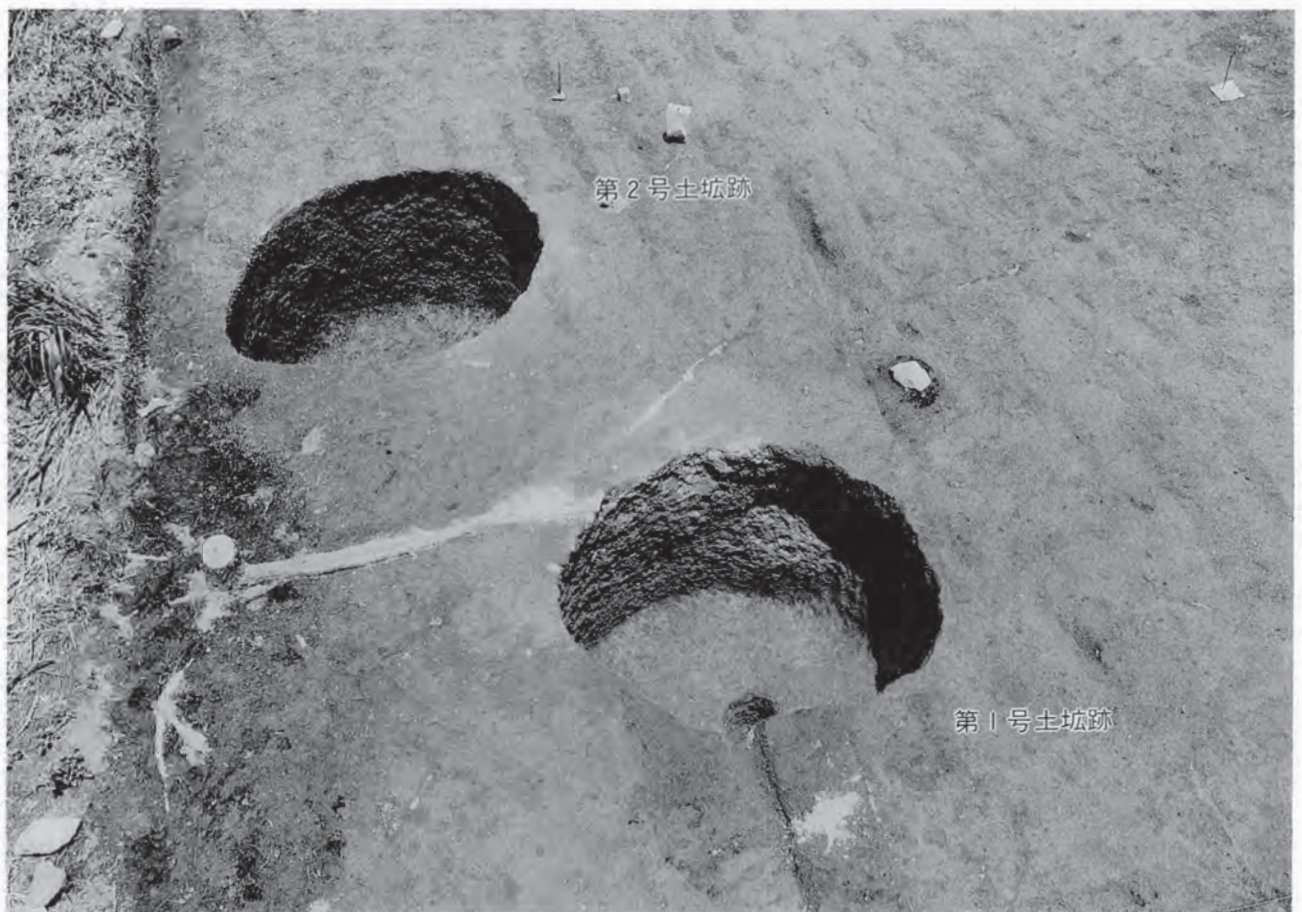
第6号竖穴住居跡 石囲炉



第6号竖穴住居跡 石囲炉

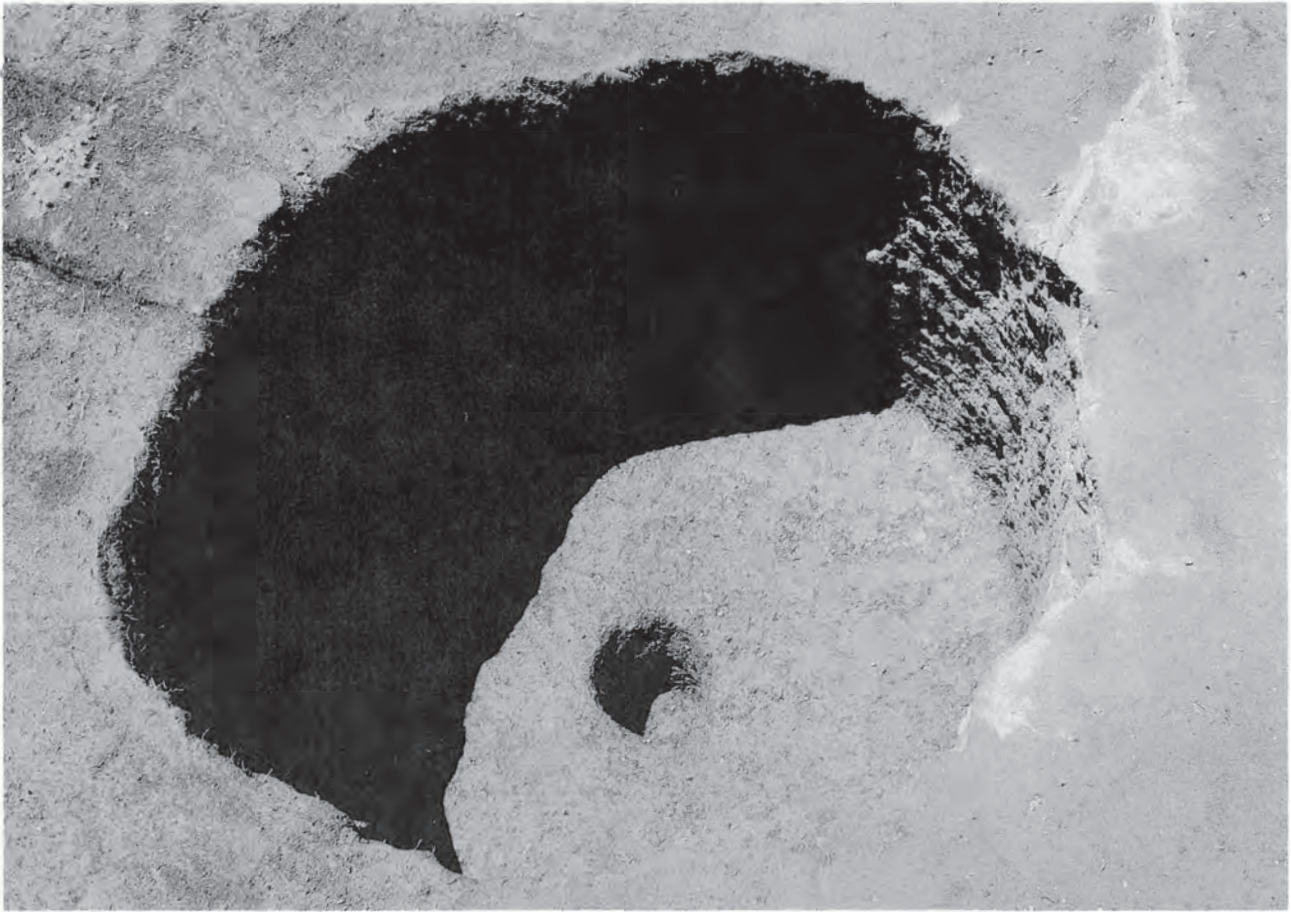


第1号土坑跡, 第2号土坑跡, 第7号柱穴群



第1号土坑跡, 第2号土坑跡

# 第10図版

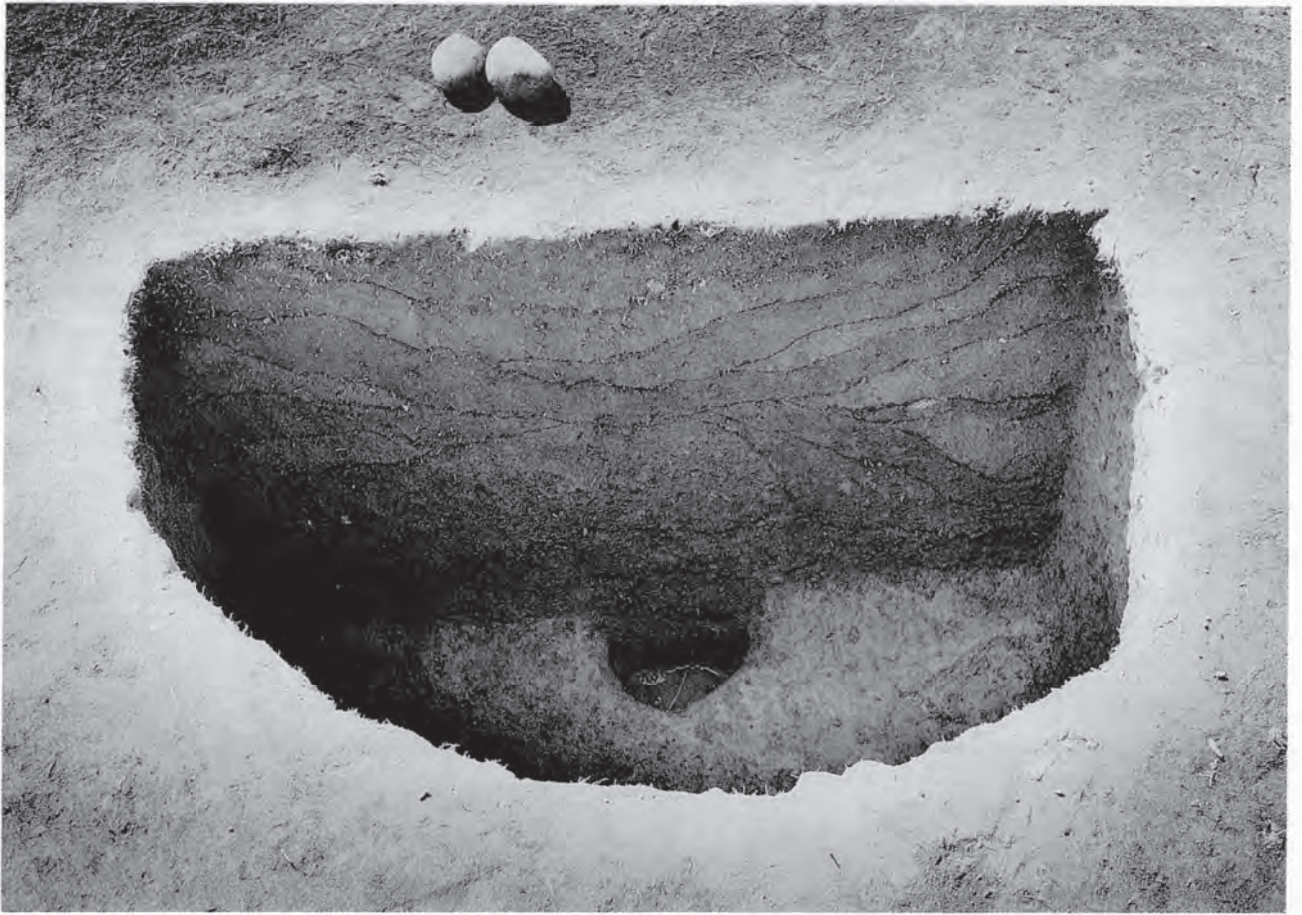


第1号土坑跡



第2号土坑跡





第2号土坑跡堆積状況



第4号土坑跡

# 第12図版



崎山貝塚航空写真（北東から）



崎山貝塚第2次調査区



B区 堆積状況



B区 遺物出土状況 (B-3層)

# 第14図版



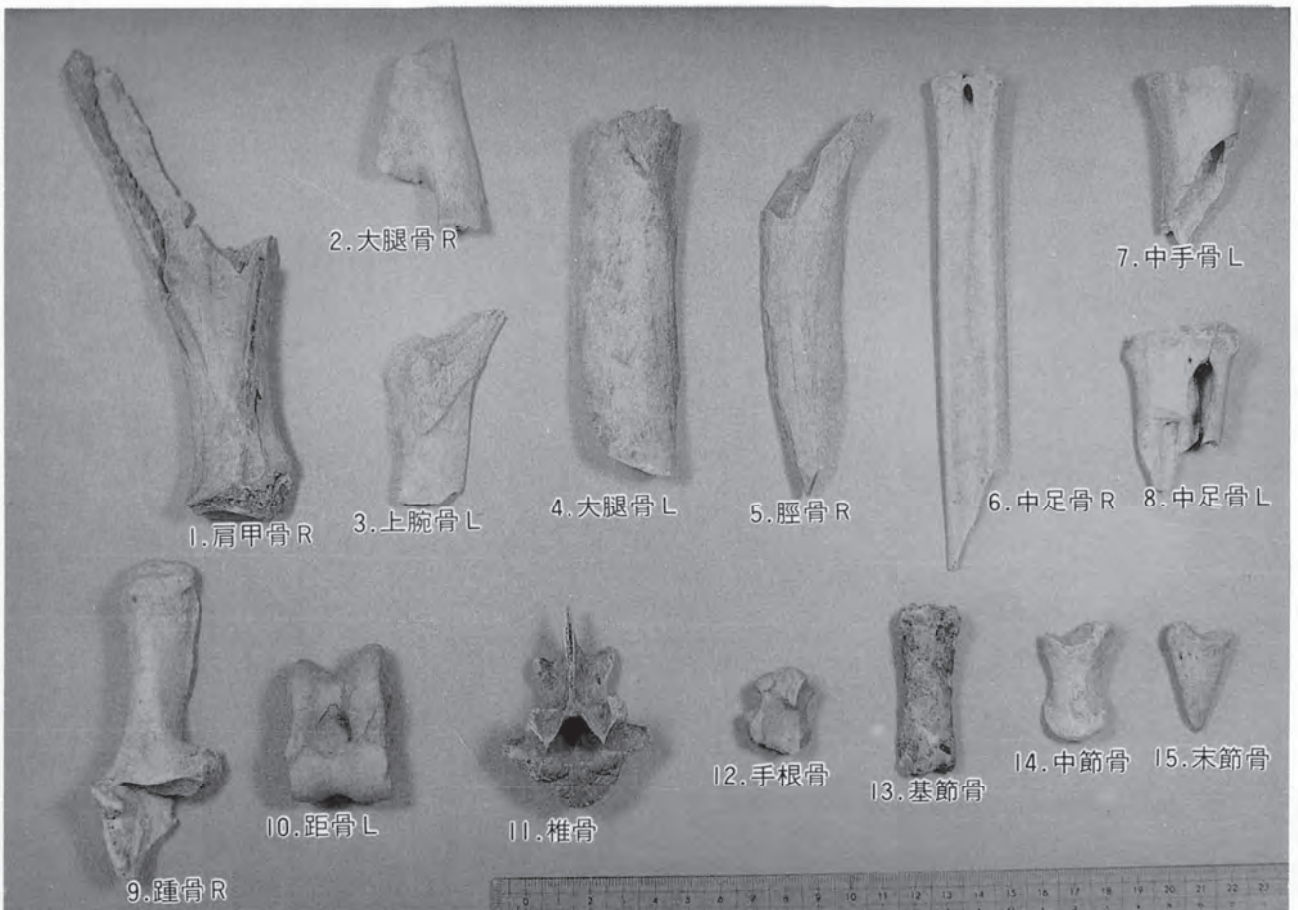
B区遺物出土状況（B-3層・シカ下顎骨L）



出土遺物（骨角器類）

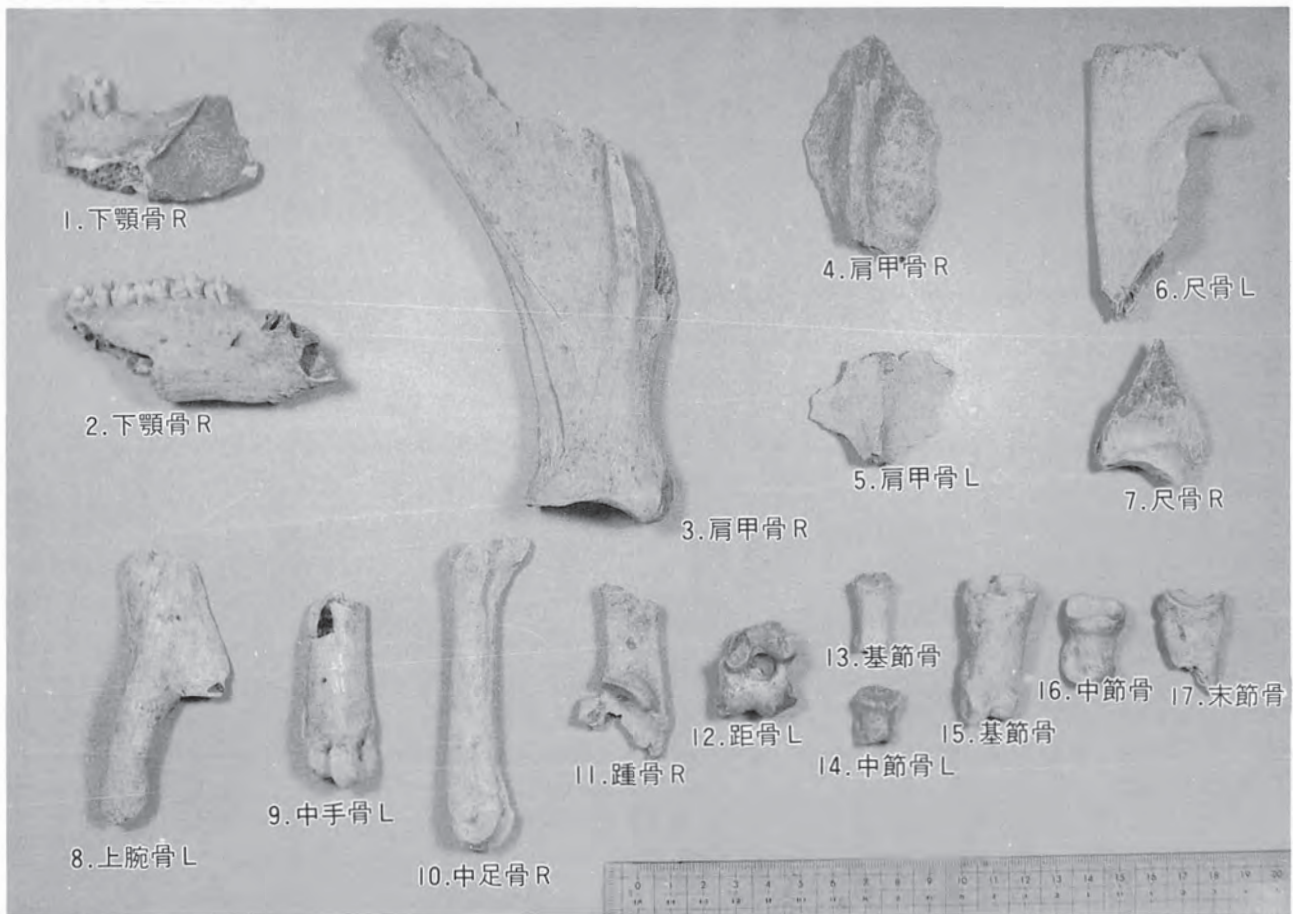


出土遺物 (シカ)



出土遺物 (シカ)

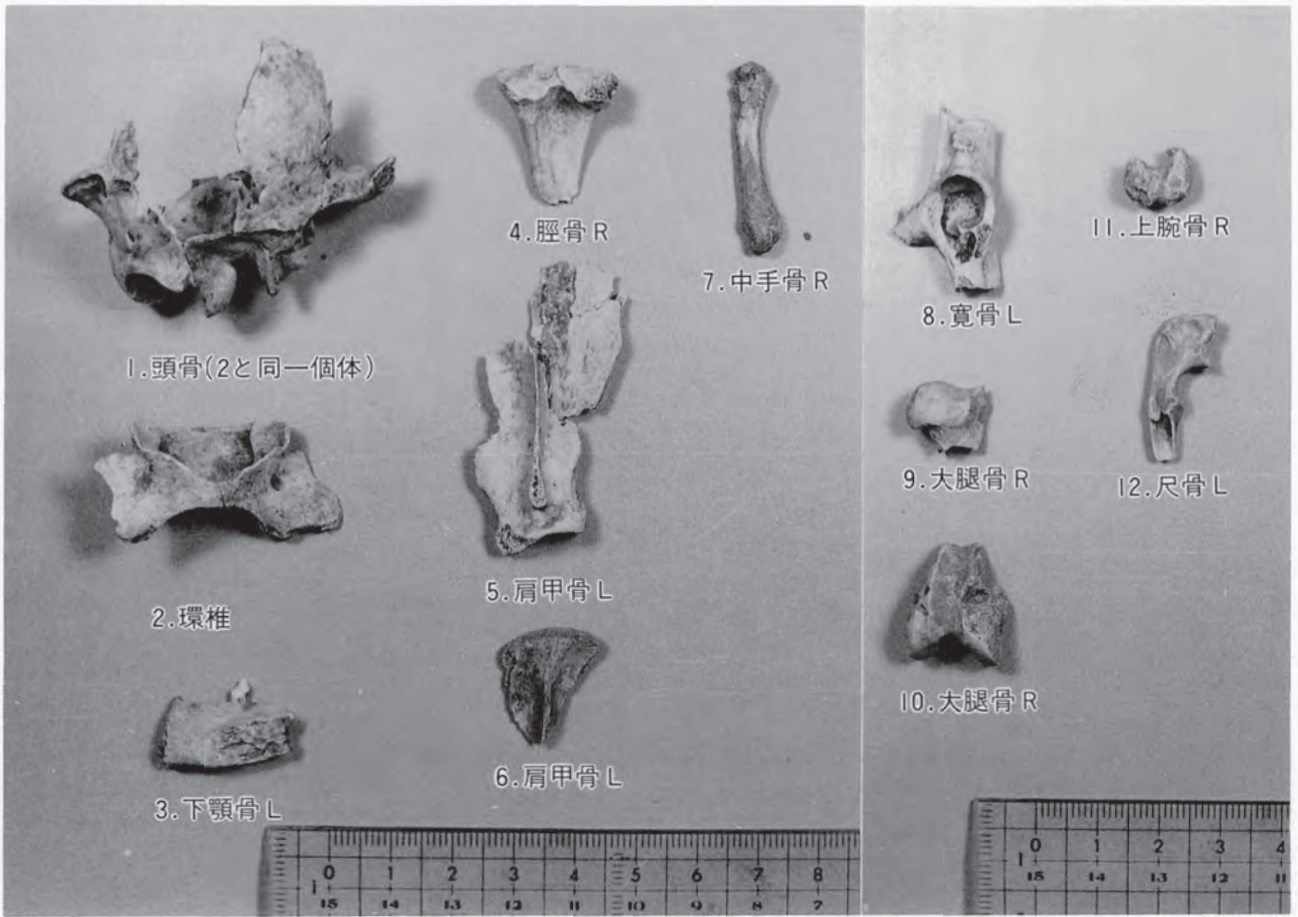
# 第16図版



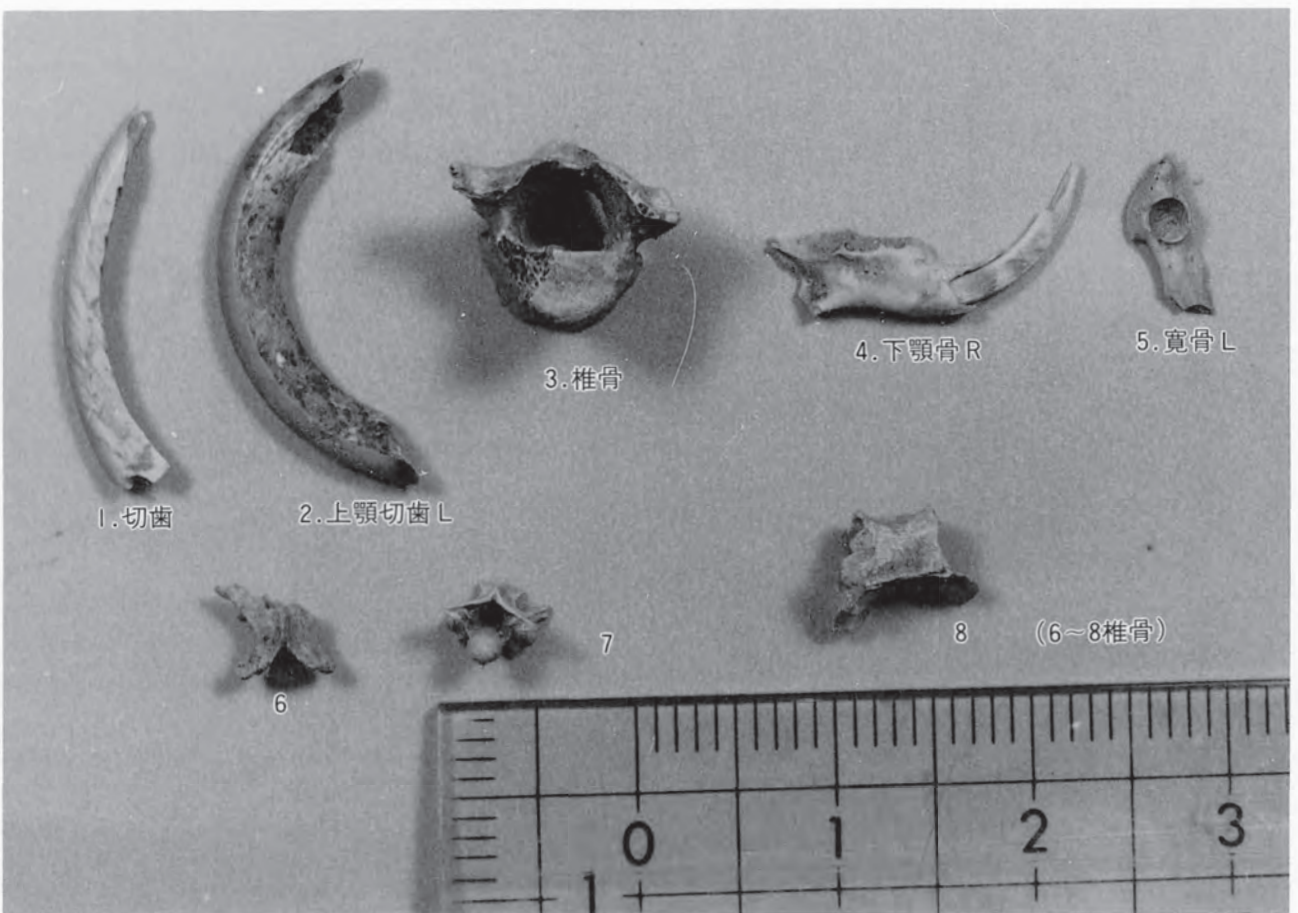
出土遺物 (イノシシ)



出土遺物 (オットセイ 1~6.イルカ科 7~9)



出土遺物 (タヌキ1~6、ウサギ8~12)

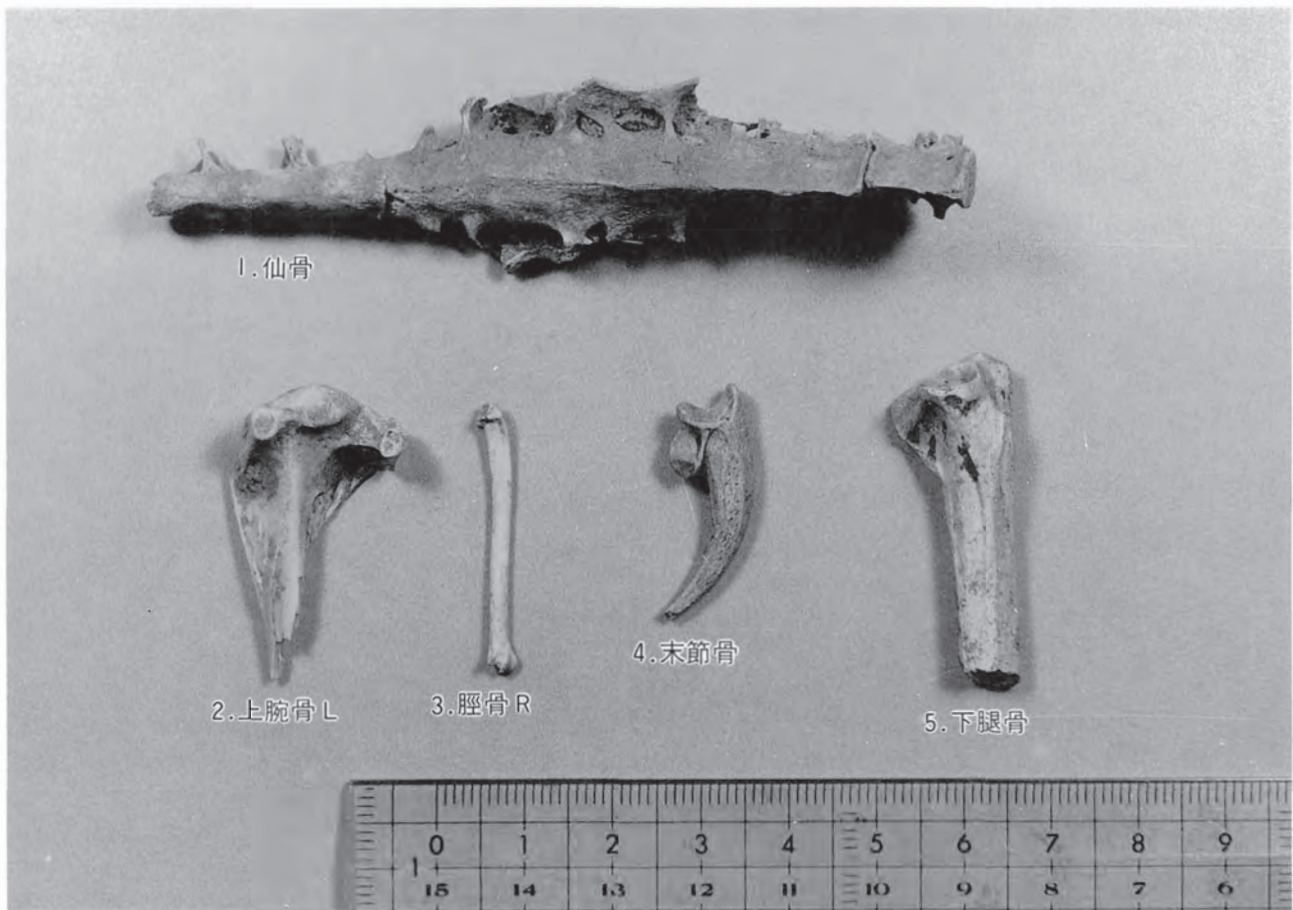


出土遺物 (ムササビ1,2、テン3、ネズミ科4,5、ヘビ科6~8)

# 第18図版

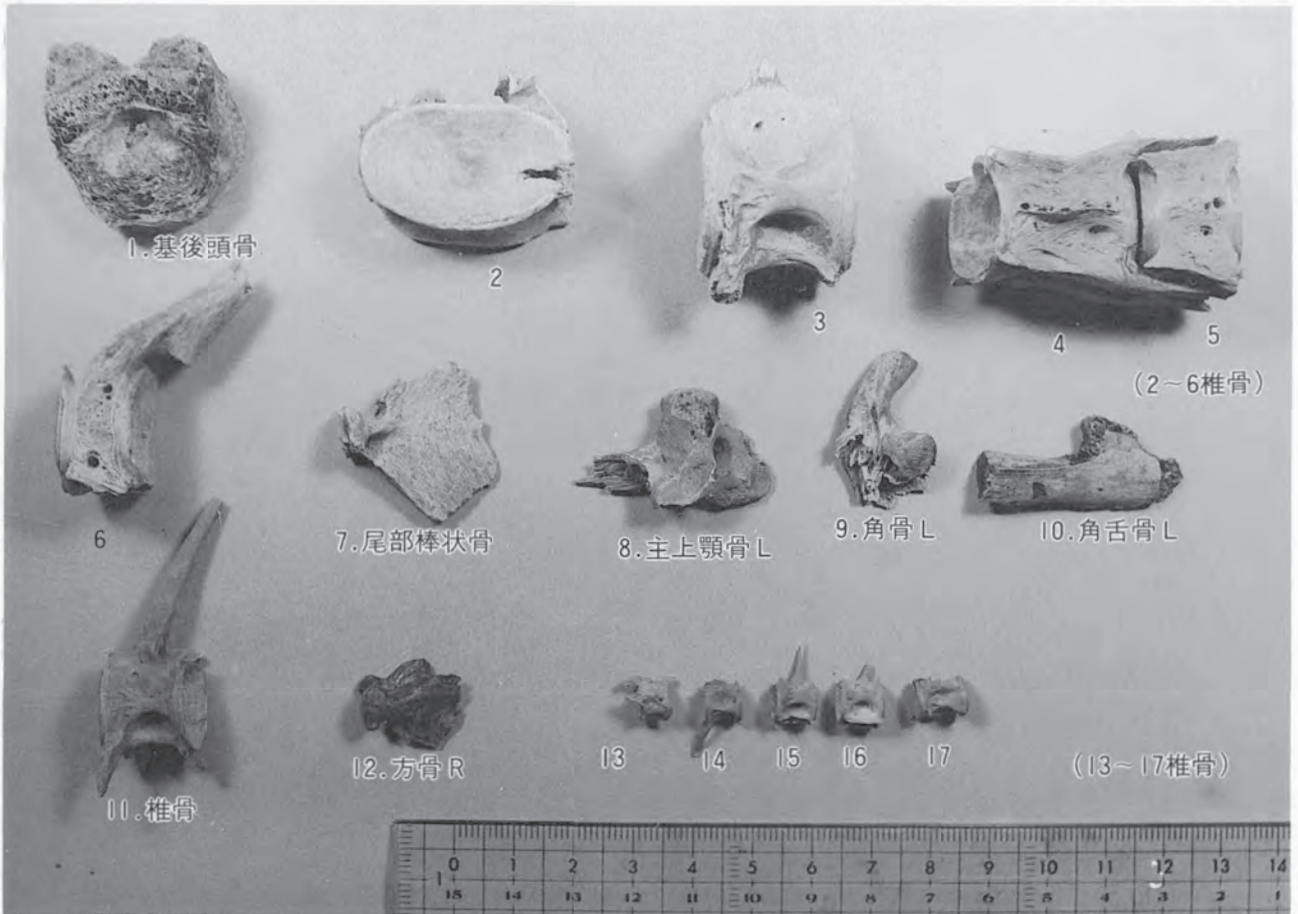


出土遺物 (サル1、ツキノワグマ2、イヌ3、マアナゴ4、オキタナゴ5、ニシシ6、イワシ7、ホッケ8)



出土遺物 (ミズナギドリ科2、ツグミ科3、ワシ・タカ科4、不明1.5)





出土遺物 (マグロI~12、マグロ小13~17)

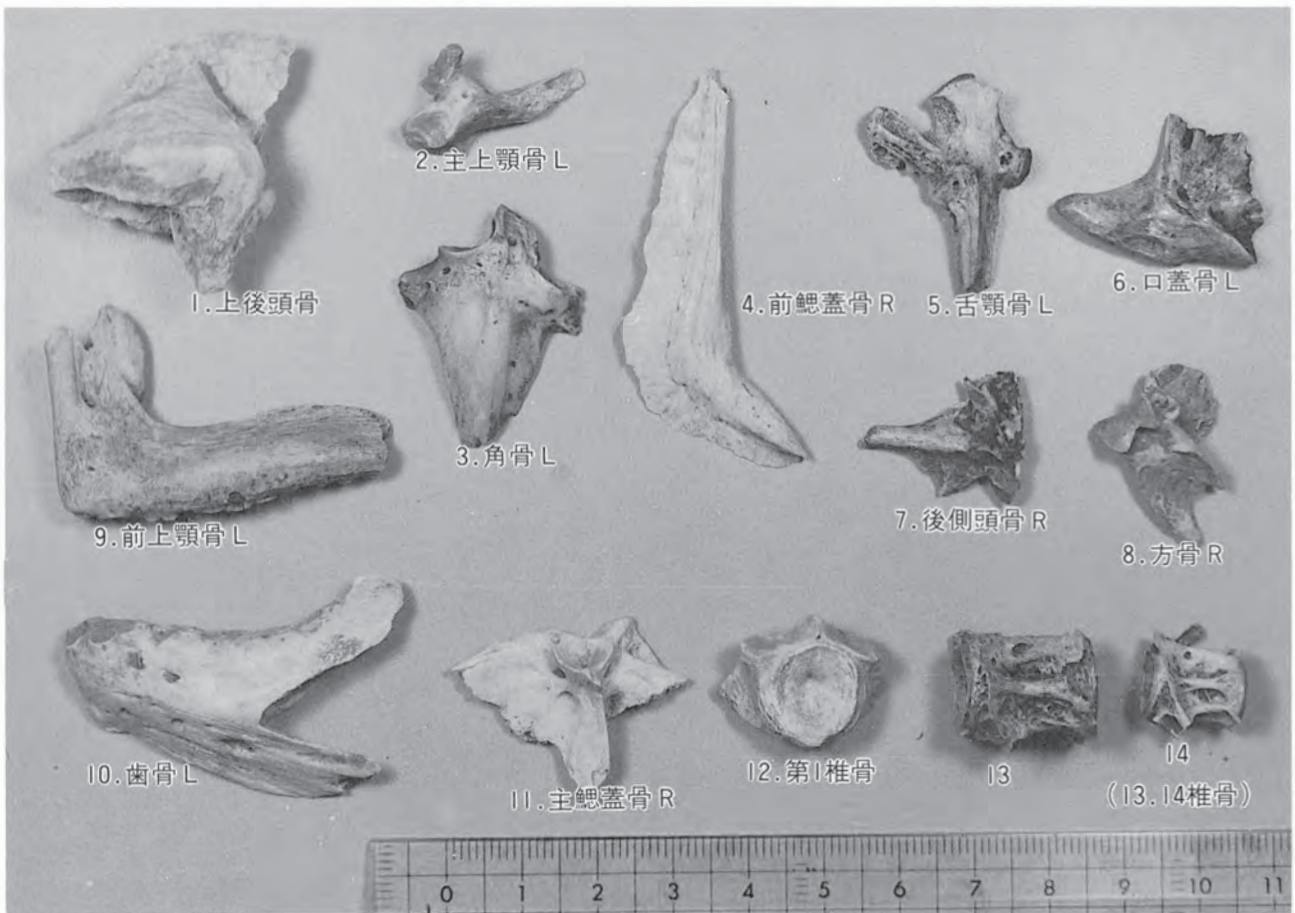


出土遺物 (カツオI~17、ソウダガツオ18~21)

# 第20図版

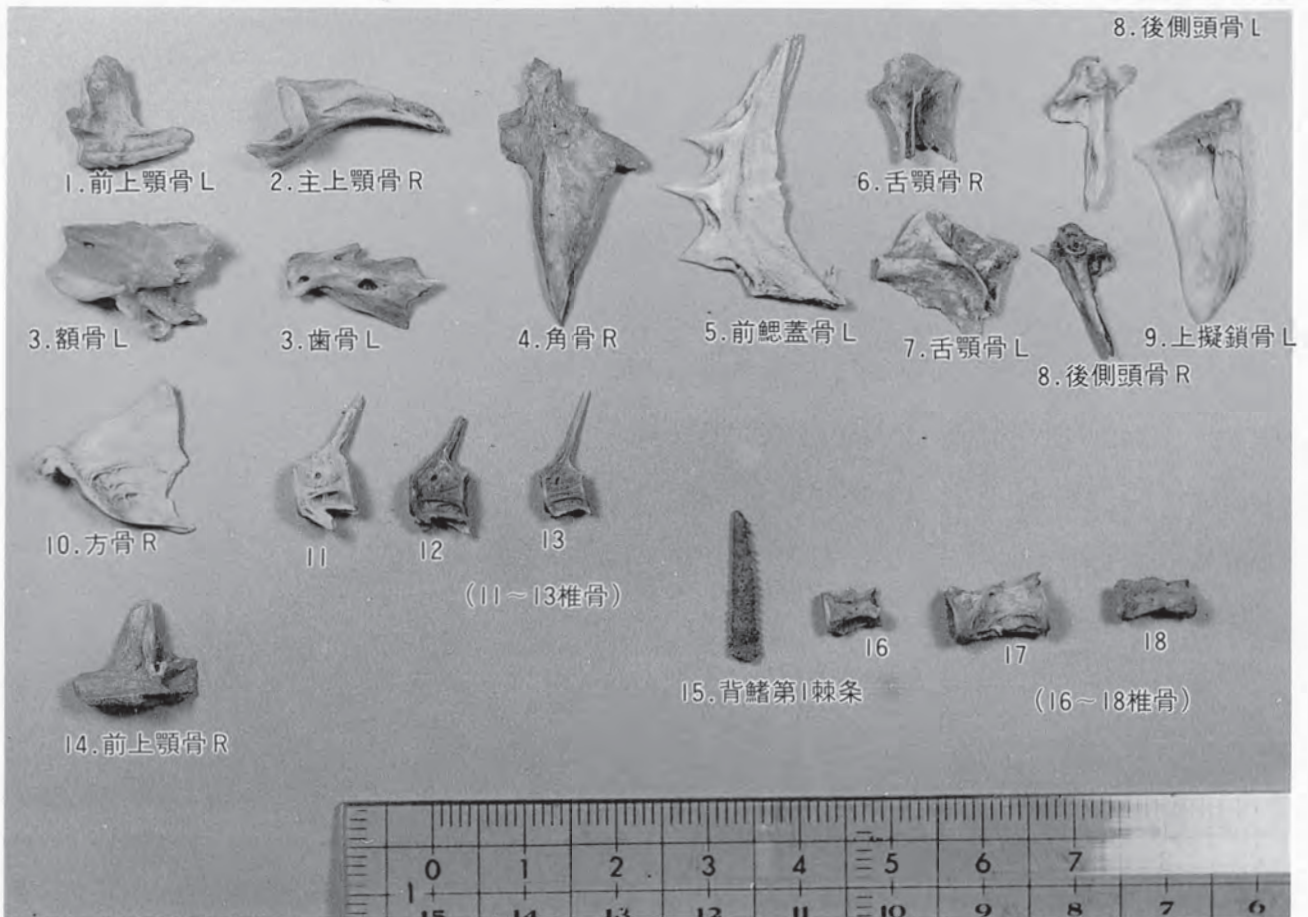


出土遺物 (ブリ1~10、カンパチ11)



出土遺物 (マダイ)

# 第21図版

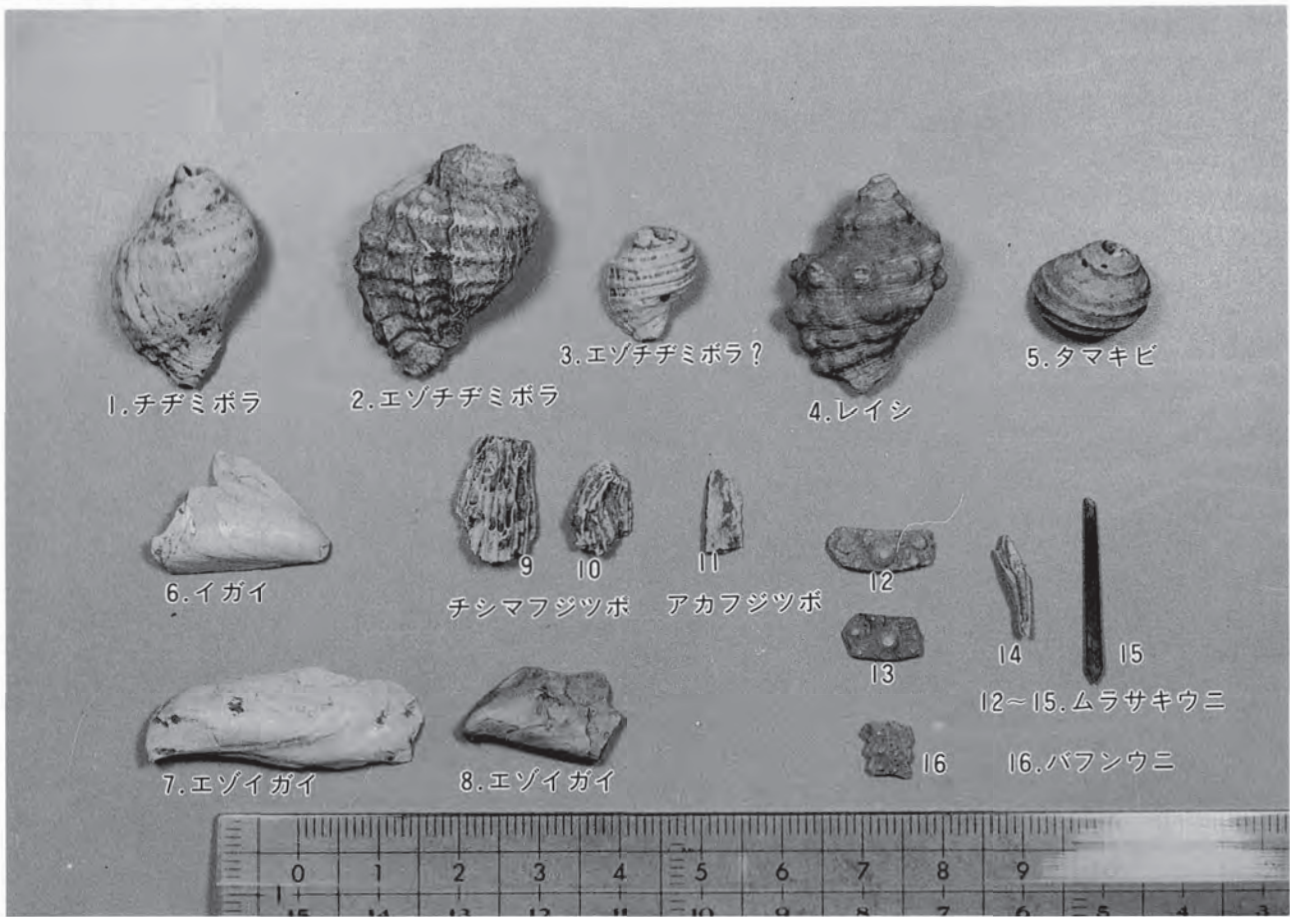


出土遺物 (カサゴ科1~13、カジカ科14、カワハギ科15~18)



出土遺物 (アイナメ1~9、サバ10~12、サケ科13~15、スズキ16~19、ツノザメ科20)

# 第22図版



出土遺物（腹足類、斧足類、節足動物、棘皮動物）



崎山貝塚出土骨角器類（中嶋コレクション）

（6.12は加工品ではない）

宮古市埋蔵文化財調査報告書15

## 崎山遺跡群 II

—昭和62年度発掘調査概報—

1988.3

発行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷  
岩手県宮古市大通2丁目5の2